

「トコ」と稱するものは、この科で最大なるものにして、嘴の先端より、尾の先端に至るまでの長さは、約二尺位で、嘴丈けの長さは、約六寸七分もある。

嘴は、唯大なるのみならず、時としては、食物を咬み切る爲めに、その縁邊に於て、著るしく鋸齒状をなしたものである。嘴は斯くの如く大なれども、海綿状の組織より成り、これらの無數の細胞中には、空氣を含めるを以て、その質は甚だ弱く、且つ重くなきを以つて、鳥の運動を妨げることはない。嘴の色は、「トコ、タウカン」に於ては、鮮かなる橙黄色にして、下嘴には、一大黒味を帯びたる斑紋がある。他の「タウカン」にては、上嘴が鮮かなる黒色と、橙黄色にして、下嘴が純白色のものがある。又ある「タウカン」にては、嘴は白赤、緑、黒色を有せるものがある。斯くの如く「タウカン」の嘴の色彩は、總べて美しいのである。

鼻孔は、嘴の基脚に位し、口角は、眼の前面に達する。脚には、短き強壯なる跗蹠部を有し、第四趾は、第一趾の如くに、後向するを以つて、二趾は前向し、二趾は後向する。翼は短く、尾は寧ろ長くして、圓いか又は楔状である。頭は大きく、舌は長くして、その縁邊に於て、總狀をなして居る。

羽毛は、綠色若くは深紅色、若くは橙黄色を帯びて、輝いて居る。又深黒色及び純白色

のものがあるが、輝ける藍色の羽毛を有するものはない。

この科のものは、常に森林に棲息し、主として果實及び種子を食し、又蕃殖期に於ては、昆蟲を食ふことがある。又時には小形の野鼠、及び蜥蜴を食ふこともあらうと云はれて居る。この類は、食物をば丸呑みにしないで、よく嘴で咬み砕くのである。されば、果實や、蟻をば、一呑みにしたる後は、間を置いては、唾嚢より、之をば口腔内へ吐き反し、嘴を合はせて、よく咀嚼するのである。

常に喬木の枝に止り、地上に来ることは稀れである。巢は樹木の空洞にありて、一産に一個の白色光澤ある卵を産む。この鳥の肉は、食用に供すべしと云はれて居る。

この科のものは、全く熱帶亞米利加産のものであるが、この地方に於ても、その分布は稍限られて居る。例へば西印度諸島、若くはペルー、アンデス山の西方には、發見せられて居ないで、主として、南亞米利加の北東部の赤道直下の地方及び中央亞米利加の森林地である。この科には凡そ六十種を有する。

〔一〕 大嘴鳥(丘博士命名) Ramphastus toco, L.

英名を「コダウカン」(Toco Toucan)といふ。本科中の最大なるものである。又嘴も體の大きさに比べて大きい。

〔二〕 杜鵑科 (Cuculidae)

體軀の大きさは、雀位より、ツタリガラス位の大きさである。嘴は中庸の長さであつて、その太さは、種屬に因つて變化するが、概してその輪廓に於て彎曲し、嘴の縁邊に近く鼻孔を有し、口角は眼下に位する。脚の跗蹠部は、短きか、又は中庸の長さであつて、第四趾も、第一趾の如く前向するを以て、二趾は前向し、二趾は後向する。而して前向せる二趾の基部には、膜を有する。翼は短きか、若くは長い。尾は常に長く、且つ圓味を帯びて居る。羽毛は、雌雄共に、常に同様にして、幼鳥は概して、親と羽毛を異にする。幼鳥は裸出するか、若くは甚だ僅かの茸毛狀の綿毛を有して、甚だ衰れむべき状態である。他鳥の巢中に産卵する種類にては、寄主に因りて養育せられ、その性亂暴にして、寄主の雛を巢外に逐ひ出すのである。

この科の中で、自ら巢を造るものにては、樹枝、粗糙の草等を集めて、粗末なる巢を造る。一産の産卵数は、數多にして、色は種屬に因つて異なる。而して北米産の黒嘴郭公 (Black-billed Cuckoo) (Coccyzus erythrophthalmus) 及び黃嘴郭公 (Yellow-billed Cuckoo) (Coccyzus americanus) の如きは、自ら巢を造るのである。他鳥の巢に産卵する種類にありては、寄主の卵によく似たる卵を産み、斑紋を有する場合が多い。然しながら、自ら造巢する種類

にありては卵殻は淡白色、若くは藍色であるのが常である。此科のものは、毛蟲其他の昆蟲又は小動物を食ひて、農業上有益である。尤もフィリピン群島の一なるバラワン島に産する「ノーエル」(Endynamis honorata)の如きは、果實を食ふのである。

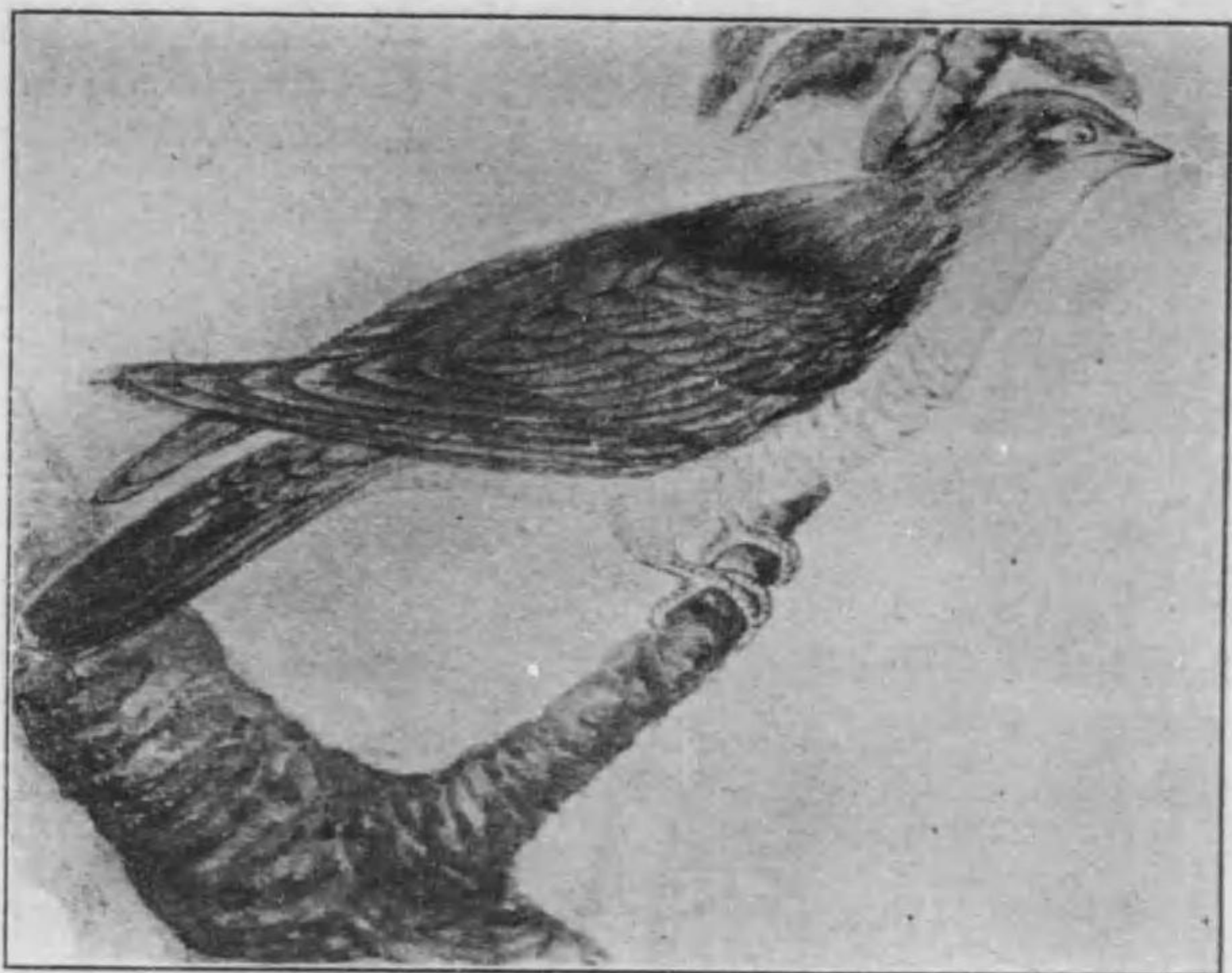
杜鵑科のものは、世界到る處に産し、約百六十種を含むが、大多數のものは、熱帯産のものである。而して、温帯地方に産するものは、皆渡鳥である。而して、この科の中で、長翼と短翼とを有して、樹上の生活をなす種類にして、東半球に産するものは、他鳥の巢の中に産卵するのであるが、西半球に産するものでは、自ら巢を構へるのである。又短翼にして、比較的長脚を有する、地上に生活する種類のもの、は、東西兩半球の熱帯地方に産し、自ら巢を營むのである。後者には、印度の「クロウ、フェザント」(Crow pheasant) (鳥雄の義) (Centropus sinensis) 南米の「ホワイト、アム」(White Ani) 又「グイラ」(Guira) (Guira guira) 及び「メキシコ、カリフォルニア、ニヤ」に産する「ロードランナー」(Road-runner) (道路走りの義) (Geococcyx mexicanus) などがあつた。

〔一〕 杜鵑 *Cuculus poliocephalus*, Latham.

英名を「リットル、カックウ」(Little Cuckoo) といふ。體軀の大きさは、稍々鶇位であつて、翼長は、五寸二分乃至五寸五分位である。頭上より尾部に至るまで、背部は全面灰黑色に

して、胸と腹とは白く、數多の黒い横條を有する。この黒條の幅は、一分に達せずとも、

半分よりは廣い。尾下の羽は、白色にして、黒條を有するか、若くは之を有しない。而して、翼は黒褐色である。杜鵑の羽毛の色と體の全觀は、よく鷹に擬態して、かゝる食肉鳥の視線を避くるに、適するのである。口腔の内部には、赤き肉塊を有し、嘴の基部は黄色なれども、末端に至るに従ひ黒くなり、眼瞼と脚とは黄色である。



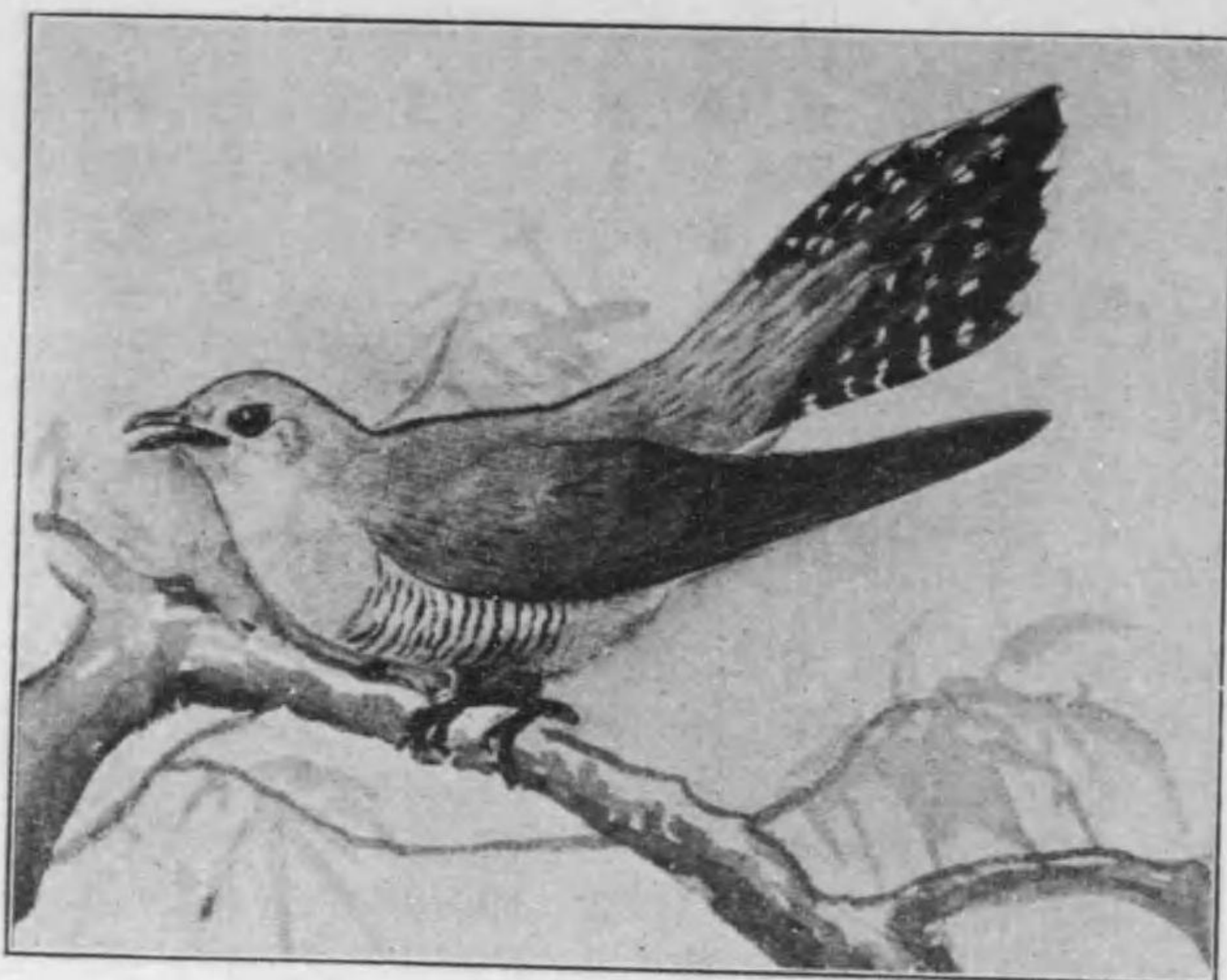
第二百四十四圖 杜鵑

この鳥は初夏、本邦に渡來し、秋の初めに南方に去る候鳥であつて、元來熱帯産の鳥である。その鳴聲は「ケキヨ、キヲ、ケ、キヨ」といふが如しである。その蕃殖區域は本邦、支那、印度、セイロン、亞弗利加に亘つて居る。本邦にありては、鶇の巢を狙つて之に産卵する。その産み附ける卵の數は、普通一つであるが、時には

二つ産むこともある。斯く一巢に少數しか産まぬことは、その巢の構主に見出されぬ爲めである。一つの巢へは唯一つしか産まなくても、他の巢へ行つて、又一つ産み、又他へ行つて一つ産み、斯くの如く、一つ宛の卵をば、多くの鶯に孵化させるのであらうと杜鵑及郭公（鶯の類）の思はれる。杜鵑が鶯の巢に産卵する際、産み附ける卵の数が、少いのみならず、色は鶯の卵の色と全然同一であるが、形状が少し大い丈の相違がある丈けである。所で、鶯の卵は、一面に美麗なる赤色で、これには斑紋を混じない。また卵の大きさは、幅が五分許で、長さは六分許である。

〔二〕 郭公（くわくこう） 又かつぼう又かつこく又さんごごり又
たねまき（たねまき）り Cuculus Canorus, Linn.

英名を「コンモン・カックウ」(Common Cuckoo) といふ。體軀は杜鵑よりは稍大きい。而して、翼長は六寸七分乃至七寸六分である。背部は灰黒色である。胸と腹とは白色にして、數多の黒き横條あれども、この黒條の幅は、凡そ半分位にして、杜鵑のよりは細い。その形貌は、大に鷹に酷似し、これと擬態するのである。そこで歐羅巴の俗間には、秋季になると、この鳥は鷹に變化するのだといふ迷信が行はるゝ位である。眼は火の如き赤色にして、その縁邊は黄色である。嘴は暗色にして、其の隅の方は、稍赤いのである。



公 郭 圖 五 十 百 二 第

この鳥は、杜鵑と去來の時季を同ふする候鳥である。その鳴き聲は「カッコウ」といふが如く聞ゆる。その蕃殖區域は、本邦より南部西比利亞を経て歐州に及んで居る。本邦に於て、郭公は筒鳥と同じく、頬白の巢を搜して、之に産卵するが、歐州に於ては、郭公はミッソサワイの一種、コマドリ（コマドリ）の一種（*Eurithacus rubecula*）セキレイ等の巢に産卵するを常とする。また亞弗利加及び支那にては、トキの類や、ノビタキの類の巢中に産卵し、トルキスタンの廣野にては、頬赤類（頬赤類）の巢中に産卵する。又ラブランドにては、セキレイの一種、及び「キアネクラ、スエキカ」(Cyanocitta stelleri) の巢中に産卵する。アンダルシアにては、郭公の一種なる大斑紋郭公（G. caeruleus） (Cyanocitta stelleri) の巢中に産卵する。アンダルシアにては、郭公の一種なる大斑紋郭公（G. caeruleus） (Cyanocitta stelleri) の巢中に産卵する。

内外普通動物誌

ent Spotted Cuckoo) (*Coccyzus glandarius*, L.) は西班牙カササギ (Spanish magpie) の巢に産卵することが度々びであるといふことである。斯くして郭公の類が産卵の爲めに選ぶ鳥の数は實に百四十五種の多きに達することが判然せられて居るのである。郭公の雌が他鳥の巢の中に侵入すること能はざるときは一旦地上に卵を産み落したる後已れの嘴にてその卵をば啄み上げて之をば他鳥の巢の中に落すといふことである。

博士レイ氏 (Dr. Rey) は郭公の卵をば七百個以上も採集したのであるが、これらの中で養母の卵と色彩に於て似た卵の数の割合は、唯約三割位であるといふことである。然しながら氏がヒタキの一種 (*Ruticilla phoeniceus*) の巢より得たる六十七個の郭公の卵を検せしに、その中五十七個は藍色であつたといふことである。ヘルマン氏が某採集家の談話を記述する所に據れば、郭公の卵の藍色なるものを見たるは、唯一個のみであつた。又ヘルマン氏が某氏より聞いた所に據れば、一つの小さな巢の中で郭公の卵の二個を發見することは、珍らしいことであつたといふのである。故小川三紀氏が、動物學雜誌に「富士山麓の鳥界」といふ論説を書かれた中に、氏が長池で、土地のものより聞いた所によると、郭公の卵は一つしか、同一の巢の中にならぬといふことである。つまり郭公は他鳥の一つの巢には、一卵宛諸方に産み附け回る者であつて、あちらこ

ちらの巢中に、産み附ける卵の總数は、ヘルマン氏に據れば、二十乃至二十二に達することもあるが、通例は十一乃至十二個であるといふことである。

郭公や杜鵑などの雛は、孵化するや否や、その成育が速かなるが爲めに、巢中に於て、已れ獨り利益を占め、その養母の恩を思はずして、反つて我儘勝手の振舞をなし、他鳥の雛の弱きにつけこみ、その群團中に推し分けて、潜り込み、之をば自分の背上に負ふて、遂に巢外に抛げ落すのである。されば、この點は、他の有益鳥の蕃殖に、幾分の妨害を與ふることである。且つ又杜鵑類の雌が、他鳥の巢中に産卵するに當りてや、他鳥の巢をば、甚しく荒廢させるのである。然しながら、前にも述べた如く、總べての鱗翅類の幼蟲及び、其の他の有害昆蟲を飽食するを以て、山林農業上に與ふる利益は、極めて莫大のものであつて、これが爲めに、本邦にては、この類の捕獲を禁止せられて居る。

(三) 筒鳥 又 ぼんぼんざり 又 おほむしくひ 又

たねまきざり *Cuculus saturatus*, Hodgson.

英名を「ヒマラヤン、カックウ」 (*Himalayan Cuckoo*) といふ。稍小形の杜鵑類にして、翼長は五寸七分乃至六寸五分である。羽色は郭公に似たれども、胸と腹とにある黒色の横條は、最も幅廣くして、一分に達するのである。尾羽はその末端に於て、少しく下方に傾

いて居る。

五四六

この鳥は、前二種と同じく、春來り秋去る所の候鳥にして、毛蟲を捕食するから、保護鳥となつて居る。その鳴き聲は、一種異様のものにして、ボン／＼と聞ゆる。その蕃殖區域は、本邦支那、ヒマラヤ地方より、蒙古、東部西比利亞にまで及んで居る。

〔四〕 慈悲心鳥じひしんてう又じひしんてういぢ Hierococyx fugax (Horsfield)

英名を「アムール、カックウ」(Amoor Cuckoo)といふ。大さ及び形狀は、郭公に似て居るが、胸部と腹部とは、淡赤茶色を帯び、胸には横條がない。尾羽は灰褐色にして、數條の黒條を有し、その末端は赤茶色である。この鳥は、やはり候鳥である。以上述べた四種の中で、一番多いのは筒鳥で、次は郭公、その次は杜鵑、又その次は慈悲心鳥といふ順である。而して慈悲心鳥の蕃殖地は、黒龍江附近、及び本邦にして、冬季は南部支那及びフイリビ
ン諸島に行くのである。

〔二〕 喙木鳥科 (Picidae)

體軀の大さは、鳥大より山雀大である。嘴は中庸の長さで、硬直にして、鑿狀をなし、以つて、樹幹を叩き、其中にある木蠹蟲の有無を検し、これに穴を穿つに適する。脚の跗趾部は短く、且つ強壯なる鋭るごき鉤爪を具へ、二趾は前向し、二趾は後向する。尤も時に

は、第一趾が退縮するか、若くは缺乏する爲めに、後方には、唯一趾を有するものがある。翼は中庸の長さあるか、若くは短く、尾は中庸なるか、若くは短く、伸直にして、抵抗ある翹より成り、その末端は截り取られたるが如くなれるを以つて、之に因つて體軀をば樹幹に支へ、攀走するに巧妙である。頭は大きい。或る種にては、頸は寧ろ長いものがある。舌は甚長く、扁平角質にして、その先端には、矢狀をなせる短き鉤を多く列生し、樹幹内に棲む昆蟲の幼蟲などを、引き懸けて、引き出すのに適する。舌下腺は著るしく發育し、これより分泌する唾液は、粘稠にして、昆蟲を附着するに適つて居る。

羽毛には、季節的の變化なく、雌雄間には、唯僅少なる相違を見るのみである。幼鳥は親と殆んど相違なく、その雌雄の區別は、よく判然する。幼者は裸出し、且つ誠に哀れむべきものにして、親鳥に因りて、養はれるのである。

この科のものは、濠太利亞を除き、地球上の各地に棲息し、約三百五十種を有する。僅少の種類は、地上若くは岩石上に徘徊するものあれども、大多數のものは、常に森林の樹上に棲息し、樹幹をば底部より漸々に上方に、急に跳躍しながら、少し宛攀ち上り、或は下方に、或は横へご進み行き、その嘴なる鉄槌を用ひて、樹幹をば叩き回はるのである。而して人の姿を見れば、樹幹の反對の側へご、隠れて仕舞うのである。

巢は、樹木、若くは河畔等に穿てる穴にありて、卵の数は平均四乃至七個である。卵殻は純白で、且つ光澤を有し、二週間、若くはそれより少し餘計の時日にて、孵化するのである。

啄木鳥の或る種類にては、獨り樹幹に損害を與ふるのみならず、電信柱に穴を穿ちて、その挫折を促すものあれども、コデラ、コアカゲラの如き小形の種類にては、樹幹に棲むヂムシ及び皮裡に潜伏せる甲蟲等の昆蟲を啄食すること多くして、樹木を害することはいないのである。之を要するに、啄木鳥が、害蟲を驅除する利益と、樹幹を敲きて穴を穿つ害とは、孰れが重きかは、一様に斷定することが出來ないのであるが、現行の狩獵規則では、これを保護鳥として、認めるやうになつたのである。

〔一〕 綠啄木鳥又黃啄木鳥 *Geococcyx aokera* (Temm.)

英名を「ジャバニース、グレート、ウッドベツカー」(Japanese Great Woodpecker)といふ。凡そ鶉大なれども、少しく彼れよりは肥太する。體の上部は、濃綠色にして、體下は淡綠色である。眼下なる黒條には赤點を有する。本邦の南部には、四時棲息すれども、北海道には、棲まないものである。

〔二〕 山啄木鳥 *Geococcyx canus* (Gmelin.)

英名を「グレー、ヘッドド、グリーン、ウッドベツカー」(Grey-headed Green Woodpecker)といふ。頭は灰色にして、眼下の黒條には、紅色部を有しない。雄は額より前頭にかけて、紅色を呈し、全體灰色で、背は黄色を帯び、上尾筒は美紅色である。而して雌は、後頭部のみ紅色である。この種は、北海道のみに産し、その蕃殖區域は、北海道、北支那、西比利亞、歐羅巴にまで擴がつて居る。

〔三〕 熊啄木鳥 *Picus martius*, Linn.

英名を「グレート、ブラック、ウッドベツカー」(Great Black Woodpecker)といふ。大形の啄木鳥にして、翼長は凡そ七寸五分乃至八寸一二分である。體は黒色なれども、雄は額と頸背とは赤く、雌は頸背のみ赤色である。この種は北海道のみに産し、その蕃殖區域は、本邦より南部西比利亞を経て、歐州及びスカンヂナビアにまで及んで居る。

〔四〕 きたゝき又あまのじやく *Picus richardsi* (Tristram)

英名を「トリストラムス、ウッドベツカー」(Tristram's Woodpecker)といふ。本邦には甚だ稀有の鳥にして、嘗つてリチャーズ氏 (Richards) が始めて、之を我が對島にて採集したものである。大形の鳥にして、翼長は約八寸四分もある。胸、腹、背、臀、腋下などは黒色なれども、手翹の根部と末端とは、白色である。

〔五〕 赤啄木鳥又ほんげら(富士山麓の山中、長池方言) 又番匠鳥(上総長生郡方言)
Picus major Japonicus (Seeb.)

英名を「ジャバニース、グレート、スポツテッド、ウッドベツカー」(Japanese Great Spotted Woodpecker) といふ。大きき掠鳥位ありて、翼長は凡そ四寸六分である。雄は頭赤けれども、

雌にては黒い。背は一般に黒く、肩は白く、翼面は純白にして、臀鬣の末端は黒色である。腹は茶色を帯び、尾の方に至りて赤い。

この種は本州、北海道、千島に到る迄、本邦に廣く棲息する鳥にして、その蕃殖區域は、本邦より西比利亞、及び歐羅巴を経て、英國にまで擴がつて居る。歐州産のものにつき、ヘルマン氏の記する所に據れば、機會があるときに、菊科の向日葵、其他漿果を食することもあるが、有害と認むべきものではない。又この鳥の嘴は、健全なる樹幹を害するほど強壯ではない。唯、木蠹蟲の爲めに、腐朽せる樹幹を叩くのみであつて、反つて樹木の栽培家に、蟲害に罹れる樹



第二百六十圖 ちかあらげ

木をば、知らせるものといふべきである。またこの種は、樹木の凡そ半分位の上方に、丁度自分が入り得る位の圓い入口ある穴を選び、四卵時には六卵を産むのである。卵は輝ける雪白色にして、卵殻は華奢で、弱いのである。

〔六〕 小赤啄木鳥 *Picus minor*, L.

英名を「レスサ、スポツテッド、ウッドベツカー」(Lessor Spotted Woodpecker) といふ。小



第二十七圖 ちかあらげ (Great Spotted Woodpecker)

に及んで居る。

〔七〕 九州小啄木鳥 *Yngipicus kisuki* (Temm.)

英名を「テンミンクス、ピグミイ、ウッドベツカー」(Temminck's Pigmy Woodpecker) といふ。九州、朝鮮、滿州に産する啄木鳥にして、前頭及び頭頂は褐色である。

〔八〕 小喙木鳥又こまげら (富士山麓山中) 又ぼつぼくごり
(上総長生郡) *Yngipicus kisuki Seeholmi*, Hargitt.

英名を「ハルヂツツビグミイ、ウッドベッカー」(*Hargitt's Pygmy Woodpecker*)といふ。本州及び北海道に産し、凡そ雀位の大きさを有して、翼長は二寸六分乃至二寸九分である。頭



鳥木啄赤小 圖八十百二第
(Photo by W. F. Piggott)
(From Living Animals of the World)

のは、黑白相交つて居る。

〔九〕 鴛鴦 *Iynx torquilla*, Linn.

英名を「ライネツク」(*Wryneck*)といふ。體長は五寸九分位である。羽毛は鴉や、蚊母鳥の如く、柔軟なる弛き羽毛である。咽喉と胸とは、帶黄赤色にして、尾は黒き斑紋を有する

美なる灰色にして、この部を横ざりて、幅廣き六個の横條がある。體の下面は、帶褐白色にして、矢狀をなせる黒色の斑紋を有する。頸背より肩の周圍には、大なる黒斑を有し、翼はその上面に、灰色と褐色と黒色とが斑ちになつて居る。この鳥は、殆んど亞細亞及び歐羅巴の到る處に分布する候鳥にして、南方は亞弗利加及び印度に移住する。而して本邦にては、北海道及び本州に産するのである。この種が、英國に渡來するは、郭公の渡來に先つこと數日に過ぎざるを以つて、俗に「カクサー



内外普通動物誌

ス、メート (*Cuckoo's Mate*) (郭公の義) 又は「カクサー」 (*Cuckoo's*) (郭公の義) といふ。

この鳥は、冠羽を高め、尾を横げ出し、頸を伸出して、之を周圍に捻る性質あるを以つて、英名「ライネツク」即ち「捻れ

頸の名を得たのである。啄木鳥の如く、嘴にて樹幹を叩くことなく、又樹幹を攀縁することなれども、舌は、啄木鳥の如く長くして、蠕蟲狀をなせるを以つて、よく之を伸出し、樹皮の裂目より昆蟲を引出し、之を食ふのである。漿果を好めども、その主なる食物は、蟻及びその蛹と卵とである。

巢は樹木の空洞にあるが、折々は川岸等にある穴に置くこともある。而して唯腐朽せる木屑を敷けるのみにして、その上に七乃至十二の白卵を産むのである。その鳴聲は、シユウと聞ゆる高い調子である。而して、屬名は希臘語の「叫ぶこと」の義から起つたものである。

〔四〕 鸚鵡科 (Psittacidae)

體軀は、鵝大にして、大なるものは、家鷄位もある。頭は甚だ大きく、上嘴は短大にして、強く鈎曲し、短小なる下嘴を被ふ。上嘴の基部には、蠟膜を有し、この部には、圓るき鼻孔を開く。舌は短く肉質にして、その形狀は圓るきか、或はその縁邊は截狀をなし、味覺を掌るのみならず、また人語其他の動物の音聲を模擬するを得るのである。脚は短く、且つ強壯にして、許多の小鱗片を以つて被はれて居る。第一趾と第四趾とは後向し、第二と第三趾とは前向する。爪は強壯にして、鋭るごく、且つ曲つて居る。脚は攀縁に巧みな

るのみならず、又手の代用をなし、小さき物を握り、之を支ふことが出来る。

翼は、短きものと、長きものとあり、尾も亦短きものと、甚だ長きものがある。羽色は稱屬に因りて大に變化すれども、概して綠色なるものが多くして、且つ一般に光澤に富んで居る。而して橄欖綠色、若くは褐色のものは、稀れである。其他羽色には、灰色、黒色、白色、赤色、黄色、藍色、紫色のものがあるが、金屬光澤を有するものは、殆んど稀れである。羽毛は、季節に因つて變化することなく、また雌雄に因りて變化することは、極めて稀れである。幼鳥は、常に雌の成鳥に類似すれども、眼は、彼れよりも暗色である。然しながら、中には幼鳥の羽毛が、著るしく、異つて居るものもある。

この科のものは、常に森林に群居する。食物は、果實、種子、芽より成り、又花蜜及び花粉を食するものがあり、また木材中に棲める木蠹蟲をば、食ふやうでもある。或る種類では、大群をなして耕地に來り、播種せる種子及び穀粒を啄みて、大害をなし、また果樹園に來りて、果實を荒らすものがある。然れども、木蠹蟲を殺し、及び雜草の種子を食することは、間接の利益を與ふることである。彼等が食物を取るや、先づ一脚にて體を支へ、次に他脚にて食物を握りて、之を嘴に運び、全く食ひ終るまでは、常に持つて居るのである。

この科のものは、樹上に攀縁すること、巧妙敏捷にして、小枝をば嘴にて咬へ、枝より枝へと移り行くのである。然しながら、一たび地上に降り來るや、行步極めて拙劣である。尤も或る種類にては、好んで地上に降下し來るものがある。而して「ロリース」(Lois)、の如きは、地上にありて、雀の如く、跳歩するのである。また「コツカツウ」(Cockatoo)及び「バラキート」(Parakeet)の中には、地上に下りて、食物を索むるものがあるが、彼等は鳩の如く、活潑に駆け廻るのである。

鸚鵡科のものは、常に樹洞、或は岩石の罅隙、或は海岸等にある穴を巢となし、二個若くはそれ以上の卵を産む。卵殻は白く、且つ光澤を有すれども、斑紋はない。春青鸚鵡哥の卵は、十六日で孵化して雛となれども、藍黄マカウ (Ara ararauna) にては、孵化期は二十五日を要すといふことである。孵化せる雛は、裸にして、その後斑紋なき柔軟なる綿毛を生ずることがある。而して親鳥の保護を受けて成長し、親は嘴をば、雛の口腔内へ挿入して、之に食物を與ふるのである。

この科のものゝ鳴き聲は、叫聲にして、時としては甚だ厲しく聞ゆれども、また愉快なる音調を發するものも少くはない。野生の状態に於ては、他の動物等の音聲を摸擬することなきが如しと雖も、之を飼育すれば、巧みに人語、其他の音聲を摸擬するもの

がある。編者は實地に、鸚鵡を飼育した經驗を有せぬを以つて、左に實際家が、時事新報に寄稿したるものより、茲に轉載して、讀者の參考に示すのも、無益であるまいと思ふて居る。

第一 眞似をするもの

- (1)オーバタン (2)オーハク (3)コハク (4)コバタン (4)テンヂクバタン (5)桃色鸚鵡哥 (6)オーキボシ (7)アサギボシ (8)オホムラサキ (9)大鼻鸚鵡哥 (10)鸚鵡等

第二 眞似をせざるもの

- (1)アカクサインコ (2)サクラインコ (3)五色鸚鵡哥 (4)五色セイガイ (5)コセイガイ (6)オカメインコ (7)春青鸚鵡哥 (8)本青鸚鵡哥 (9)ダルマインコ (10)小青鸚鵡哥 (11)タンカン (12)砂糖鸚鵡哥 (13)三日月鸚鵡哥 (12)金猩々 (13)緋鸚鵡哥 (14)ミツグロインコ (15)サメクサインコ (16)メキシコインコ等

この科のものは、専ら熱帯地方に産し、南亞米利加、濠太利亞、亞弗利加、マレイ群島等は、その著名なる産地である。又ニュージールランド、北米及び南米の南部の如き、温帯地方に棲むものもある。鸚鵡科には約五百種を含む。而して鸚鵡と鸚哥との區別は、明ら

かでなくして、この両者は殆んど同種異名と看做して可なるが如しとは、さる鳥學者の説である。

五五八

〔一〕 鸚鵡 *Pittaacus erithacus*, L.

英名を「グレー・パロット」(Grey Parrot)といふ。亞弗利加のギネアよりニアツサ湖



鸚鵡 圖十二百二第
(After Protheroe)

るのである。

この鳥は鸚鵡中、最もよく音聲を模擬するものにして、犬の吠聲を真似たり、人の音聲を真似たり、甚しきは一章の文句をも暗誦するものがある。又長命にして、百年間も、

籠の中に飼はれたものがある。尤も六十歳にして記憶力を失ひ、九十歳にして視力を失つたといふことである。

〔二〕 鴉本青 *Strigops habroptilus*, Gray.

英名を「オウル・パロット」(Owl Parrot)又「カカポ」(Kakapo)といふ。以前は「ニウ・ジー



青本鴉 圖一十二百二第
(Photo by D. Le Souef)
(From Living Animals of the World)

ランドの全部に、普通に棲息したりしが、今は北島及び南島の北半部の山地に限りて、見るのみである。全長一尺八寸許、尾は中庸の長さありて、全身綠色にして、黄色と黒色の斑紋を有し、眼の周囲の羽毛は、鴉の如く圓盤状を呈する。日中は岩石間の罅隙、樹木の根元に隠くれ、夜出で、地上を徘徊し、蘚苔、羊齒類、種子、漿果等を食する。翼は、外観上長く見ゆれども、殆んど飛ぶことが出来ないものである。

〔三〕 輪掛本青鸚鵡哥 *Palaeornis torquatus*

英名を「グリーン・リング・ネツケツド・パアラキート」(Green King-necked Parakeet)といふ。

内外普通動物誌

五五九

全長一尺二寸許で、嘴は赤く、額は黒く、頸の周圍に、赤色の細輪を有し、羽色は綠色に富んで居る。總べて「バラキート」と稱するものは、尾は長くして、楔狀である。この種は印度及び附近の地方に産する。

〔四〕 五色鸚哥 *Platycecus eximius*

英名を「ロセラ」(Rosella)といふ。全長七八寸で、嘴は小さく、尾は中庸の長さである。頭より胸に至るまでは眞紅色なれども、喉部は白く、その他の部分は、黄、綠、藍、青、黒等を混じ、恰も虹のやうである。この種は濠太利亞に産する。

〔五〕 をかめいん *Callipitacus novae-hollandiae, Gm.*

英名を「クレストツド、バラキート」(Crested Parakeet)といふ。顔は黄色にして、額より長羽が直立し、頬には淡赤色の圓點がある。濠太利亞の中央部に、大群をなして産する。

〔六〕 桃色鸚哥 *Cacatua roseicapilla, Vieill.*

英名を「ローズ、コツカトウ」(Rose Cockatoo)といふ。

〔七〕 きばたん *Calyptorhynchus galerita, Lath.*

英名を「グレーター、サルファ、クレストツド、コツカトウ」(Greater Sulphur-Crested Cockatoo)といふ。總て「コツカトウ」の類は、頭には冠羽を有し、尾は中庸の長さありて、その幅が廣

廣いマレー群島及び濠太利亞に多く産する。嘴は大きく、舌は他の鸚鵡類では厚く肉質をなせるのど異りて、細く、且つ圓筒形をなし、其の色も、他の鸚鵡類が黒色をなせるに反し、この種にては深赤色である。常に森林の低い處を徘徊し、種々なる果實及び種子を食ふのである。樹木が朽廢したる部分に、穴を穿ちて巢を造る。群をなして耕地に

來り、作物を害するのである。

キバタンは濠太利亞に産する。冠羽は輝ける硫黄色にして、體の毛色は白色である。



第百二十二圖 ンタバキ (After Protheroe)

〔八〕 マコウ (Macaw) *Ara*
南亞米利加に産する鸚鵡にして、體

軀は大きく、且つ尾は非常に長い。羽色は赤、藍、黄色等を交へて、美麗である。

〔一〕 赤藍マコウ (Red and Blue Macaw) *Ara macao*

アマゾンの溪谷に産し、北はメキシコに到るまで、分布する。體長は三尺許にして、その中で尾の長さは約二尺である。體の上下面の大部分は、朱赤色にして、上雨覆は黄く、背の下部と上下の尾筒部とは、藍色である。尾翹は深紅色にして、その先端は藍色を帶

びて居る。

(二) 藍黄マコウ (Blue and Yellow Macaw) *Ara ararauna*

體の上部は藍色にして下部は黄色である。

第三目 鳴禽類又燕雀類 (Passeres)



ウコマ藍赤 圖三十二百二第
(After Protheroe)

有することなく、嘴の基部に近く、鼻孔を開き、口角は眼の前面下に位する。

脚は細短にして、三趾は前向し、一趾は後向する。且つ各趾には尖長なる爪を具備すれども、後趾の爪は、他の趾の爪よりは大きなを常とする。尤も種屬に因りて、趾の模様は異同ありて、前向せる三趾の中で、内趾は後方に向き、中趾及び外趾の基部が、短膜に

體軀は鳥の如き大なるものあれども、多くは小形にして、中には體長僅に二寸五分位に過ぎざるものもある。嘴の形状は、種類に因りて、著しくその形貌を異にす。雖も、嘴は皆角質にして、蠟膜を

因りて結合するものもある。又魚狗かほせみに見るが如く、前向せる三趾の中で、中趾及び外趾が、その中央部に至るまで、全く膜に因りて結合せるものもある。また雨燕あまつはのに見るが如く、四趾が前向するものもある。鳴禽類は地上にありては、概して跳躍するを常とすれども、地上に餌食を索むるもの、及び燕の如く空中より食物を取るもの、にありては、地上を歩行する。又鶉類うずらの如き大形の種類にては、跳躍と歩行とをなすのである。この類の大多數のものは、樹枝上にありて、甚だ活潑に動作し、而して總べてのものは、隨意に樹上に留ることが出来るのである。

頭は大きく、體軀は輕快である。羽毛は柔軟にして、色彩には甚だ變異あれども、最も普通なるは、橄欖綠色及び褐色である。また屢々雌雄に因つて、その色彩を異にし、季節的變化を見ることがある。幼鳥の羽毛は、時としては、成鳥と同様なれども、また時には全く異なりたる羽毛を有し、概して斑紋あるか、若くは條線を有するのが普通である。幼鳥は生まるゝや否や、獨り自ら餌を索むると能はずして、親鳥の保護を要するのである。而して體は裸出するか、若くは茸毛状に見ゆる綿毛を疎生するのである。彼等は餌を得ん時には、大きく口を開くが、口角は柔らかくして、よく擴張することが出来るのである。

鳴禽類は、鳥類中にて、最も敏捷且つ快活なるものである。中には孤獨の生活をなすものもあれども、多くは社會的に群居する。而して大多數のものは、常に樹葉、其の他の被覆物の下に居ることを好むのである。また多くの種類は、争鬪を好み、彼等が戦ふときには、翼を用ふることもなく、唯爪を以つて攫み合ひ、嘴を以つて、咬み合ふを常とするのである。

巢は、その構造誠に巧妙である。鳴禽類の大多數は、昆蟲、蠕蟲等の動物質、及び漿果を食ひ、また種子、草本を食するものがある。然しながら、殆んど總べてのものは、その成鳥の食物が、如何なるものなるを論せず、その雛を養ふには、主として昆蟲類、蜘蛛類などを用ゆるのである。

飛び方は、概して波動的に、體軀を動搖させ、翼を交互に閉ぢる。而して體軀が落下すると思へば、又昇りて、その飛翔は至つて迅速である。然しながら、大形なる種にありては、規則正しく羽撃をなすものである。また飛翔する時は、頸をば胸の方へ引き入れ、脚をば前方に繋げるものが多いのである。

雄は、雌よりも、美麗にして、その發聲器も亦よく發達して、美音を發するものが多い。而して多くの種類は、よく他の鳥類等の音聲を模擬することが出来る。而して是等は

野生の状態に於ても亦然りである。鳴禽類は、その發聲器の装置に因りて、通例鳴禽類(Oscines)と叫禽類(Chamatores)の二目に分けられて居る。即ち前者は美聲を發するものであるが、後者は叫聲を發するのである。然しながら、この分類は、餘程人爲的のものだといはれて居る。何んとなれば、この兩類の中には、嘴及び體軀の形貌が、全く同一形式のものがあるからである。

鳴禽類は、その種類頗る多くして、鳥類の半分以上は、總べてこの類に屬するもので、その種數は一萬三千種に達するといふことである。世界到る處として、この類の棲息せざる所なく、その多數は所謂渡鳥である。

鳴禽類と人生との關係を述べんに、この類の中にて、山林及び田畑等に於て、害蟲を食するものは、有益鳥にして、間接に吾人に利益を與ふるものである。現行の法令にて保護せられ居る鳴禽類を擧ぐれば、次の如しである。

第一 禁獵鳥類(無期保護鳥)

- (1) 虎鵝 (2) 赤腹 (3) 眉白 (4) 黑鵝 (5) 駒鳥 (9) 赤鬚 (7) 野駒
- (8) 瑠璃 (9) 磯鵝 (10) 河鳥 (11) 岩鷗 (12) 茅潜 (13) 編 (14) 麥蒔
- (15) 眼黑 (16) 三光鳥 (17) 細眼兒 (18) 鶯 (19) 蟲喰 (20) 葦雀 (21) 先入

- (22) 雪加
- (23) 菊戴
- (24) 山雀
- (25) 小雀
- (26) 日雀
- (27) 四十雀
- (28) 五十雀
- (29) 柄長
- (30) 鶴鷄
- (31) 木走
- (32) 山椒喰
- (33) 椋鳥
- (34) 連雀
- (35) 鶺鴒
- (36) 木鷄
- (37) 田鷄
- (38) 雲雀
- (39) 燕
- (40) 雨燕
- (41) 蚊母鳥
- (1) 鶺鴒
- (2) 鶺鴒

第二 獵期外禁獵鳥類(有期保護鳥)



圖四十二百二第

鳴禽類にして果實、種子を食べるもの、若くは魚狗の如く魚類を食べるものは、害鳥である。然れども雑草の種子を啄むものは、雑草の繁殖を制止して、間接に農業上に裨益を興ふるものである。最も同一の種にても、或る時季には昆虫類を主食し、又他の時季には穀物、種子、果實等を食べるものがあり、又動物質と植物質とを併せて食ふものがあるから、利害の孰れが多きかは、多年實地につきて、精細なる觀察實驗を経ざれば、未だ俄かに斷言すること能はざるものあるは、勿論のことである。

鳴禽類の多くは、その肉を食用に供することが出来

る。即ちツグミ、カシドリ、ビンズイ、ヒヨドリ、ヒバリ、スズメ、マヒハ等の肉は、普通食用となること、人のよく知る所である。

鳴禽類の中には、その鳴聲の美なるが爲め、若くは形貌の優美なるが爲めに、籠鳥として飼養せられて、吾人の耳目を樂しませ、娯樂用として愛玩せらるゝものがある。その普通なるものには次の如き種類がある。

- (1) 鶺鴒
- (2) 駒鳥
- (3) 赤鬚
- (4) 大瑠璃
- (5) 小瑠璃
- (6) 雲雀
- (7) みやまほ
- (8) ほゝじろ(9) のじこ
- (10) めじろ
- (11) くみつ
- (12) こがら
- (13) 四十雀
- (14) 五十雀
- (15) 山雀
- (16) 日雀
- (17) みぞさ
- (18) 文鳥
- (19) 従姉妹
- (20) かなりや
- (21) 紅雀
- (22) 胡錦鳥
- (23) 金腹

鳴禽類の分類に就いては、學者に因つて、それ々々所見を異にする所あれども、本書は、クラウス氏の動物書に準據し、嘴の形狀に因つて、之をば左の五亞目に區分する。

第一亞目 輕嘴類(假稱) (Leviostres)

「レビロストレス」(Leviostres) は拉丁語の「輕い嘴」の義である。因つて譯して輕嘴類と名づけたのである。所謂叫禽類にして、嘴は大形なれども、輕い。脚は短く、且つ弱く、前方に向ける三趾の中で、中趾と外趾とは、その中央部に至るまで、全く

膜に因りて結合するか又は前方に向ける三趾はその基部に至るまで全く分離して居る。皆脚を用ひて、樹枝に攀縁するのである。

第二亞目 細嘴類 (Tenuirostres)

この亞目中には、所謂叫禽類及び鳴禽類に属するものを含んで居る。嘴は細長である。脚は前向せる三趾の中で、中趾と外趾とは、短膜に因つて、その基部が結合するか、若くは前向せる三趾は、總べてその基部に至るまで、分離して居る。而して、皆、後趾は長いのである。

第三亞目 篋口類 (Fissirostres)

頸は短く、頭部は扁平にして、嘴は深く裂け、長い尖つた翼を有し、脚は弱いのである。前向せる三趾の中で、中趾と外趾とは、短膜に因りて、その基部が結合するか、若くは四趾共に前向するのである。飛力は總べて迅速にして、飛翔する際、口を廣く開きて、餌食を啄む性がある。この類のものは、多くは温暖なる地方に棲息するのである。

第四亞目 齒嘴類 (Dentirostres)

主として鳴禽類と稱するものである。嘴の形状は、種屬に因りて一様ならずし

て、細長なる嘴を有するものと、稍屈曲せる嘴を有するものとある。而して上嘴の先端には、左右各一ヶ宛の齒狀の缺刻を有する。翼は中庸の長さであつて、十枚の初列風切羽の中の第一のものは、退縮するか、又は全く之を缺いて居る。

第五亞目 厚嘴類 (Conirostres)

小形の鳴禽類にして、頭は肥大し、嘴の基部は潤大にして、その先端に至りて、急に尖りて、圓錐狀をなし、上嘴の縁邊には、或は缺刻を有すれども、齒嘴類の如くに著明ではない。頸は短く、翼は中庸の長さである。脚は前向せる三趾の中で、中趾と外趾とは、その基部に於て、短膜に因つて結合して居る。跗蹠部は短く、その前面には、鱗片を以つて被はれて居る。食物は昆蟲を食すれども、主として種子、穀粒、漿果、其他の果實を食するのである。

以上

第一亞目 輕嘴類(假稱) (Levirostres)

(一) 大角鳥科 (Bucerotidae)

英名を「ホルン・ビル」(Hornbill)といふ。體軀の大きさは、小なるは、鳥よりも大ならざれど

も、大なるは、大形の七面鳥位を越ゆるものがある。即ち小なるものでは、嘴の先端より、尾の先端に至るまでの長さは、約九寸餘で、大なるものでは、五尺五寸位もある。嘴は大きく強壯にして、その輪廓は屈曲する。ある種類にありては、額より上嘴の頂上に於て、兜状の隆起を有するものがある。印度及びマレー群島に産する種類にては、この兜状



圖五十二百二第
(産ルバネ種-鳥角大)

の隆起は、二本の角となりて分離する。鼻孔は嘴の基部の後方に位し、口角は眼の下に位する。脚の跗蹠部は甚だ短きを常とすれども、地上に棲息する亞弗利加産のものにありては、長くある。而して、第三第四趾は、その全長の半ばに亘りて、結合して居る。而して後趾は、よく發達して居るのである。

手蹠は短けれども、その大きは大きく、上腕と前腕との骨は、多くの水鳥に見るが如く長い。尾は長くして圓くあるか、又は楔状である。頭は大きく、頸は長く、體軀は瘦せて居る。腿は甚だ凸出し、舌は甚だ短い。



鳥角大む棲上地 圖六十二百二第
(英名Ground-Hornbill, 種一の
(byScholastic Photo C.)
(The Living Animals of the World)

ては、喬木に穴を穿ち、その下底には木屑塵埃を敷く。雌はこの表面に、約四卵を産む。尤も卵の数は、これより多きこともあり、又少きこともある。最後の卵を産み下すや否や、雌は直ちに孵化の任務に服するのである。而して、この際、雄は嘴をば鏝の如く使用して、粘土で巢の口を塞ぎ、唯雌の頭と嘴だけが突出するだけの孔を残すのみである。而して雌は、卵が孵化するまでの間、この中で閉ち籠つて居る。この間、雄は食物を運び來りて、雌を養ふのである。而して雌が孵化するとき、雌雄は粘土の被ひを破壊し去り、親の兩者、若くは一方のものは、穴の上に座して、幼鳥が充分に成長して、この巢を離れ出づるまでの間、よく之を保護するのである。

短脚にして、樹木に棲息する種類は、主に果實を食する外、又小動物を食する。而して地上に棲息する種類では、主に動物質を食するのである。

樹木に棲息する大角鳥には、六十五種位ありて、サハラ以南の亞弗利加、亞細亞の南東部、新ギニアに産し、常に森林に棲息する。地上に棲息する種類は、唯二種にして、皆亞



五七二

出を嘴りよ穴の方左。巢のそさ鳥角大角二 圖七十二百二第
 (From Marvels of the Universe) (By A. Twidle) るあで雌はるせ

弗利加に産し、常に廣濶なる土地に棲息すれども、その時するは、樹上である。而して大さは、七面鳥大であつて、長い跗蹠部を有する。

〔一〕 二角大角鳥 (Two-horned Hornbill) *Dichoceros bicornis*

英名をまた「コンケーブ・ホルンビル」(Concave Hornbill)といふ。嘴は黄く、嘴上の隆起は、多少橙黄赤色である。羽毛は黒と白とを混するを以て、また「グレート・バインド・ホルンビル」(Great Pied Hornbill)と呼ばれる。體の長さは、五尺以上に達し、この科の中で、最大のものである。

〔二〕 魚狗科 (Alcedinidae)

嘴は、常に長く、強壯にして伸直なれども、唯「メリドラ」属 (*Melidora*) のものは、嘴は、その先端に於て、鉤狀に曲つて居る。口角は、眼下に位し、翼は短く、尾は短いものもあれども、種屬に因つて異同がある。頭は大きく、脚は甚だ小さく、脛部は甚だ短くして、時として、前方の趾の中で、内趾を缺くものがある。而して前方の趾の中で、外方に位する二趾は、共に結合して居る。

體の大きさは、鳥大より、山雀位であつて、羽毛は雌雄に因りて同一なるものあり、又相違せるものもある。雛の羽毛は、大に成鳥の羽毛と類似すれども、若しその雌雄に因り

て、羽色を異にする場合には、その相違は、孵化して直ちに現出するのである。尤も稀には、雛の羽毛が親のご著るしく異なるものがある。

常に河畔又は枯れたる樹木にある孔に産卵する。孔は鳥自身穿つ場合が多い。一産の卵数は、數個にして、卵は圓味を帯び、純白色にして光澤がある。而して二週乃至三週間にして孵化する。

この科のものには、約百五十種ありて、地球上の總べての部分に分布する。尤も地上に棲息する種類は、東半球の温暖なる地方に限りて産し有害動物を食ひて、有益である。又この類の中で、魚狗（カハゼウ）の如く、魚類及び甲殻類等を食するものは、有害である。而して果實を食するものは、唯二種のみ知られてあるに過ぎない。而して魚類、其他の脊椎動物を食するものは、消化せざる骨片鱗片等をば、彈丸状として吐出するのである。

- 〔一〕 魚狗（カハゼウ） 又しやうびん 又ちやうびん（富士山麓の山中、長池方言） 又しやうぶ（播磨方言） 又しよく（播磨方言） 又か（播磨方言） はせうびん 又ひすい 又そな（筑波方言） Alcedo bengalensis, Gmelin

英名を「キングフィッシャー」(Kingfisher)又は「コンモンキングフィッシャー」(Common Kingfisher)といふ。頭は大きく、長楕形をなす。嘴は伸直にして尖り、且つ強壯である。嘴の

長さは、鳥の年齢に因りて異れども、一寸乃至一寸三分、若くは一寸七分に達する。頸は短く、脚も寧ろ短く、且つ赤い。頭上、頸、翼、臀部は、輝ける藍色にして、眼上には肉桂褐色の條紋を有し、眼は褐色にして、咽喉部は白く、胸腹部は黒色を帯びたる樺色である。而して、體長は六寸三分に達する。短き肥大せる鳥にして、尾は短いのである。



魚狗 圖八十二百二第

この種は、本邦の南部には、四時棲息すれども、北海道には夏季之を見るのである。而して本邦の外に、英國に至るまでの舊北地方に産すれども、北は北緯五十五度以北に達せないで、南はアナトリア、島、埃及、印度、支那及びマレイ群島に迄及ぶのである。常に、溪流池沼の岸にある石や、或は水面に垂下せる枝上に靜止し、

魚の水面に浮び出づるを窺ひ、忽ち之に突撃し、嘴にて咬へたまゝ、一旦舊の處に戻り、然る後に、頭の方より魚を呑むのである。體の下面の彩色は、水面に墜ちたる葉の色と同一なるを以て、魚族に知らるゝ患少なく、又體の上部の色は、水流に映する藍色の閃

光と一致して輝くを以つて其處らに徘徊するコノリの如き猛禽類に發見せられざる利益がある。この鳥の消化力は甚だ迅速にして、その不消化分たる骨、鱗片、鱗をば口より吐出するのである。

巢は、河流の岸に、一尺位も穴を掘りて、その中に白卵をば、六七個産むのである。

〔二〕 やませみ 又かはちやう 又ほこけせい (方言) 又かはかけす (上同) 又かのこごり *Ceryle guttata* (Vigors)

英名を「オリエンタル、スポツテッド、キングフイッシャー」(Oriental Spotted Kingfisher) といふ。前種よりは大なる鳥にして、翼長は五寸九分乃至六寸三分許に達する。雄にては、胸と頸の兩側とは、栗色を帯びたる淺黄色の斑紋を有し、腋下と下雨覆とは白い。胸を横ざる暗色の斑紋は、僅少にして、且つその間は離れて居る。雌にては、胸と頸の兩側とは白く、且つ黒色の斑紋が多い。然しながら、腋下と下雨覆とは、栗色を帯びたる淺黄色である。

この種は、本邦の南部には常に棲めども、北海道には、時々渡り行くのである。その分布は、本邦より支那、バルマ及びカシユミルに及んで居るが、西比利亞、臺灣、フィリッピン諸島には、棲息しないのである。

〔三〕 みやましやうびん 又あかしやうびん 又きやうろく 又あまごひごり 又ごうがらしごま (光) 又みづこひごり 又く

かる (沖繩) 又みづひよろひよろ 又みづのめす (岐阜縣) 又みづのめす (西北部)

Halcyon coromanda (Latham)

英名を「ラツヂイ、キングフイッシャー」(Ruddy Kingfisher) といふ。翼長は三寸九分乃至四寸三分である。體全體は、多少赤褐色なれども、唯臀部の中央と、上尾筒とには、白色の一條ありて、これには青色の斑紋を有するのである。

北海道には、夏季のみ來遊すれども、他の本邦の各地には、四時棲息する。その分布は、廣く、ネバル、シツキム、アングマン群島、バルマ、マレイ半島、スマトラ、チャバ、ボルネオ、セレベス、フィリッピン諸島、臺灣に産するのである。常に魚類及び蠕蟲を食ふのである。

〔四〕 笑魚狗 (Laughing-Kingfisher) *Dacelo gigas*, Glog.

英名を又「ラツフイグ、ジャクカッス」(Laughing-Jackass) 又「セツトラース、クロック」(Settler's Clock) といふ。體長は一尺位で、魚狗に似たる鳥であつて、體の毛色は、主に褐色、又は、くすぼつた白色である。南濠太利亞に産し、その鳴聲が、人の高笑に似て居るので有名である。

この鳥は、小なる獸、爬蟲類、昆蟲類、蟹を食ふ。また有毒蛇を食ふ故に、有益と考へられて居る。この鳥の習性につき故ウイライト氏 (Wheeler Wright) の記述せる所は、次の如しである。



第 二 百 二 十 九 圖 笑 魚 狗
(Photo by W.Reid)
(From the Liv. Anim. of the World)

『新開地に植民した人は、夜明けの一時、間許前に、非常に調子外れの音響で、眼が醒されたのである。この音たるや、恰も大勢の友人が、彼れの周囲で、荒々しく一所に鯨波を擧げて、叫んだり、呐喊したり、または笑つて居るが如しであつた。これは笑魚狗の朝の歌であつて、彼れの仲間、夜明けに近づいて來たのを、告げる鳴聲である。正午に同じ笑聲が、聞へた。而して太陽が西山に沈むと、きに、その聲は、再び森林中に響き亘つたのである。余は、始めて濠太利亞に於ける、廣潤なる叢林中に眠りたる夜を、忘れまいと思ふ。それは、ブラク森林であつた。余は、こゝに一夜を明した後に翌朝、夜明け頃に、眼が醒めたが、其の頃、笑魚狗は笑ふし、カササギの類の

鳥は、笛を吹くやうに、鳴くし、ワットル、バード (Whistle-bird) (眼白科) の、嗶聲のやうな、クツクツといふ鳴き聲……などが、森林を通りて、響き亘り來るときに、鸚鵡の幾千羽の叫聲と共に、何んとも名狀し難き一大合奏は、恰も彼等が余を歓迎せるが如くに、余が耳朶に響き聞へて、恍惚として、我が身の居る處を、忘れたやうな心地がしたのである。余は、その後幾百度びも、その聲を聞いたが、この時と同様な感じを、惹き起さなかつたのである。實に笑魚狗は、林地の新殖民地の人には、眼醒し時計のやうなものである。彼れの性質は、決して人を恐れ疑ふことはなくして、友とし親むべきものである。彼れは、林地の天幕生活には、絶へず伴侶となり、また蛇を屠殺するものであつて、彼の「ロビン」といふ鳥が、歐洲の本國に於て、懐しいものであつた如くに、笑魚狗は、濠太利亞の森林では、實に懐しい鳥である。彼れは、殆んど鳥大の鳥で、姿は如何にも無骨である。而して羽毛は、濃厚の栗褐色と、汚なき白色とを混じて、翼は、楯鳥に見るが如き、風に、稍淡藍色を以つて、入り交つて居る。尾羽は、長く、寧ろ尖り、且つ褐色の横線がある。……この鳥は、年中總べての森林に、普通なる鳥にして、樹木の洞内にて蕃殖し、卵は、白いのである』云々

〔三〕 蜂喰科 (Meropidae)

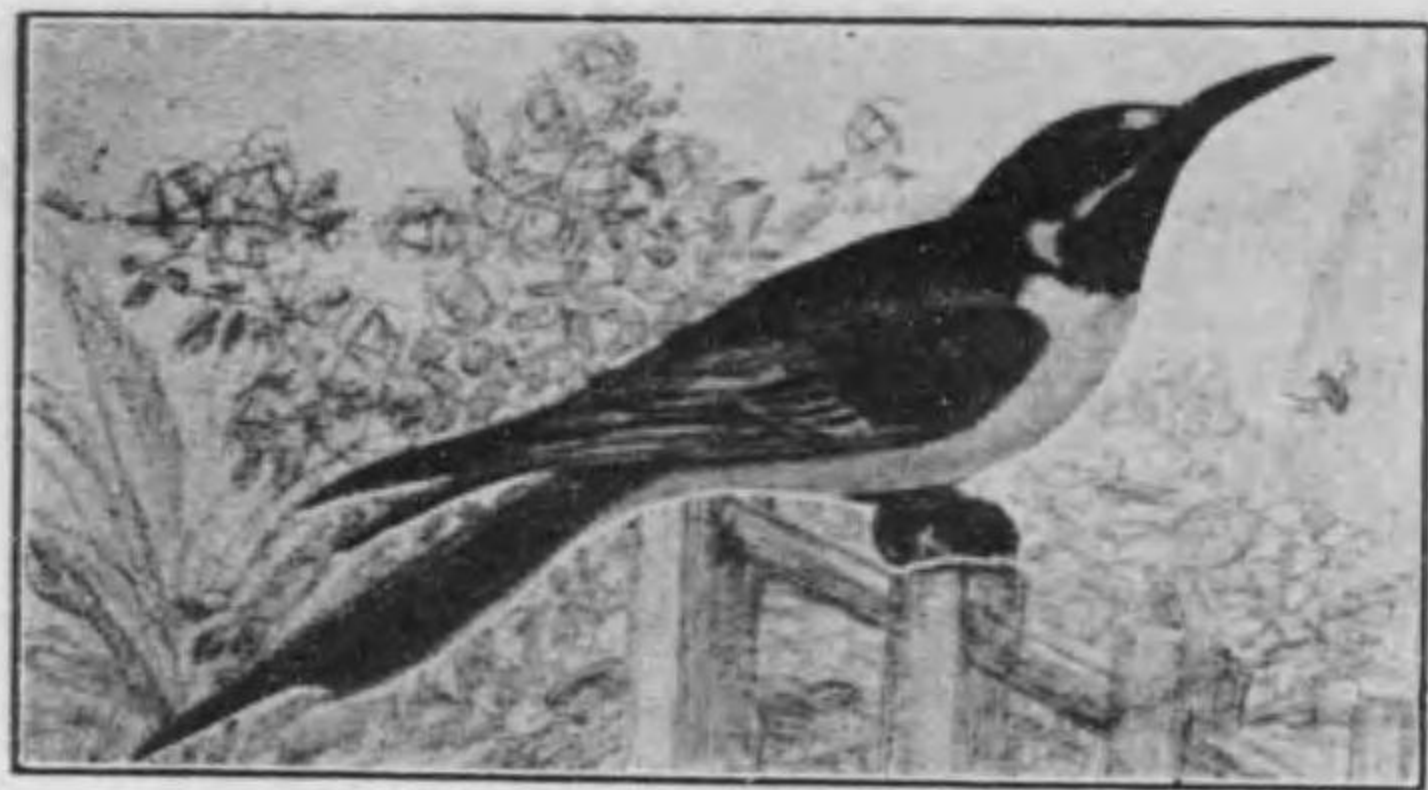
英名を「ビー、イーター」(Bee-eater)といふ。蜂食ひの義である。體軀の大きは、家鴿大より、燕位である。嘴は細長にして、下方に屈曲し、口角は眼下に位する。脚には甚だ短き跗蹠部を有し、前向せる三趾は、多少結合すれども、後趾は最小である。翼は長きを常とすれども、時には中庸の長さのものや、短きものがある。尾は寧ろ長く、方形なるか、若くは稍又状をなし、中央に位する。翅は、他の本羽よりも、長いのが通例である。

この科には、約三十六種ありて、東半球の温暖なる地方に産し、羽毛は光彩ありて美麗である。常に飛翔しながら、昆蟲を捕食し、殊に蜜蜂及び胡蜂を食ひ、その消化せざる部分は、彈丸状となして吐出する。河畔又は絶壁に於て、土中に穴を穿ちて巢となし、數個の純白色の卵を産むのである。而して常に群居し、その性甚だ快活にして、水中に入りて水を浴び、又は砂塵中に入りて、塵を撒き散らすことを好むのである。

〔一〕 蜂喰 (Bee-Eater) *Merops apiaster*, L.

この種は、歐洲の南部及び亞弗利加に産するものにして、北は英國に至るまで、渡來すれども、冬は亞弗利加に渡るのである。而して西班牙に於ては、四月の上旬に、四五十の群をなして出現し、耕野及び花園に徘徊し、蜜蜂、胡蜂、蝶、バツタをば、飛びながら啄むのである。羽毛は非常に美麗にして、頭、頸背は栗色である。尾筒部は黄色で、その先きは

綠色である。腋蹠と手蹠は、藍綠色にして、その先端は黒いのである。また咽喉部は、橙黄色にして、頸を周りに、深藍色の一帯を有する。



第三百三十三圖

この鳥は、魚狗の如く、水流近き粘土質、若くは砂質の岸に、深き穴を造り、その奥に、別に巢を造ることなくして、中に卵を産むのである。

一種印度に産するものは、小形の綠色種にして、「メロプス、ピリヂス」(*Merops viridis*)の學名を有する。これは亞弗利加の北東部より、交趾支那にまで、廣く分布するのである。また一種大形にして、赤色のものは、亞弗利加に産し、「メロプス、ヌビウス」(*Merops nubicus*)といふ。小川三紀氏の目録には、宮古島産の「メロプス、オルナタス」(*Merops ornatus*)がある。

〔四〕 佛法僧科 (Coraciidae)

英名を「ローラー」(Roller)といふ。樹木に攀縁する中庸大の鳥にして、嘴も亦中庸大にして、強壯であつて、その状鳥の嘴の如しである。口角は眼下に位する。脚の跗蹠部は、中庸大なるか、若くは、短くして、三趾は前向し、後趾は最小にして、四趾共に皆分離する。翼

は短きものと長きものどがある。尾は中庸大なるか若くは長く、頭は大きく、體軀は輕

快である。

この科のものは、約三十六種を含み、普通の種類では、長翼と短脚とを有し、東半球の温暖なる地方に産すれども、短翼にして長脚を有する種類は、前者と反對に、樹上に棲息せずして、地上に棲み、マダガスカル島の森林地に産するのである。



佛 法 僧 圖 一 十 三 百 二 第

し得る所の小形の脊椎動物を食する。而して不消化分は、彈丸狀となして、吐出するの

である。

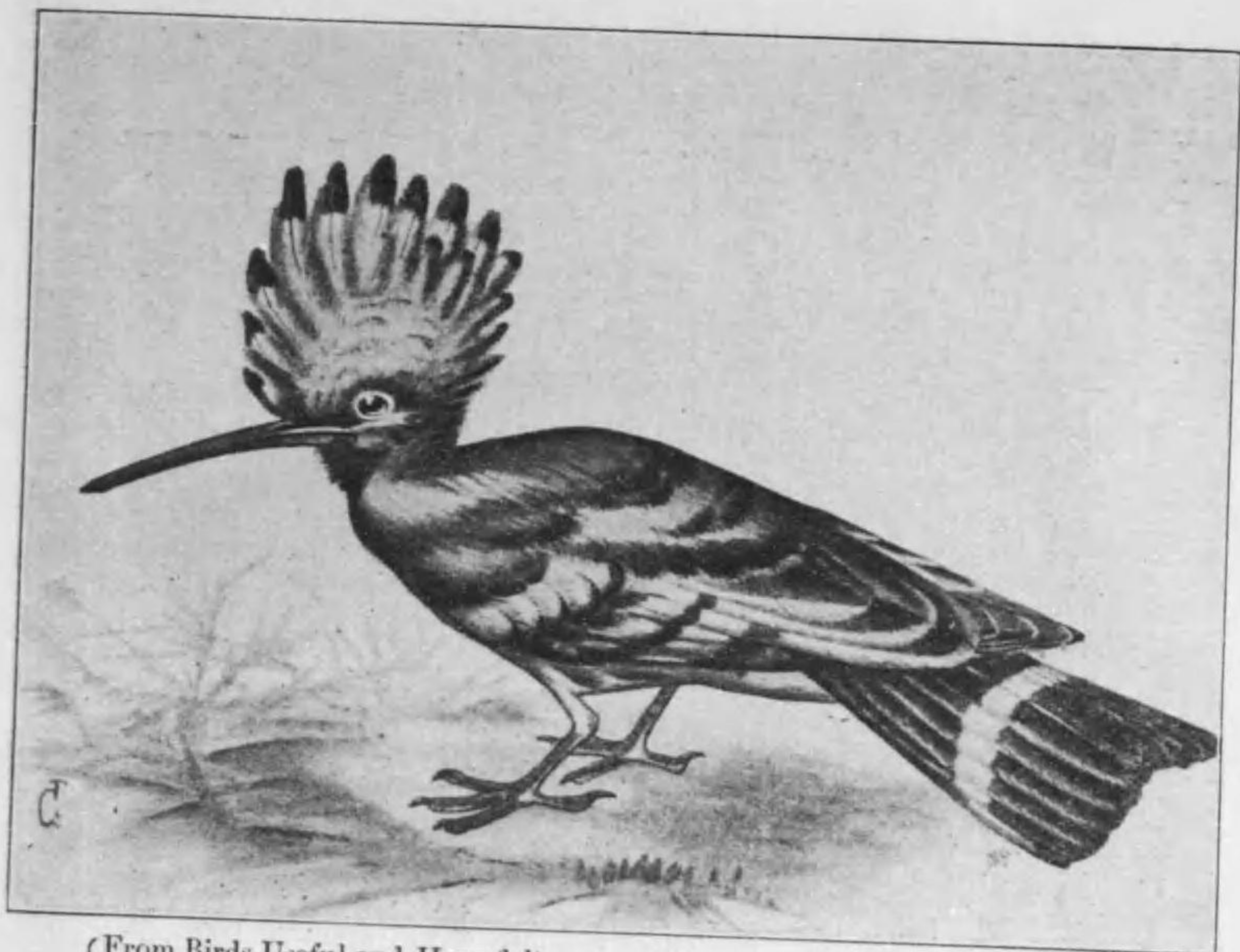
〔一〕 佛法僧又三寶鳥 *Eurystomus orientalis* (Tinn)

英名をブロード・ビルド・ローラー (Broad-billed Roller) といふ。翼長は六寸七分ある。嘴は幅廣く、尾は短い。羽毛は藍色にして、翼と尾とは莖菜色で、體には綠色を帯びて居る。この種は、東洋地方の大部分に棲み、熱帶の鳥であるが、アムールの溪谷に到るまで、徘徊し來るのである。本邦にては、秩父地方、武州高野山、紀州高野山、其他の深山に棲めども、朝鮮にては人家に近い處に居るのである。編者は甚だこの鳥の鳴き聲を聞いたことはないが、武州高野山に住める人は、「佛法………僧と鳴くと云ひて、所謂三寶の鳥として、之を崇拜して居る。」

第二亞目 細嘴類 (Tenuirostres)

〔一〕 戴勝科 (Upupidae)

體軀の大きさは、家鴿位より雲雀位である。嘴は細長にして、多少下方に彎曲する。而して、口角は眼の前面下に位し、舌は甚だ短く、脚の跗蹠部は短く、三趾は前向し、且つ殆んど分離する。而して後趾は他の趾よりは短けれども、よく發育する。翼は短きも、幅廣くして、且つ圓くある。尾の長さは、中庸の長なるか、若くは長いのである。



(From Birds Useful and Harmful)

第 二 百 三 十 二 圖
 この科のものは、東半球の温暖地方に産し、その種数は、二十種よりも少くはない。而して「カケラア」(Kakelhar) (Irisor erythorhynchus) 属のものは、群居すれども、普通の戴勝は、孤獨の生活を營む。穴の中に、數個の卵を産み、卵殻は帯綠色か、又は碧色にして、斑紋を有しない。卵より孵化せる雛は、裸出し、且つ誠に哀れむべき状態にして、口角には、柔軟なる皮膚が擴張して居る。

この科のものは、昆蟲類を食するを以つて、有益鳥である。

〔一〕 戴勝 *Pupia epops*, Linn.
 英名を「フウボー」(Hoopoe) といふ。れ、その連続して、幾度となく、急速に發

する音調が「ハツプ、アツプ」(hup-up) と聞ゆる爲めに、名付けられたものである。歐羅巴及び亞細亞の温帯地方に廣く産し、冬季には、印度、亞刺比亞、北亞弗利加に移住し、本邦にては、北海道、本州にて、稀れに見ることがある。

體長は約一尺位ある。羽毛は美しい黄褐色にして、翼と背の下部には、黒と白との幅廣き横帯を有する。尾は十枚の翹より成り、色は黒くして、その基部には、一個の新月形の白帯を有する。嘴は細長く、且つ稍彎曲して、食物を啄むに適する。頭上には、冠羽を有し、その先端は黒く、之をば自由に起伏するのである。

巢は、樹木の穴の中なる、土壤塵芥の溜れる所に置き、四乃至七卵を産む。卵は帯綠橄欖色なるか、若くは粘土色であつて、十六日にして孵化する。之を孵化する母親と、生れ出でたる雛とは、一種厭ふべき臭氣がある。

常に、低き叢林中に於ける、樹木の境界線に棲息し、また牧場の附近にも來り、其處にある鳥糞などを探りて、甲蟲及び幼蟲を取り、又飛翔しながら蚊を取る。又バツタの類を食ふ、常に喧しき鳥である。

〔二〕 蜂鳥科 (Trochilidae)

體軀は、大なるは、燕位にして、小なるは、土蜂の大なる位であつて、鳥類中で、最も細小

なるものである。嘴は常に細く、長さは中庸なるか、或は長く、或は甚だ長きものあれども、皆伸直である。脚の跗蹠部は甚だ短く、三趾は前向し、後趾は後向する。翼は狭く、概して長く、腕の骨は甚だ短い。尾は種類に因つて、その形状を異にする。頭は大きく、頸は長く、體軀は小なれども、肥つて居る。



トツミハ、ルトツリ 圖三十三百二第
りよ維織物植の狀絹は巢の鳥蜂のこ 巢の
てし而、む編に共を巢の蛛蜘蛛にれそ、り成
(By H. Grönvold) りあに端末の葉は巢
(From Marvel's of the Universe)

く、體軀は小なれども、肥つて居る。羽毛は密生し、常に金屬光澤を帯びて居る。最も普通なる色は綠色である。一産に二卵を産み、卵殻は純白である。而して雌のみ抱卵し、卵は十日にして孵化する。常に微小なる昆蟲及び花蜜を食ひ、花上を飛翔しながら、食物を取るの

である。その鳴き聲は、單にチュエー
チュエーと、蟋蟀でも鳴くやうな聲なるか、又はキーキーといふ聲である。一種 (Mellisuga minima) は、よい歌調で鳴くのである。

主として、亞米利加大陸の南部に棲めども、或る種類は、所謂「渡り」をなして、アラスカ

及びカナダの如き温帯地方に、來遊するものもあり、またアンデス山の高地に、來るものがある。即ちその水平分布は、カナダよりフエゴ地方に亘り、垂直分布は、チンボラソの山脈に於て、海面上一萬六千尺の高さに達して居る。この科には、約五百種を含んで居る。この類の敵は鳥蜘蛛 (Mygale avicularia) である。この蜘蛛は、蜂鳥の巢の附近に、巢を張りて棲息し、蜂鳥の卵と雛とを食する外、時には成鳥を食ふことがある。

〔一〕 アンナス蜂鳥 (Annas Humming-bird) Calypte anna.

小形の蜂鳥にして、咽喉部は紅玉色で、光澤がある。又頭頂と耳羽も、これと同様である。全身は光澤を帯び、風切は青綠色にして、割合に長く、尾翹は稍扇形を呈し、嘴は細長く、先端少しく圓く曲りて、下方に向ひて居る。この種は北米の産である。

〔二〕 胸赤蜂鳥 (Ruby-throated Humming-bird) Trochilus colibris, L.



鳥蜂赤胸 圖四十三百二第
(Photo by W. Saville-Kent)

〔北米合衆國及び加奈陀地方に産する。體の上部は綠色にして、金屬光澤を帯び、體の

下面は白い。雄はその咽喉部は赤色である。

五八八

(三) 繡眼兒科 (Meliphagidae)

體軀は小さく、羽毛の色は概して美しく、且つ體は丈夫に造られて居る。嘴は長く、少しく彎曲する。跗蹠部は長く、翼は中府の長さにして、尾は長い。舌は長くして口外へ伸出し、刷子状をなして花蜜を吸吮するに適するのである。

(一) 蜜喰(假稱) Prothematodera novae-zealandiae

英名を「チユイ」(Tui) 又「ポー」(Poo) と稱し、ニウジーランドに産する。羽色は暗色にして、光澤を帯び、緑色及び藍色の鮮やかなる反射を呈する。頸の上部よりは兩側に向つて、白色の毛總が垂下せるを以て、その状、恰も西洋の僧侶の如き觀がある。そこで英名を又「パーソン、バールド」(Parson-bird) (僧侶鳥) といふ。この鳥は、よく他の鳥類などの音を真似るものにして、談話することも、教へ込むことが出来るのである。こゝに「蜜喰」の假稱を付したるは、この類の種類を總稱して、英に「ホネー、イーターズ」(Honey-eaters) 又は「ホネー、サッカース」(Honey-Suckers) (蜜吸ひ) と稱するに、基いたものである。

(二) 太陽鳥 (Sun-birds)

この類の鳥は、亞弗利加南部、亞細亞、濠太利亞に産し、多くのものは、小形なれども、甚

だ美麗にして、東半球の蜂鳥といふべきものである。雌は曇つた色であるが、雄は著るしく光澤ある金屬色を有して、美麗である。然し、この色も、冬季になれば、その色彩を失ふのである。嘴は細く、且つ彎曲し、その縁邊に沿ふて、極く細かな、鋸齒状の突起を有する。常に花間を徘徊し、花蜜及び昆蟲を食すれども、蜂鳥の如く、飛びながら食物を取ることはないのである。而して亞弗利加の南部に於ては、この鳥に因りて、受粉の媒介を受くる植物がある。

(一) 紫太陽鳥 (Purple Sun-bird) *Archnechtra asiatica*.

印度に産する。鷓鴣大の鳥にして、羽色は暗色を帯びたる、金屬光澤ある紫色にして、腋下に、燦黄色の毛總を有すれども、雌は黒味を帯びたる綠色である。雄はよく囀づるのである。

(二) 亞弗利加孔雀色太陽鳥 (African Malachite Sun-bird)
Nectarinia famosa, III.

亞弗利加に産し、體軀の大きさは、紅雀位であつて、毛色は輝ける綠色にして、中央の尾翹は長いのである。

(三) 繡眼兒 又めじ (靜岡) 又めんじろ (八丈) 又めんじめ (八丈)

Zosterops Japonica, Temminck and Schlegel.

英名を「ジャバニース、ホワイトアイ」(Japanese White-eye) といふ。本邦に四時棲息する特有の鳥なれども、北海道にはあまり普通ではない。胸と翼とは、灰茶褐色にして、眼上は白い。竹林、雑木林の細枝端に、囊状の巢を營み、外部は、草莖、蘚苔、地衣等を以つて編み、内部に、少しく毛髪を貯へ、絹絲を以つて、固く細枝に懸垂する。卵は、帯青白色にして、斑紋がない。この鳥は常に花蜜、小蟲を食ひ、又柿の實の熟したるもの來りて、啄むのである。小川三紀氏に據れば、静岡市内にては、春季櫻花に來りて、蜜を吸ふことは、普通である。八丈島にては、椿の花の蜜を吸ひに來ること多しといふ。籠鳥としてよく鳴くものである。鳴き聲は陽氣である。

〔四〕 目黒又小笠原眼白 Hapalopteron familiare (Kittlitz.)

英名を「ボーン、ホワイトアイド、ワーブラー」(Bonin White-eyed Warbler) といふ。小笠原島に産する眼白にして、第一手翹は大きく、翼は圓形である。體の上部は橄欖色、體下は黄色にして、眼の周圍には、白毛の環を有し、眼前は黄色にして、額と上眼脛にある條紋は黒い。耳覆羽の前半も黒く、その後半部は黄色である。

〔五〕 鴨又ひよ(鴨) Hysipetes amaurotis (Temminck)

英名を「ブラウン、イーアド、ブルブル」(Brown-eared Bulbul) といふ。翼長は四寸乃至四寸四分にして、頭上に生ずる羽毛は、その末端尖りて灰蒼色である。頬部と咽喉部とは、焦茶色であつて、全身は黒灰色に淡青色を帯び、腹部は淡灰青色にして、白斑を帯び、脚とは黒色である。

この鳥は、本邦の南部にては、夏季は山地にて蕃殖し、十月頃より平原村落に多く出で來り、十二月頃は、最も多く出現するのである。巢は叢林にありて、小枝、苔、粗き根等を以つて造り、その内面には、柔軟なる根を用ひて編んで居る。卵は淡紅色を帯べる白色にして、綠色にて縁取りたる赤褐色の斑紋を有する。この鳥は、猫、雀、カケスなどの聲を模擬するのである。

秋季には、センダン、ナンテン等の果實を食ふのである。嘗つて播磨の國に於て、大上宇一氏の調査せられたる所(動物學雜誌所載)に據れば、鴨の食する植物の果實には、前記のもの、外に、キハダ、エンジ、ヤブラン、ガマズミ、コガマズミ、ウシコロシ、ウラジロノキ、マンリヤウ、カラタチバナ、ヤブカウジ、ヒヨドリジョウゴ、ヤブムラサキ、コムラサキ、ムメモドキ、モチ、カナメモチ、シロダマ、ヤブニクケイ、ムク、エノキ等がある。川越に於ては、二月頃(殊に早朝)盛んに、山茶の花に來りて、頻りに、花蜜を吸吮するを見るのである。武州

鴻巣の深井武司氏が観察せられたる所(動物學雜誌二)によれば、鵜が食物に盡くる頃、即ち一月下旬より三月上旬には、麥の葉を食ふといふことである。

[六] 小笠原鵜 *Hypsipetes amaurotis squamiceps* (Kittl.)

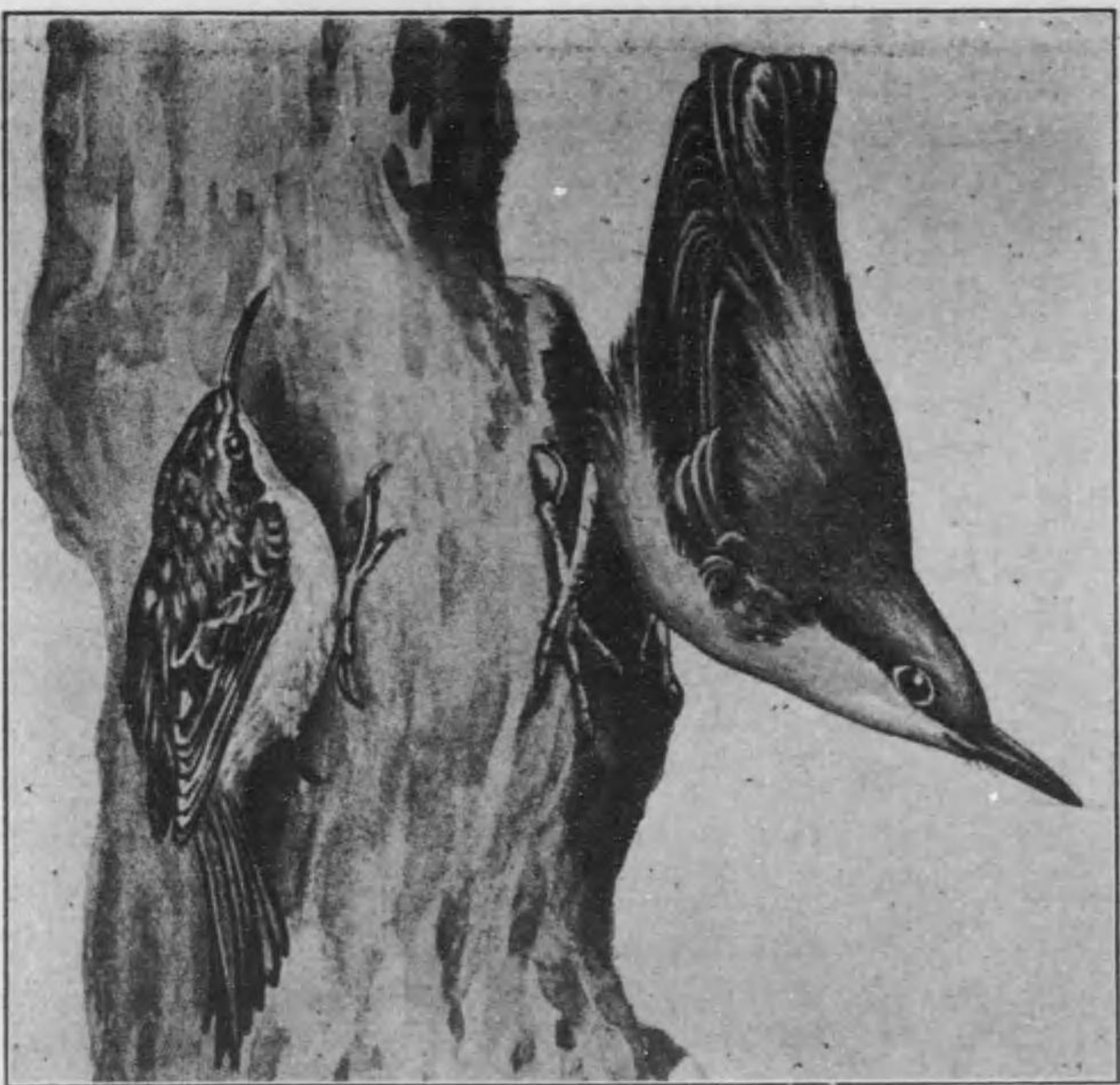
英名を「ボニンアイランドブルブル」(Bonin-Island Bulbul)といふ。小笠原島に産する鵜にして、鵜よりも少しく大きく、翼長は四寸乃至四寸六分に達する。耳覆羽及び翼より、咽喉と腹部とに至るまで皆、焦茶色である。

[四] 木走科 (Certhiidae)

英に「トリークリーパー」(Tree-Creepers)といふ。樹木に這ふ者といふ義である。小形なる鳥にして、南亞米利加を除き、殆んど地球上到處に産する。嘴は細長にして尖り、伸直なるものあり、又少しく彎曲するものがある。前方にある趾の中で、外趾は殆んど中趾位の長さを有し、後趾は長くして、鋭利なる爪を具へて居る。
この科のものは、常に昆蟲を食し、樹木に攀縁すること巧みにして、罅隙に産卵するのである。

[一] 木走 *Certhia familiaris*, L.

英名を「コンモン、クリーパー」(Common Creeper)又「コンモン、トリークリーパー」(Common Tree-Creeper)



(From Birds Useful and Harmful) (右) 雀十五ミ (左) リしばき 圖五十三百二第

Tree-Creeper) といふ。嘴は細長にして、戴勝の如く彎曲する。體軀は、鵲よりは瘠形なれども、彼れよりは長いのである。尾翹は、啄木鳥の尾羽の如く、硬直にして尖り、以つて樹木に攀縁するに當りて、體を支へるに適する。尾の毛色は、帶赤褐色である。三趾は前向し、一趾は後向する。

この種は、本邦より、亞細亞、歐羅巴、北米の極地に近き地方に産し、常に森林若くは耕地に棲息し、産地に因つて、幾分の變化がある。體の上部は、樹幹の色と一致する所の灰色にして、白の斑紋がある。爲めに所謂保護色をなせるを以つて、之を發見するに困難である。常

に樹皮の裂目より、害虫の卵及び小形の蜘蛛類を食する。而して古幹の周囲をば、螺旋状に攀縁する態度は、如何にも敏捷なるを以つて、鼠が跳ね居ると誤まるゝ位である。巢をば、樹皮の裂目、樹幹の間、若くは小孔に造る。之を構成する材料は、主に樹皮、腐朽せる木材の片、小枝より成り、その内面をば、蘚苔、毛、羽毛を以つて縁付けてある。これに五個、時として九個の、乳白色の卵を産む。卵殻には、鋪赤色及び血紅色の斑紋がある。

第三亞目 齧口類 (Fissirostres)

(一) 燕科 (Hirundinidae)

この科には、凡そ八十種ありて、殆んど地球上到る處に擴がれども、ニユージーランドには、何れの種も、棲息しないのである。體軀は小さく、華奢に造られ、嘴は幅廣く三角形をなし、その先端に於て、壓縮せられて居る。脚は小く、地上に止るときは、跳躍することをなさずして、よろめき歩くのである。翼は十枚の手翹を有すれども、第一手翹は判然しない。尾翹は十二枚ありて、長くして又狀をなすのである。

巢を造る習性は、種屬に因りて、餘程異れども、概括して云へば、粘土にて造るか、又は穴中にあるのである。この科のものは、候鳥にして、飛翔力甚だ強く、概ね昆虫を餌食となし、皆有益鳥である。

(一) 燕つばくろ又つばくらめ又ちゅーぶくら

(鳥八丈) *Hirundo rustica gutturalis* (Scop.)

英名を「イースターン、チムネー、スワロー」(Eastern Chimney-Swallow)といふ。雀大の小鳥にして、頭頂、背及び翼は、青き光澤を有する黒色にして、額と幅廣き咽喉部とは、栗色であり、胸部には黒帯を有し、腹部は純白色である。頭は幅廣く、且つ凹み、頸は甚だ短い。嘴は角質にして短けれども、扁平にして、基部は幅廣く、その先端に至りて細く尖り、上嘴は稍下方に彎曲する。口角は深く裂けて、眼下まで達するを以つて、廣く口腔を聞くことが出来る。これ飛翔しながら、昆虫類を啄むに適する爲めである。鼻孔は嘴の基部に開在し、眼は頭の兩側に位し、視力は極めて鋭敏である。



圖六十三百二第 燕の頭部

翼は非常に長くして狭く尖り、稍鎌狀を呈する。尾翹は必らず

又狀に分岐し、十二枚の翹より成り、その縁邊は、恰かも截り斷たれたるが如くに見ゆる。而して光澤無き黒色にして、白斑を有する。斯くの如く、體の割合に、よく發達せる翼と尾とを有するが故に、燕は迅速に飛翔し、また敏活に、その飛び行く方向を變ずることが出来る。今この鳥の動作を注視するとき、空中をば急しげに、或は上り、或は下り、

或は屈曲して飛び回はり、或は相互に交叉しつゝ、頻りに昆蟲を追窮し、之を口に啄むを見るのである。實にその速力の迅速なる、よく一時間に二十四里二十餘町の距離を、

五九六

飛翔し得るといふことである。

脚は甚だ短く、且つ屏弱なるを以つて、歩行は極めて拙劣である。而して一旦地上に止まるときは、再び飛び出すに當りては、誠に困難である。これ、燕は飛びながら食餌を啄み、爲めに地上に來りて、之を索むる必要なきを以つて、斯く脚の發達せざるやうになつたのである。趾は中庸大にして、鋭爪を具へたれば、壁間又は、天上板にても、其處に少しにても凹凸部あれば、これに爪を引き懸けて、止まること



メバツ 圖七十三百二第

出來るのである。

燕は、英國より歐洲大陸を経て、トルキスタン及び西比利亞に至るまで分布し、更らに蒙古、ヒマラヤ山より、支那を経て、本邦にまで擴がつて居る。春來り、秋の末に至れば、南方の暖地に去る候鳥である。

燕は、年々同一の舊巢に歸來し、その使用に堪ゆるものは、之を修繕して、再び使用すれども、破損甚だしくして、全く用をなさざるものは、新らたに造り換ゆるのである。巢の材料は、主として泥土より成り、之れに藁を雜へ、乾燥の際、その破解するを防ぐのである。また内部の凹處には、羽毛、枯草の類を集めて、之を敷き、その上に、四乃至六卵を産む。雌は孵化の勞を取ることに、凡そ二週間にして、卵は孵化するのである。雛は産れたる當時は、體には羽毛なく、且つ盲目にして、極めて哀れむべき姿であつて、永い間親鳥に因りて養はるゝのである。

(一) 琉球燕 *Hirundo javanica namiyei* (Stejn)

英名を「ルウチユウ、バンガロウ、スワロー」(Loochoo, Bangalow-Swallow) といふ。沖繩諸島に渡來する燕にして、前種よりは稍小さく、且つ尾翹は僅に分岐し、胸部には黒色帯なく、灰白色である。習性も前種と同じである。

〔三〕 腰赤燕又德利燕又あなぐらつばめ
Hirundo alpestris nipalensis (Hodgs.)

英名を「ジャババニス、モスク、スワロー」(Japanese Mosque-Swallow)といふ。翼長は三寸七分乃至四寸に達し、頭側及び腰部は栗色をなし、腹面は淡褐色を帯び、これには數多の黒き細縦條を有する。尾は黒色なれども、白色の斑點を有することはない。

夏季、本邦の南部に來遊すれども、北海道には棲息しない。粘土にて德利狀の巢を造るを以つて、一に德利燕の名がある。その蕃殖區域は、ヒマラヤ地方、北部支那、本邦にして、冬はバルマ、フロレス及びマレイ群島にありといふ。

〔四〕 岩燕又はまきつばめ又ゆきつばめ(米譯)
Chelidon dasytus, Bonaparte.

英名を「ブラックチンドマーチン」(Black-chinned Martin)と云ふ。夏季、富士、日光の如き深山に來遊し、絶壁に巢を懸け産卵するのである。體は通常の燕よりは遙かに大なれども、尾の分叉は極めて淺く、頭より背部に亘りて、光澤ある黒色にして、腰は白く、願には黒色小點を有し、體の下面は總べて白色である。冬季はボルネオ其他の暖地に去るのである。

〔五〕 しやうごう燕又すなむぐりつばめ *Cotile riparia* (Linn.)

英名を「サンドマーチン」(Sand-Martin)といふ。本邦に來遊する燕科中の最小なるものにして、尾翹の分叉は少く、且つ體の上部と胸部とは茶褐色にして、下面は殆んど白色である。



燕うごうやし 圖八十三百二第
(From Birds Useful and Harmful)

この種は、他の鳴禽類よりは廣く分布し、東西兩半球の大部分に産し、その蕃殖地は、英國より歐羅巴大陸、南部西比利亞、本邦より、亞米利加大陸の東部、バツフキン灣にまで亘つて居る。常に海濱、河岸等の絶壁、鐵道線路の掘割、石切場、砂穴等に來訪し、その鋭短にして強壯なる嘴を用ひて、迅速に砂質地に穴を穿つのである。而して弛るい砂の隧道を穿つ仕事は、常に朝の内に行ひ、數日所は脚で掻き分けるのである。而してこの隧道は、地の表面より、一尺位の深さに造られ、そ



部一の團群の巢のめげつうごうやし 圖九十三百二第
 (Photo by W. F. Piggott) (From Living Animals of the World)

六〇〇

の水平の長さは、一尺乃至六尺に達し、その奥には、かまに似たる室があつて、この中に更らに又植物纖維、草、羽毛等より成れる室を有し、そこに、五個の小なる純白色の卵を産むのである。

常に群居するを好み、一ヶ所に、幾百千も集合せる隧道は、ト恰も蜂窠状に見ゆるのである。而して春季歸來して、その舊巢の穴を探し求めて、之を大きくするのである。常に昆虫類を食ひ、殊に蚊を多く食する。

〔11〕 雨燕科 (Cypselidae)

燕状の鳥にして、嘴は小さく、脚も亦小さく、翼は長い。口角は眼下に達する。脚は甚だ短き跗蹠部を有し、燕科の如く、鱗片を有することなくして、常に羽毛を有する。第一趾は最も小形にして、屢々後方に向かすして、内方及び前方に向つて居る。翼は甚だ長く、尾は長きか、若くは短くして、又状をなし、方形なるか、又は

圓くある。而して圓き場合に於ては、屢々蹠の先端は刺状となつて居る。而して尾蹠は燕科が十二枚を有するに反して、本科のものは十枚である。

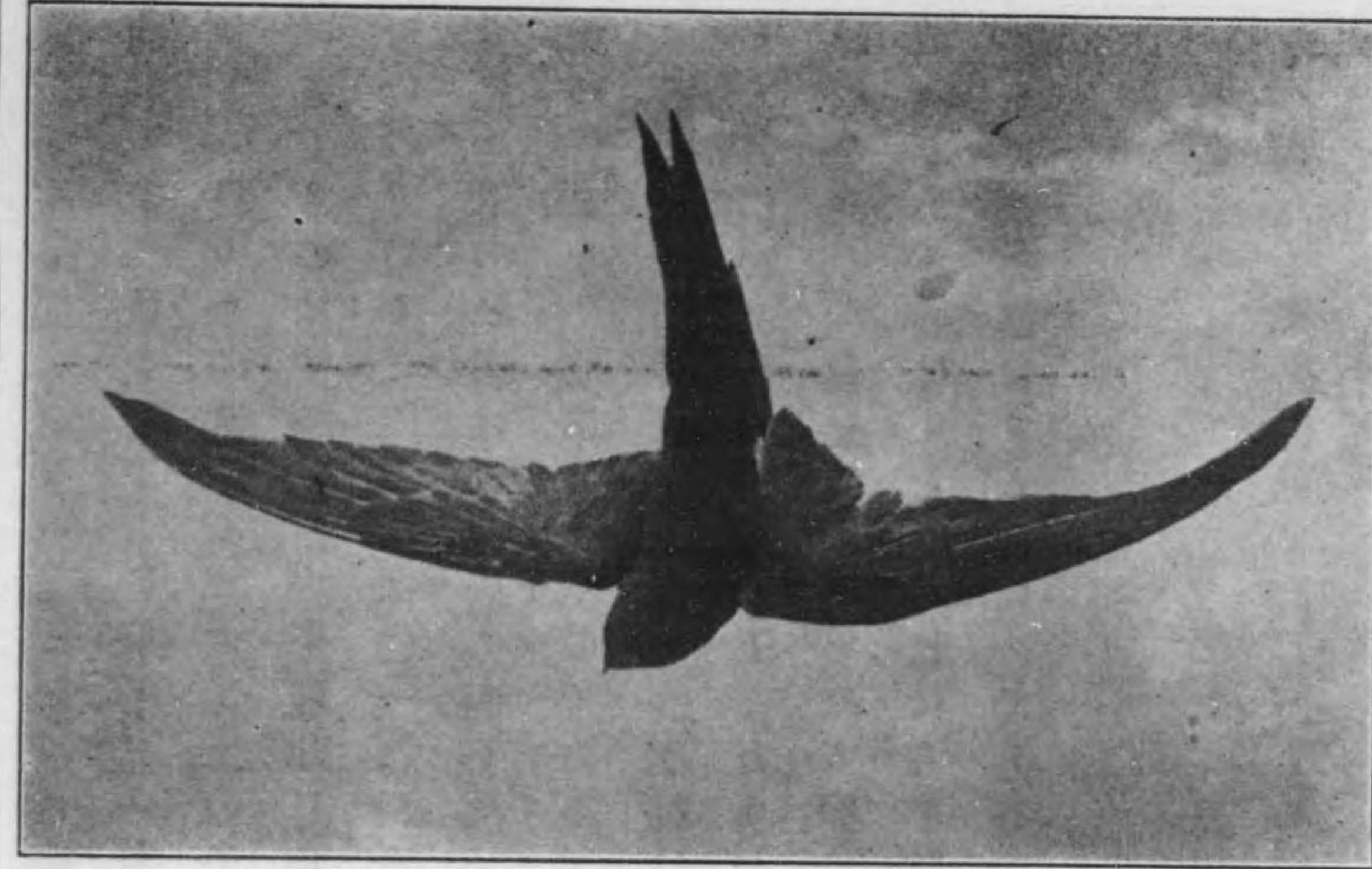
この科のものは、殆んど地球上の各地に産し、主に温暖地方に棲む。而してニュージーランドには、棲息しにあるものは、冬季は南方の暖地に移住をする。而してニュージーランドには、棲息しないのである。この科には、約一百種を有する。飛力は迅速にして、總べての鳥の中で、最も迅きものと云はれて居る。而して一たび地に下るときは、不器用に徐行し、趾に於て立つことなく、蹠にて歩くのである。又よく樹木に攀り、またよくすが縄り付くのである。

常に群居するを好み、その鳴き聲は叫聲である。巢を造る所は、種屬に因つて異同ありて、常に岩上又は建築物上であるか、時としては樹木上にあることがある。皆多少の唾液を混じて巢を造るのである。卵は一産に、一乃至四卵にして、形状は稍伸長し、色は純白である。卵は凡そ十八日にして孵化するのである。この科のものは、常に飛翔しながら、昆虫を捕食するを以つて、有益鳥である。

〔1〕 褐色雨燕(假稱) Cypselus apus, L.

英名を「スイフト」(Swift)といふ。東半球の大部分に産する雨燕であつて、羽毛は青銅色に似たる帯黒褐色である。而して咽喉部は帯灰白色で、嘴と爪と趾とは黒い。尾は又

欠



燕 雨 色 褐 圖 十 四 百 二 第

(Photo by J. T. Newman) (From The Living Animals of the World)

狀をなし、翼は狭長にして、鎌の如しである。雲雀よりも高く、中空に飛翔する。巢を常に檐下の罅隙に造り、枯草、羽毛等を集めて、唾液にて凝結せしめる。卵は概して二個で、卵形にして白色である。

(二) 金絲燕 *Collocalia esculenta*, L.

英名を「エスキュレント・スィフト」(Esulent Swift)といふ即ち「*Swift*」の義である。嘴、脚、羽毛は、共に暗黒色にして、頬邊に褐色の斑点がある。脚は短くして、翼の先端が尾を越ゆること一寸許である。これは、東印度及び支那の沿岸に棲息するものである。この鳥は、唾液を以つて、海藻を混じり、以つて、岩礁絶壁上に、特異の巢を造るのであ

欠

六寸三分で、尾筒部は白きが故に、容易に區別せらるゝのである。夏季は本邦到る處に來遊し、その蕃殖區域は、本邦より南部西比利亞、及びイエニセイの溪谷である。

〔四〕 針尾雨燕

Chaetura caudacuta (Lath.)

英名を「ニードル、テイルド、スイフト」(Needle-tailed Swift)といふ。翼長は六寸七分、若くはそれ以上もありて、尾翹は針狀である。夏季本邦に來遊し、その蕃殖區域は、本邦より北支那、西比利亞の南東部に亘る。冬季は濠太利亞に渡るのである。

〔三〕 蚊母鳥科

(Caprimulgidae)

體軀の大きさは、雉子位より雲雀位である。嘴は甚だ小さく、管狀の鼻孔と、廣潤なる口角は、眼下に位する。脚は短き跗蹠部を有し、前方にある總べての趾は、その基部に膜を有する。而して後趾は小さい。翼は常に長く、頭は大きく扁平にして、眼は大きい。頸は短く、體軀は甚だ小さいのである。羽毛は柔軟にして、通例、口の周圍に剛毛を生ずる。別に巢を造ることなくして、卵は裸出せる地上に置かれ、その數は二個にして、斑紋を有し、色は礫によく似て居る。而して凡そ二週間位にして孵化して、雛となるのである。この科のものは、主に飛翔しながら昆蟲を捕食し、有益鳥である。その鳴き聲は、叫聲である。而して本科には、約百二十種位ありて、地球上到る處に産すれども、主に熱帯に産し、温

帯産のものは渡鳥である。

〔一〕 歐羅巴蚊母鳥(假稱)

Caprimulgus europaeus, L.

英名を「ナイトジャー」(Nighthawk)といふ。體長は約八寸四分である。羽毛は柔軟にして、二枚の中央の尾翹は、暗色の斑點と、斷續的に存する横條とを有する所の、美なる灰色である。頭は大きく、眼は暗褐色にして大きく、暗所にありても、よく物を見ることが出来る。嘴は小さく、口腔は割合に潤大にして、上嘴の縁邊には、可動性の剛毛を有する。脚は短くして弱い。

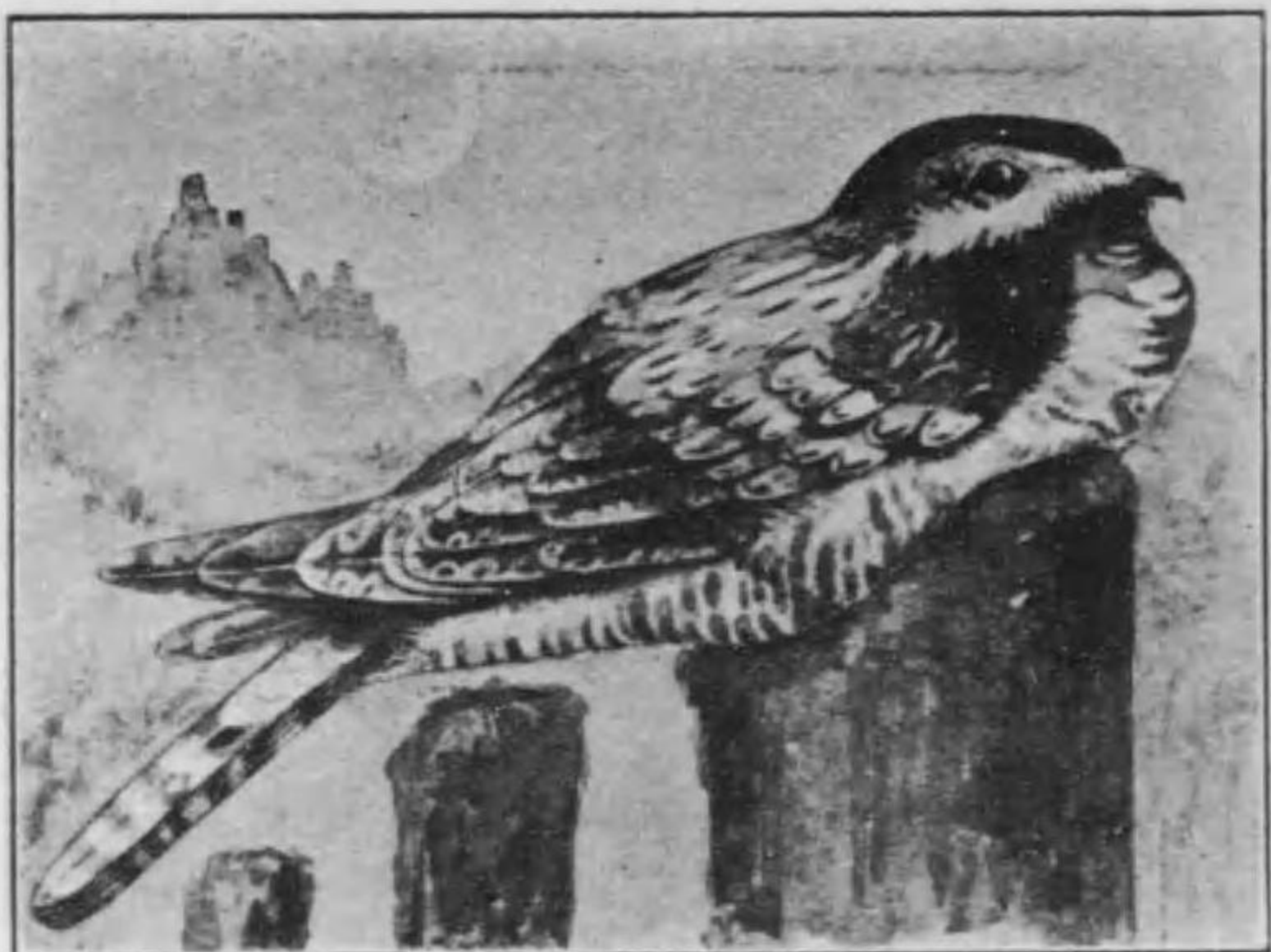
味爽及び黄昏出遊し、太陽が輝き出れば、樹木の枝上に隠れるのであるが、羽色が、ふく枝の色と一致するを以つて、容易に敵に發見せらるゝことはない。その飛びながら取る昆蟲の中で、最も大形のもの、は、夜蛾科のものである。この科の鳥のことを、英に「ゴートサツカー」(Goatsucker) (山羊吸の義)といふは、これが牧場に飛翔するに當りて、牛や山羊の乳を吸ふといふ迷信より、起つたものである。

〔二〕 蚊母鳥又かすひ又かすひツリ

Caprimulgus jotaka, Temm. and Schl.

英名を「ジャバニースゴートサツカー」(Japanese Goatsucker)といふ。雄の尾翹には先端

に近き部分に、白斑があつて、尾翹の兩側にある四枚の外翹にのみ、白斑を有し、中央にある二枚の尾翹には、斑紋がないのである。



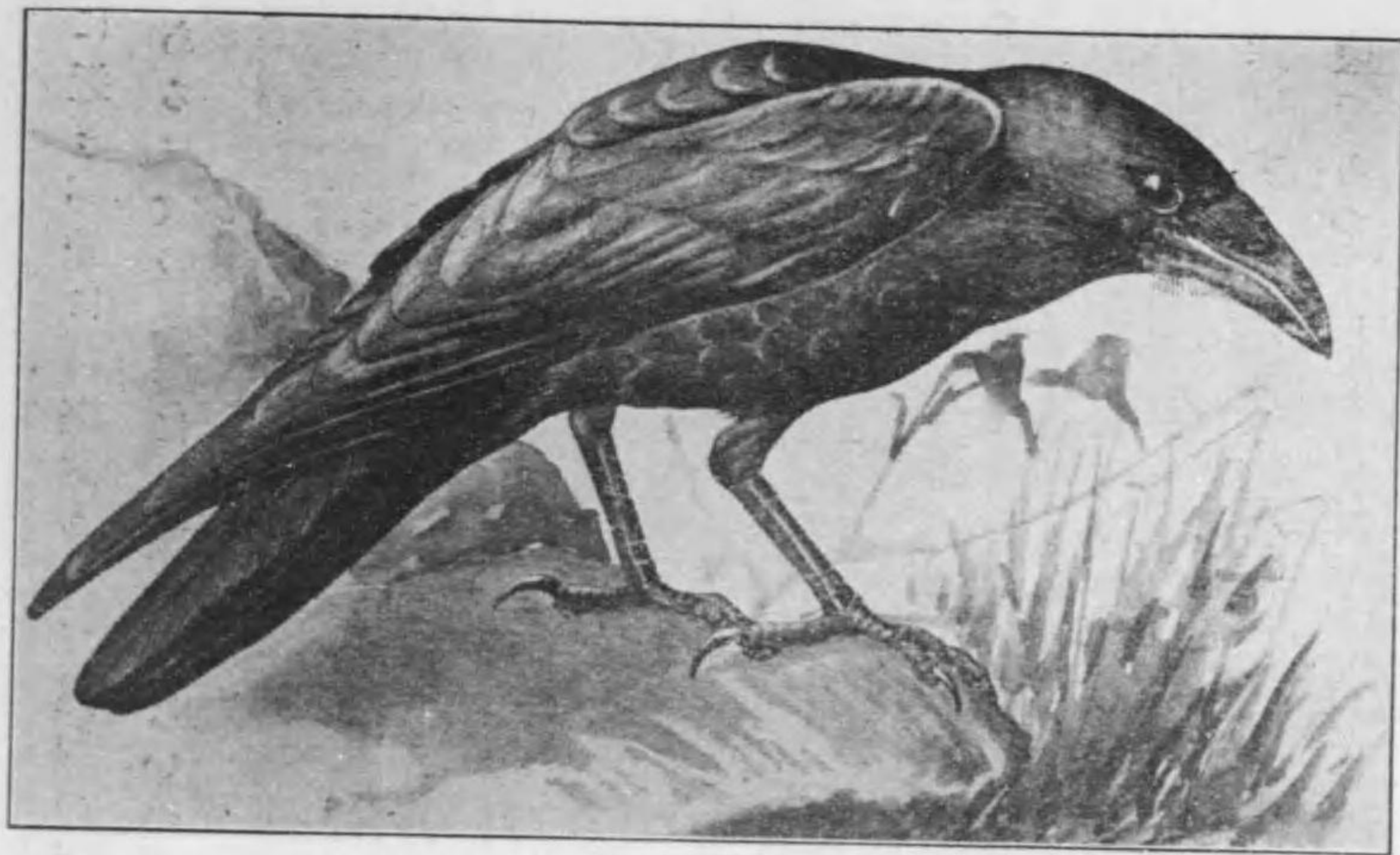
第二百四十四圖

この種は、本州及び北海道にも産し、北方は滿州を通りて、黒龍江の溪谷にまで擴がり、南方は蒙古の南東部、支那、バルマ、ネバルまで擴がつて居る。恐らくは、夏季に於てのみ、本邦に來遊し、山地にて蕃殖し、地上に二卵を産むのである。

第四亞目 齒嘴類 (Dentirostres)

〔一〕 鳥科 (Corvidae)

鳴禽類中で、大形の鳥であつて、嘴は強壯にして、鼻孔は、前向せる剛毛に因りて被はれて居る。脚は強壯にして、食物を食ふ際に、餌をば支へるに使用するものである。本科のものは、殊に雜食するものにして、常に群居する。羽毛は雌雄に因りて相違なく、また季節的の變化がない。巢は、普通は開いた儘であつて、卵には斑紋を有する。多くのものは、地上にありて歩行する。又飛翔すること



スラガリタツ 圖三十四百二第

六二〇
きは、鳴禽類の多くの種類がなす如き、波動状の飛方をなすことはない。本科のものは殆んど地球上到る處に分布するのである。

〔一〕 かたがりがらす *Corvus corax*,
Linn.

英名を「レーブン」(Raven) といふ鳥科中の最大なるものにして、體長は二尺一寸もあり、翼長は一尺三寸四分、乃至一尺六寸三分もあり、兩翼を擴張するときは、四尺に達するのである。嘴は大きく、且つ稍彎曲する。翼の羽毛は、黒色にして、藍色若くは綠色の光澤を有し、且つ殆んど白き基部を有する。また咽喉部と上胸部との羽毛は、披針狀をなして、尖り尾は楔形である。

この鳥は、北半球の極地に近き地方に、棲息

し、グリーンランドより、南は西班牙に至るまで擴がり、又我が千島にても蕃殖するのである。常に森林に於て、高木の頂に巢を造る。巢は草、羊毛、羽毛より成れる不規則なる塊であるが、若し海岸に近くある時は、これに交ゆるに、多量の海藻を以つてするのである。一産に四乃至六卵を産み、卵は淡綠色にして、暗色の小斑點を有するのである。

この鳥はよく圓環を描いて、翻き飛ぶ。その性質は、狡猾且つ怯懦にして、絶へず餌物の搜索に従事する。その食物は、蚯蚓より、兎大のものに至るまで、あらゆる物を掠奪し、他鳥の巢を襲ひて、卵や雛を奪ひ、また屍肉を食ひ、海岸に漂着する魚類も食ふのである。蕃殖期にありては、自分の巢に近づく食肉鳥に向つても、戦闘を開始するのである。

〔二〕 嘴太鳥 *Corvus macrorhynchus japonensis*, Bonaparte.

英名を「オリエンタルレーブン」(Oriental Raven) といふ。嘴は太く、上嘴の高さは、鼻孔の處で、六分六厘位である。翼の羽毛は、帯緑黒色にして、羽毛の基部は暗色である。咽喉の羽毛は、披針狀をなせども、上胸部の羽毛は、披針狀をなすことはない。本邦に普通なる鳥にして、北部支那、西比利亞、千島にも産するのである。小熊桿氏の札幌よりの通信が、嘗つて雑誌「博物の友」にあつたが、札幌にては、冬季十二月頃は、鳥の數夥しくして、精米所の附近などは、常に數十の鴉集り居らざるなく、貪慾にして、飢ゆる時は、生きたる

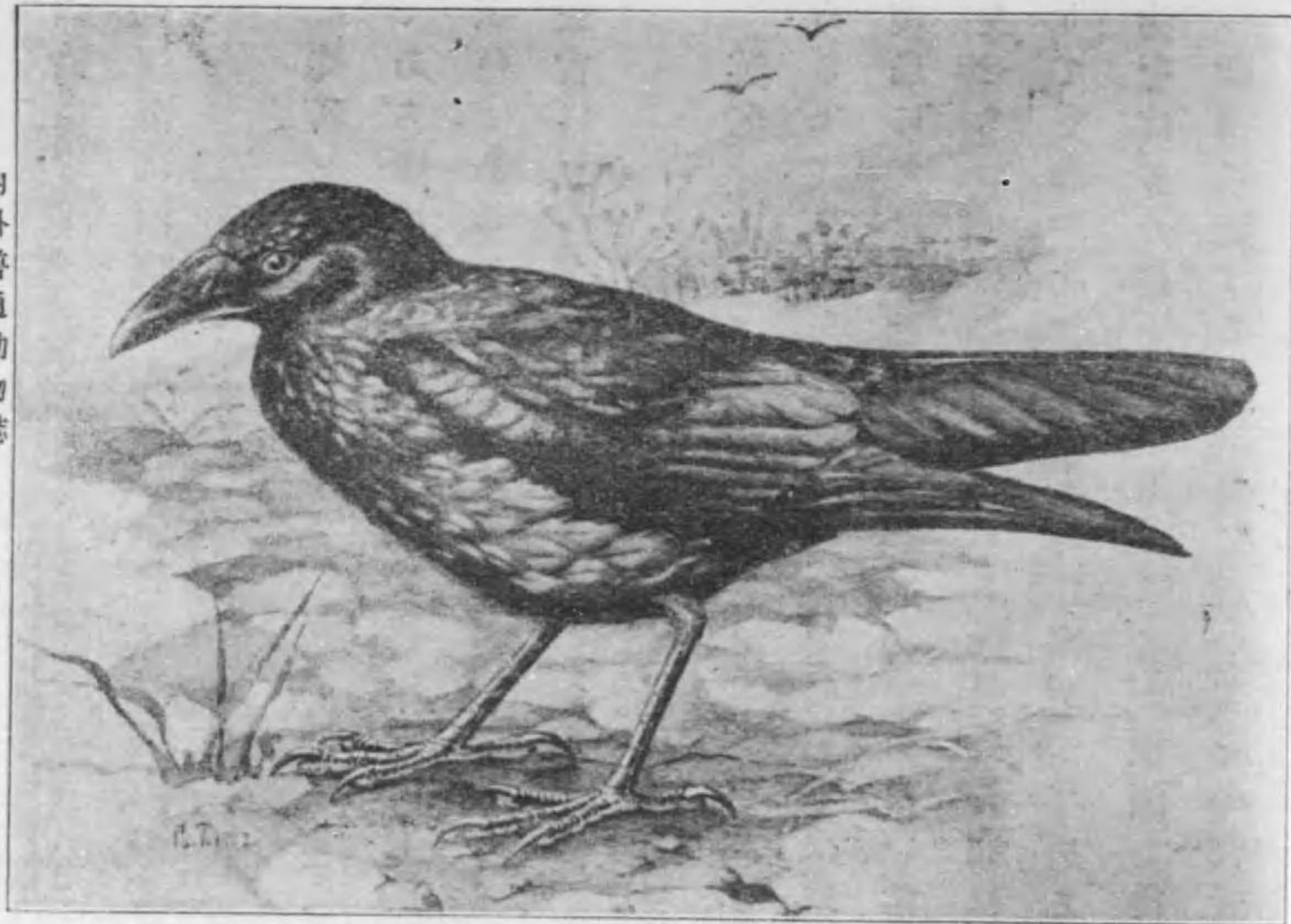
犬を襲ふこと決して稀れならず、特に病犬は、彼等に會ひては、死を免るゝことが出來ない。尤も春來り雪消へて、海岸に漁業の盛んとなる時は、皆海岸に去つて、その餌物にありつくのである云々と。播磨の大上宇一氏に據れば、蛇、蟬、蜂、毛蟲等を食ひ、甚だ穀類を害すといふ。

〔二〕 嘴細鳥 *Corvus corone*, Linn.

英名を「カリヤン・クロウ」(Carion Crow)といふ。嘴は黒く強壯にして、且つ彎曲し、その太さは細いのである。翼長は一尺有餘である。眼は暗褐色にして、脚は黒く、翼の羽毛は、帶緑紫色の光澤を有し、その基脚は淡灰色である。

常に森林に巢を造り、多くは孤獨して棲んで居るが、若し他のものと共に棲めば、各者が、別々の樹上に於て、個々、巢を造るのである。巢は小枝、根、葉等より成り、その凹處は軟らかく縁付けられ、春季、その中に四乃至六卵を産む。卵は淡綠色にして、褐色と灰色との斑紋を有するのである。

性質狡猾且つ敏捷にして、注意深く、また勇氣に富む。餌を探がすとき、一羽が啄み居る間、他の一羽は番をなして警戒し居るといふことである。又銃器を有する人と、有せざる人との精密に識別することが出来る。嗅覺は甚だ鋭敏にして、積雪下、若くは地下



第 二 百 四 十 四 圖 しばそがす (After Herman and Owen)

にある屍肉をば、一哩位も離れたる所より、嗅き付ける位である。尤もその英名の示すが如く、屍肉のみを食するものにあらずして、蝸牛、蚯蚓、デムシ、ハタネズミ、ハツカネズミの類を食ひ、又大量に昆蟲を食する。その海岸に棲息するものは、嘴にて大なる貝殻を啄みながら、高く空中に昇り、高處より之をば岩礁上に墜落し、以つて殻を破りて、その中の肉を食ふのである。また有益鳥の巢を奪略し、漿果、穀物、及び馬鈴薯を食ふのである。

この鳥は、本邦に棲息すれども、前種よりは多くはない。又その分布は、イエニセイ溪谷より、南部西比利亞の山地

に沿ふて、トルキスタン、コウカサス、ダニユーブの溪谷を通りて、歐洲に亘り、西はエルベ河、南は西班牙、北は英國にまで擴がつて居る。

〔四〕 燕鳥 *Corvus dauricus*, Pall.

英名を「パラスス、ヂャツクカドゥ」(*Pallas's Jackdaw*) といふ。翼長は七寸五分乃至八寸である。頸の周圍には、白色の襟毛を有し、胸と腹と横腹とは白く、翼の羽毛の基部は、暗灰色である。この鳥は、本邦には稀れである。その分布は、東部西比利亞より、北部支那、東蒙古に亘つて居る。

〔五〕 御山鳥 *Corvus pastinator*, Gould.

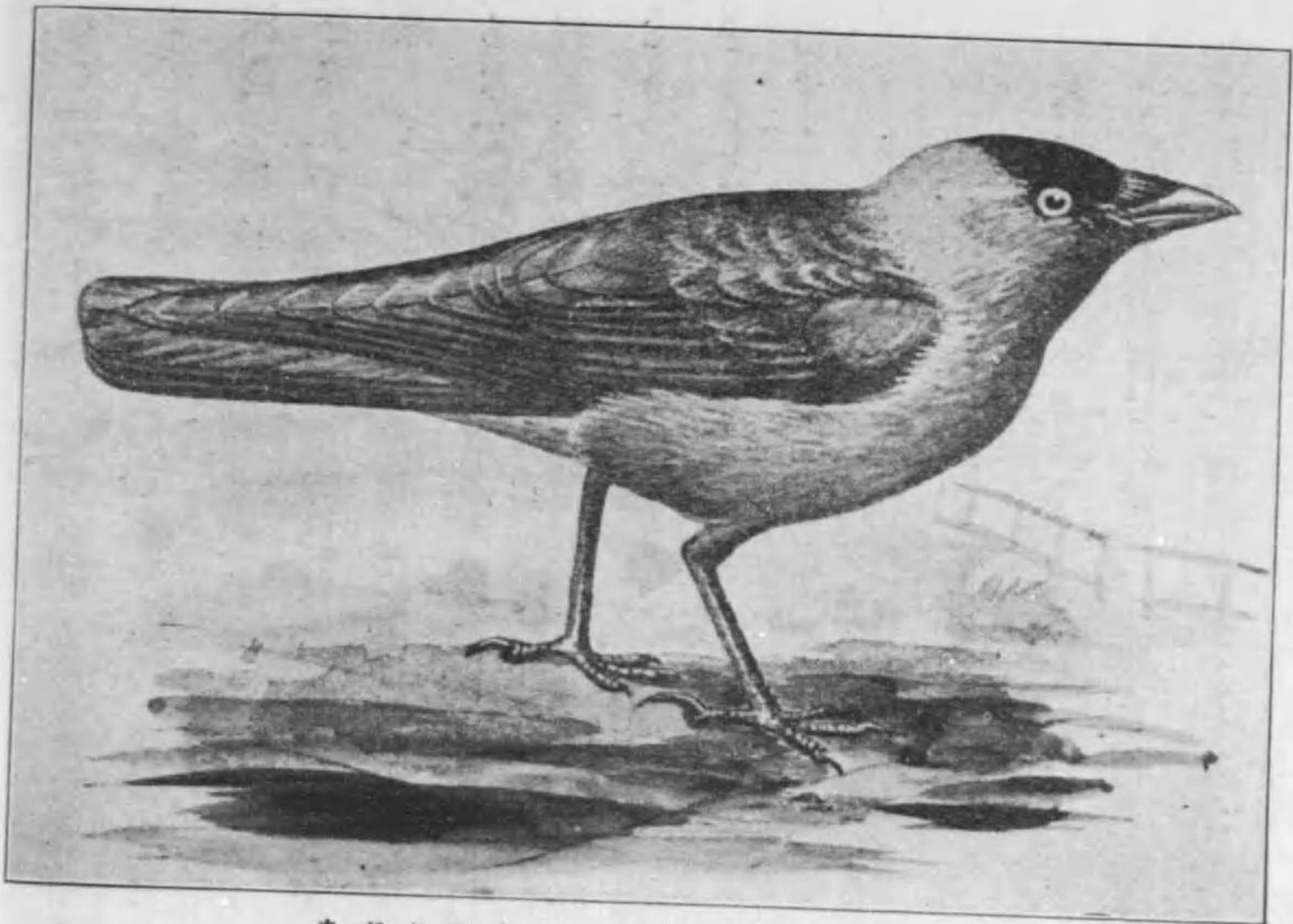
英名を「イースターン、ルック」(*Eastern Rook*) といふ。翼長は、九寸四分乃至一尺七分もある。嘴は、嘴細鳥の如く細い。翼の羽毛は、暗灰色の地に、帯緑紫色を混じて、輝いて居る。親鳥にては、額及び眼前には、羽毛がない。常に本邦の南部に棲息し、未だ北海道には發見せられて居ないのである。此鳥の分布は、イルクツクより西比利亞の南東部を横ざりて、支那の北部及び本邦に擴がつて居る。その鼻孔の無毛なることを見れば、その食物をば、多く地上より取ることが、推測し得らるゝのである。

歐洲に産する御山鳥に就いて、その習性を記述せんに、この鳥は群をなして棲み、且

つ大なる團體をなして蕃殖する。一本の樹上には、五六の巢が、重さなりあつてあることがある。又時には十八個の巢をば、一樹に見ることがある。卵は三乃至五個にして、淡綠色の地に於て、灰色と藍色との斑紋がある。此鳥は、其生れたる地方に、生涯の大部分を暮らすのであつて、時には二三萬の大群を算することがある。而して日中は、夫々分離して、附近の地に、食物の搜索に徘徊する。有害昆蟲を食ふことは、有益と云はねばならない。然しながら、彼等は、播種せる耕地に來りて、種子を啄み上げることがある。また若き玉蜀黍の穂を啄むことはあるが、先づ大した害はないのである。食物に缺乏するときは、鵜及び黒鳥の如く、鳥の卵を掠奪することがある。幼鳥の嘴は、成鳥の如く裸出せずして、鼻孔は剛毛を以つて被はるれども、食物を自ら求むるやうになると、嘴は裸出するやうになる。

〔六〕 星鳥又岳鳥又山鳥 (富士附近) *Nucifraga caryocatactes*
Japonicus, Hartert.

英名を「ナットクラッカー」(*Nutcracker*) といふ。懸巢位の大きさである。羽毛は暗褐色にして、颯と大雨覆との外は、一樣に白色の斑紋を有する。嘴は長く伸直にして尖り、鼻孔には上向する所の、白味を帯べる羽毛を有する。北海道と本州南部の山地に棲息し、冬



二百四十五圖

季は平原に近く下るのである。嘗つてブライアー氏は富士山に於て、海面上五千尺の高處に於て、六羽を得たことがある。常に主として種子を食し、殊に松山毛櫨^{まな}其他の堅果を食する。

この種の蕃殖區域は、歐羅巴及び西比利亞より本邦に亘り、西比利亞産のものは、體の上部と下部と、尾翹の端にある白色の斑紋が、歐洲産のもの、及び本邦に産するものよりも、よく發達するが、西比利亞産のもの、嘴は、歐羅巴及び本邦産のものよりは、細いのである。

〔七〕 チヤツクドウ (Jackdaw)

Corvus monedula, L.

鳥科の中で、最小なるものにして、體長

は僅かに一尺九分乃至一尺一寸七分位に過ぎない。頭頂は黒く、頸背と咽喉との兩側は、灰色にして背と尾とは黒い。體の下部は、石板灰色と黒色とである。而して老齡の鳥にては、羽毛と眼とは、白味を帯びて居る。

この鳥は、常に河岸の割目、壁の裂間、建築物の上部及び樹木に巢を造り、一産に五卵を産む。卵は帶藍綠色の淡い地に、暗灰色及び橄欖褐色の斑紋がある。

その鳴聲は「ジャツク」といふやうに聞へるが、之を飼養するときは、人の音聲を模擬することが出来る。その主なる食物は、蛆、蠕蟲、鱗翅類の幼蟲、小なる爬蟲類、野鼠、鳥卵、雛等である。エイチ、フーパー氏 (H. Hooper) に據れば、他の鳥の卵及び雛を害することが多いのである。また多數集るときは、萱菽類を害すること、少くはないといふ。

〔八〕 をながざり又をなが *Cyanopica cyane (Pall.)*

英名を「イースターン、ブルー、マッグパイ」(Eastern Blue Magpie) といふ。翼長は四寸四分乃至四寸八分ある。頭の上は黒く、體の上は灰色にして、體下は殆んど白色である。尾と翼の大部分は、藍青色である。本邦の南部に産すれども、北海道にては、未だ發見せられない。然るに黒龍江及び北部支那にては、普通である。

〔九〕 鶻^{かきや}又たうがらす又てうせんがらす又かうらいがらす

(高麗鳥)又ちくごがらす(筑後鳥)又ひぜんがらす(肥前鳥)又か

六一八

ちがらす(勝鳥)

Pica pica sericea, Gould

英名を「コンモン、マグビー」

と稱する。體の大きさは、鳥よりも小く、肩、腹、臀等が灰白色なる外、全身の羽毛は、青銅色を帯びたる黒色である。この種は支那と朝鮮に産するものなれども、亦九州にても蕃殖し、時々嘴を合せて、カチ／＼と音さすることがある。昔、加藤清正が朝鮮征伐のとき、この鳥の鳴聲を聞きて、戦勝の兆としたるを以つて、勝鳥ツチカラスの名があるといふことである。福建省福州附近に於ては、この鳥をば勝軍鳥と稱し、之を殺すを忌むといふ。



図六十四百二第
りごかなを

〔一〇〕 鶺鴒一種 *Pica rustica*

英名を「マグビー」(Magpie)といふ。體長は一尺五寸に達し、頭、頸、咽喉、背部は、天鵝絨様の黒色にして、尾と翼とは黒く、藍色及び青銅色の光澤を有し、胸腹部、翼の内側は純白で、尾は長く、矢状である。

その性質狡猾にして、戒心に富む、ちんちん蛭蝮、こまごま蝸牛、こまごま蟻、こまごま鼠、野鼠を食ひ、又鳥や鳥卵を奪ひ、飢餓に迫るときは、弱き獸を攻撃することがある。故ロード、リルフアルド氏は、大雪の日に、この鳥の十四羽か、十五羽位が、脊を傷めたる驢馬に寄り縋つて居るのを見たのである。而してこの鳥の爲めではなく、自然の源因よりして、この馬が死んだ後に、頻りに肉を啖ひ居るのを見たのである。また豚を屠殺するとき、他の鳥族のものと共に、數時

内外普通動物誌



種一ざささか 圖七十四百二第

六一九

間も、附近に隠れて、その肉を啄み去るのである。この鳥は、また果實穀粒も食するを以つて、有益なるか、有害なるかは疑問である。

巢は常に樹上に造る。而して乾ける小枝で、先づ巢の基礎を造り、この上に、土若くは粘土より成れる杯状部ありて、こゝに軟かき根葉及び毛を被覆し更に、この上には、小枝などを用ひて半球形の屋根を造る。而して巢の側方には、入口を造る。巢には、一産に四乃至七卵を産み、卵は帯緑灰色の地に、褐色の斑紋を有するのである。



第百四十八号 懸巢又儲鳥 (After Protheroe)

英名を「シャバニース、ジェー」(Japanese Jay)といふ。本邦の南部には、最も普通に見る鳥なれども、北海道には産しない。常に山林に棲息し、野外の平地に下降し、餌を啄むのである。而して雑木林には多く来り「ジャージャー」と、大聲を發して鳴く。翼長は凡そ五寸八分である。頭は白く、之には黒色の縦縞を有し、口角より頬の下部は黒く、頬は栗色である。虹彩は青色で、背部は葡萄酒色をなし、手翹の外翹は、頂上の方は白く、基脚は黒いのである。雨覆は、純白と相交互せる美麗なる青色

の羽を被り、咽喉と上下の尾筒とは白く、尾翹は黒色にして、その先端は圓くある。

歐洲産のものにつき、洋書に記する所により、この類の習性を説述せん。この鳥は食を食すること頗る夥しく、櫛、ナラ等の殻斗果、其他ブナの果實を食ひ、また漿果を食する。他の鳥科のものよりは、植物質を食すること多けれども、また他鳥の巢を掠奪し、卵及び、まだ充分に羽毛の生せざる雛を食する。また充分に成長せる鶉を殺したことがあつた。又よく雉子や雷鳥の類の巢を掠奪するのである。其他、蟻、蟲、昆蟲も食ふのである。巢をば高木の又又は枝に造り、又叢木の頂上に造る。巢の材料は、小枝より成り、その内面には、細根又は草を敷きて、これに五乃至九卵を産む。卵は光澤なき綠色にして、橄欖褐色の斑紋を有する。

この鳥は、非常によく他鳥若くは獸の音聲を真似るものにして、家鶏、その雛、鳥、犬、猫、鶯鳥等の鳴き聲を模擬するのである。

〔一一二〕 御山懸巢 Garrulus frandti, Eversmann

英名を「ブランドツ、ジェー」(Brandt's Jay)といふ。前種よりは稍大きく、翼長は凡そ六寸である。頭は栗色にして、黒色の縦線がある。咽喉は白色にして、淡褐色を帯び、胸腹は灰褐色である。而して手翹の外翹は、淡灰色である。北海道にのみ産するのである。

〔一二〕 瑠璃椋鳥又るりかけす Garrulus lidhi, Bonaparte.

この種は、鹿兒島縣下なる奄美大島に産する。普通のかげすに似たる鳥にして、額より眼前眼下にかけては眞黒である。喉も黒色なるが、頭上より後頸に亘り、頭側と喉胸間に連りて、暗濃の瑠璃色である。翼は大部分黒色なるが、雨覆は多くは瑠璃色にして、許多の黒色横條紋を有する。(詳細は、動物學雜誌第二百號、飯島博士の瑠璃椋鳥の記を参照せられんことを望む)

〔一四〕 からかけす Garrulus sinensis, Gould.

英名を「チャイニーズ、ジェー」(Chinese Jay)といふ體の羽毛は、一樣に葡萄色にして、上下の尾筒部は白けれども、眼下には、幅廣い黒條がある。腕翹最初の五枚の翹の外翹の中央部には、白と黒と青との條あり。而して手翹の外翹の基部は黒く、鼻にある粗毛は、黒き斑紋を有する。支那の南部に産する鳥にして、小川三紀氏の本邦産鳥目録には、肥前と、長崎に産する旨記載せられてある。

〔二〕 黃鳥科 (Oriolidae)

嘴は、中庸の長さを有し、且つ強く、尾は短い。毛色は黃赤又は橄欖綠色に、黒色を帯びて、美麗である。體軀は寧ろ大きく、鶉大なるか、又はこれよりも大きい。東半球の大部分に棲息し、樹木の枝に、美しい吊床狀の巢を造る。地上に來ることは稀れにして、多くは

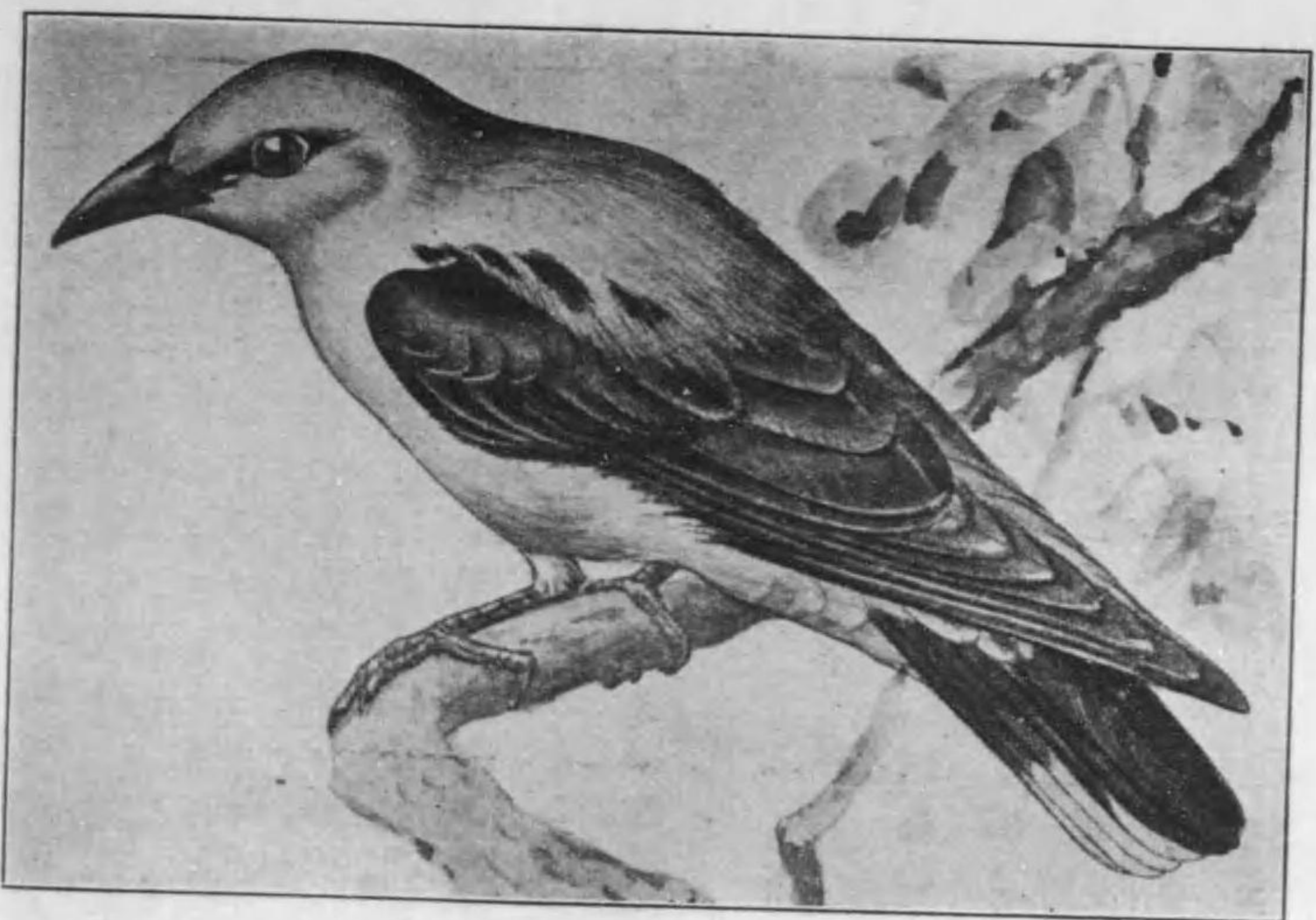
樹上に棲息し、常に果實及び昆蟲を食ふのである。

〔一〕 黃鳥又高麗鶯又朝鮮鶯 Oriolus indicus, Jerdon.

英名を「チャイニーズ、オリヲル」(Chinese Oriole)といふ。額、前頭、後頸、咽喉より腹面一體は、美なる黄色にして、雄の背部は、同じく美なる黄色なれども、雌にては、黃橄欖色である。また眼前より、後頭の一部に亘りて、帶青黒色部がある。嘴は淡紅色である。風切羽は灰黒色にして、外縁のみ薄き褐色を帯べる。灰白色である。尾翹は、黒色に青色の光澤を有し、下部のものには、黄色がある。この種は、支那、朝鮮、臺灣に産する。臺灣にては、晚秋まで、北部に残り、冬は南部に行き、早春再び來る。性質溫和にして、よく美音を發して啼き、好んで果實を食ふといふ。

〔二〕 金色オリオル (Golden Oriole) Oriolus galbula, L.

歐洲に産する鳥である。雄の羽毛の大部分は、美麗なる黄金色にして、雨覆と尾翹とは、黒く、尾端は黄色である。體軀は鶉より寧ろ大きく、嘴の基部より、眼を横ざりて、一黒條を有し、嘴は肉色で、眼は血紅色である。雌と幼鳥とにては、雄に於て黄金色をなせる總べての部分が、帶綠色で、體の下部分には、帶灰白色の地に、暗色の條がある。夏季、果實が熟するときは、之を食すれども、また鱗翅類の幼蟲や、コフキコガ子屬の多數を食



第百四十九圖 金色彩鳥

六二四
 するを以つて、有益鳥である。
 (三) 極樂鳥科 (Paradisidae)
 この科のものは、英に「パールズ、オブ、パラ
 ダイス」(Birds of Paradise) (極樂鳥) と稱するも
 のにして、また風鳥、霧鳥の名がある。全體の
 大き、形状習性は、非常によく、儲鳥に似て居
 る。嘴は稍彎曲し、且つ壓縮せられて居る。而
 して、嘴の基部にある羽毛は、剛毛にあらず
 して、天鵞絨状である。體軀の大きは、中庸大
 にして、雄の羽毛は、彩色に於て不思議な程
 華麗にして、形状に於ても、亦精巧に出来て
 居る。また頭若くは横腹には、長き羽毛、若く
 は總狀の羽毛を生じて、實に立派である。尾
 翹の中で、中央部の二翹は、屢々伸長して、絲
 狀をなし、唯先端に於てのみ、小なる風見狀

の羽毛を有することがある。多くの種に於ては、體の羽毛は、外觀と組織とに於て、非常
 によく天鵞絨に似るか、若くは輝ける金屬色を呈して居る。

この科には、凡そ五十種を包み、ニューギニア及び附近の島嶼に産し、常に森林に棲
 息し、果實及び昆蟲類を食ふ。彼等の嗜好するものには、無花果、蝗蟲、バッタがある。常に
 簡單なる開いた巢をば、樹木の頂上に造り、通
 例二卵を産む。その音調は、聲高き有力なる音
 聲にして、幼者の羽毛は、雌雄同一である。

(一) 大極樂鳥又黃霧鳥
 Paradisea apoda, L.

英名を「グレート、パールズ、オブ、パラダイ
 ス」(Greater Bird of Paradise) 又「グレート、エメラ



第百五十五圖 大極樂鳥
 (After Protheroe)

ルド、パールズ、オブ、パラダイス」(Great Emerald Bird of Paradise) といふ。體の大きは、御山
 鳥位である。體、翼、尾は、濃い珈琲色にして、胸は、帶黑色の莖菜色か、紫褐色である。頭の頂
 上と、頸とは、莖黄色にして、こゝに生ずる羽毛は、短く密生して、絹綿天鵞絨か、若くは天
 鵞絨によく似て居る。喉の下部より、眼に至るまでは、綠柱玉の如き綠色の鱗狀の毛を

有し、濃い金属光澤がある。而して額と頤とを横ぎりて、眼に至るまで、一帯に濃緑色の天鵞絨状の羽毛を有し、眼は輝ける黄色である。尾の中央の翹は、羽を有せずして、その基脚と先端とに於てのみ、甚だ小なる羽毛を有し、以て針金状の卷鬚となり、立派なる二重の彎曲をなして擴がり、その長さは二尺乃至二尺八寸位もある。翼下の體の側面



鳥樂極赤 圖一十五百二第
(Photo by W. Saville-Kent)
(From the Living Animals of the World)

よりは、長き華奢の羽毛が總狀となりて擴り出て、時としてはその長さ二尺に達する。その色は、黄金色を帯びたる橙黄色にして、甚だ光澤に富み、その先端に至りて、淡褐色となつて居る。この總狀の羽毛は、自由に高めたり、又は擴張することが出来て、鳥の體を隠くす程に、擴げ得るのである。

以上は雄の形貌に就いて述べたものであるが、雌は裝飾的の羽毛なくして、單純に褐色であるに過ぎない。この種はニューギネアに産するのである。

〔二〕 赤極樂鳥 *Paradisaea rubra*

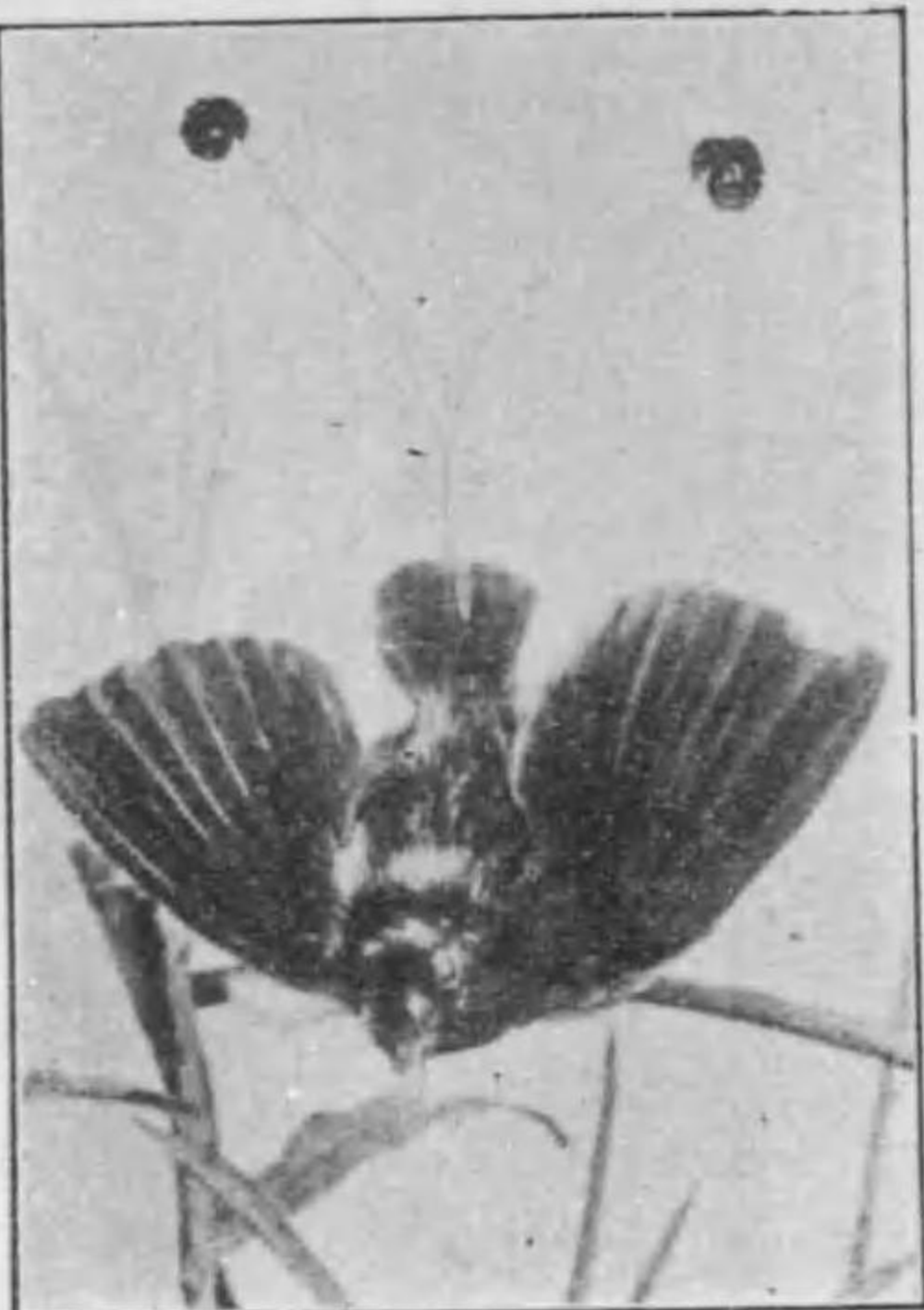
英名を「レッド、パールド、オブ、バラダイス」(Red Bird of Paradise) といふ。雄は頭上に金緑色の冠羽を有し、頤は鮮緑色である。翼は赤褐色にして、體の上面は灰緑色である。胸には同じく灰緑色の帯を有し、腹面と尾翹とは、黒褐色である。また體側に於ける總狀毛は、眞紅色にして甚だ美麗である。體長は一尺一寸位である。ニューギネアの北西の海岸を離れたる所にある一小島ツ

イジオウ (Waigou) のみに産する。

〔三〕 金色極樂鳥

Paradisaea sexsetacea

英名を「ゴールドデン、パールド、オブ、バラダイス」(Golden Bird of Paradise) といふ。體の兩側及び腹部には、長い幅



鳥樂極王 圖二十五百二第
(Photo by W. Saville-Kent)
(From the Living Animals of the World)

廣い羽毛が、弛るく生へて居る。頭の兩側に於て、絲狀の羽毛三個宛を有し、各々その先端に於て、金緑色の小盤を有して、甚だ美麗である。體長は一尺位である。

〔四〕 王極樂鳥 *Cicinnurus regius, L.*

英名を「キング、パールド、オブ、バラダイス」(King Bird of Paradise) といふ。體軀は鶴位の

大きであつて、體の上部は天鷲絨様の深紅色をなし、體の下面は白い、尾の大部分は短いが、二つの長い針金狀の羽毛を有し、その先端は、綠色の捲羽まきひを有する。又喉の兩側には、短き總狀毛を有し、灰褐色にして、先端は金綠色である。雌は體の上部は、褐色で、體の下面は、焦茶色にして、これには、黑色の横條が密に存在する。

この種は、最も夥しく、且つ廣く分布する種類にして、樹木の極く高所に居ることなきを以つて、屢々その姿を見ることが出来るのである。

〔四〕 集會鳥科(假稱) (Pilonorhynchidae)

この科のものは、英に「ボウバー・バード」(Bower Birds)と稱するもので、今假りに集會鳥と名づけたのである。濠太利亞及びニューギニアに産する鳥にして、極樂鳥科に近縁を有し、概形は、大なる鴨カモに似て居るが、嘴は彼れよりも、強壯にして、屢々其基部には、羽毛を密生する。羽毛の華麗なるものは、稀れな方であるが、遊歩場を造りて種々の物で、之を飾り、雄がこゝで遊び、且つ雌に媚を呈する場所として使用するものである。然しながら、この場所は、唯遊び暮らす用に使用するものにして、眞正の巢は、通例は杯狀をなして居る。

本科のものは、主として果實を食ひ、且つ集會場を造り、之を美術的に飾るといふ特



鳥會集子縐 圖三十五百二第
(By W. P. Dando) (From Marvels of the Universe)

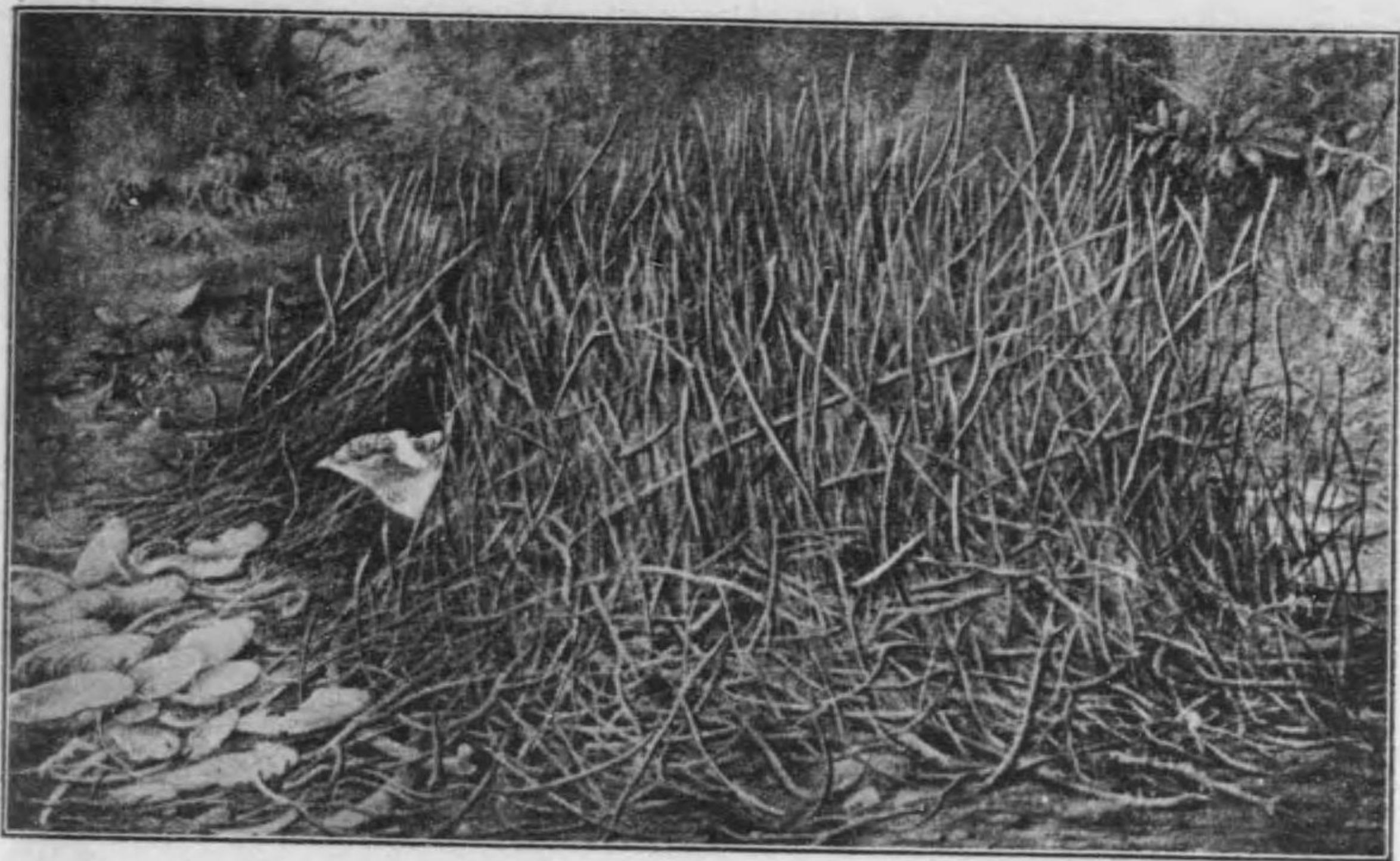
性がある而して、この集會場は、種に因りて、その形狀、及び裝飾用の材料を、異にするのである。

〔一〕 縐子集會鳥(Satin-Bird)

Pilonorhynchus holosericeus

この鳥は、小枝を編みて、列樹道なみきみち狀の通路を造り、その周圍には、羽毛、骨介殼、輝ける小石等を用ひて、裝飾を施すのである。この通路の長さは、一尺よりは短く、用ゆる羽毛は、鸚鵡科の羽毛である。

この鳥は、チャツカドウ位チャツカドウの大きさであつて、成熟せる雄に於ては、濃き縐子狀の藍色であるが、雌では、體の上部は、つやのない綠色で、下面には



鳥會集王 圖四十五百二第
(By H. Grönvold) (From Marvels of the Universe)

斑紋を有するのである。

六三〇

〔一〕 王集會鳥(假稱)

Sericulus melinus

英名を「リージント・バールド」(Regent-Bird)といふ。大きさは家鴿位であつて雄の羽色は濃黒色と金色とを混じてあるが、雌では體の上部は褐色にして、下面には斑紋がある。而してその遊歩場は、單に葉を以て、奇麗に被ふてあるに過ぎない。

〔二〕 庭造集會鳥(假稱)

Amblyornis subalaris

英名を「ガーデナー・バールド」(Gardener-Bird)又「ガーデナー・ボーワー・バールド」(Gardener Power Bird)といふ。ニューギニアに産する雄は、大なる橙黄色の毛冠を有し、羽色は褐色

である。ニュートン教授は、この鳥の集會場について、次の如く述べられて居る。

『この種は、小樹の根元に於て、小舎狀の集會場を造る。あるものは、その高さ二尺もあつて、中央には支柱があるが、これは蘇苔類をば圓錐狀に塊めたものであつて、その周圍には、廊下が隠蔽せられて居る。この中央の支柱より、規則正しく放射狀に出で、且つ地上に傾斜する所の、蘭類の莖が、屋根狀に排列せられて居る。この小舎の一侧は、開いた儘で、その前面に於て、青々とした生の蘇苔の床が排列せられ、その中には、輝ける色彩の花及び漿果を以て、裝飾せられて居る。而してそれらの飾りが、萎縮するときは、之をば小舎の背後の堆積に除き移し、更らに新鮮なるものと取り換へるのである。小舎は圓形にして、あるものは、その直径三尺もあつて、その前面にある蘇苔の庭は、小舎の廣さの殆んど二倍もある位である。これらの小舎や花園は、唯一對の雌雄か、又は恐らくは雄丈だけで、造つたものと考へられて居る。』云々

〔五〕 椋鳥科 (Sturnidae)

この科のものは、東半球の殆んど總べての部分に産するものにして、凡そ百種を含む。嘴は、伸長せる圓錐形をなし、口腔は口角に於て、著るしく下方に向く。脚は強く、尾は短い。成鳥の羽毛は常に光澤を有する。而して樹木等の穴中に、巢を造り、多くは常に地

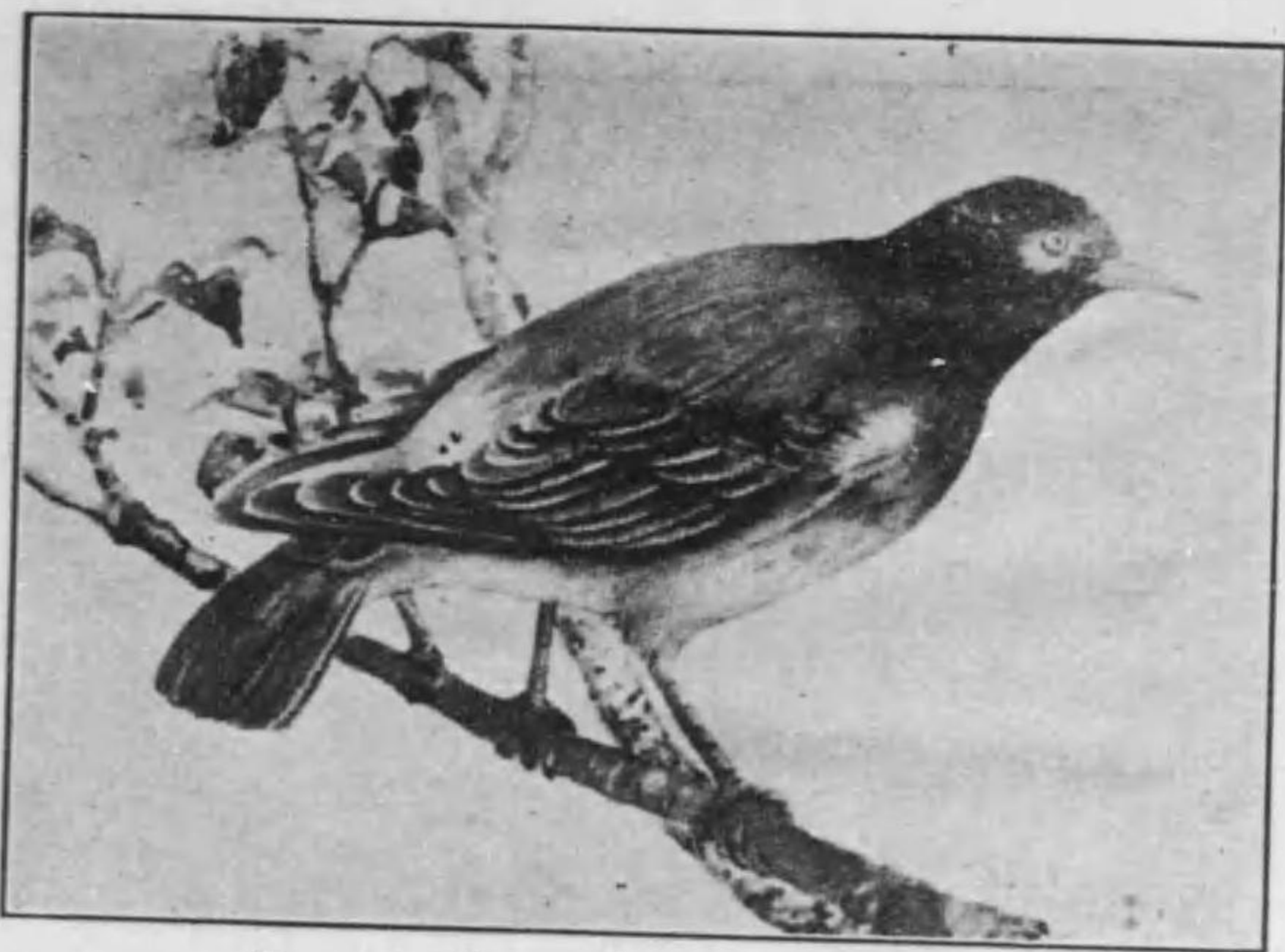
上にありて食を求め、跳躍することなくして、走るのである。而して食物は雑食である。

六三二
飛翔するときには、しかとした平等なる飛方をなして、多くの小形の鳴禽類の如くに、跳び反へるやうな飛び方をなさないものである。

〔一〕 椋鳥又噪林鳥又吉弔

Sturnus cineraceus, Temm.

英名を「グレイ・スターリング」(Grey Starling)といふ。凡そ、鴉大の鳥にして、翼長は凡そ四寸二分ある。椋頭部と背と翼とは、黒褐色にして、腹部は背部よりも淡く、尾に至るに従ひ、漸々灰白色をなし、上下尾筒は白く、尾の先端には、白斑を有する。嘴は黄く、圓錐状をなして、屈曲することなく、その末端は黒色である。脚は黄色で、頬部と額とは、白色に黒毛を混



するのである。

四時本邦に棲息すれども、北海道には、夏季渡來するのである。常に原野に多く棲み、

冬季は群をなせども、夏季は分離し、杉樅等の洞穴、又は枯木の穴に於て、春季に巢を營み、淡藍色の卵をば、五個許産む。余は川越の八幡社殿の壁の破損せる隙間に、造巢せるを見ることがある。椋樹の果實を嗜むが故に、椋鳥の名がある。然し、また昆蟲を食ふのである。

〔二〕 小椋鳥又しまむくツリ *Sturnia violacea* (Bodd.)

英名を「レッド・チークド・スターリング」(Red-Checked Starling)といふ。前種よりも稍小形にして、翼長は凡そ三寸六分位である。嘴と脚とは濃藍色にして、頭上と額とは、少しく茶色を帯びたる白色にして、頬部は栗赤色である。而して翼は緑色の光澤を有する。黒羽より成り、これには白色帯を有する。

夏季は本邦に棲息し、冬季に近づくに従ひ、ブイリツピン、セレベス、ボルネオの如き、南方の暖地に渡るのである。北海道に於ては、昆蟲類桑及び接骨木の實櫻の實を好んで食ふことが判かつて居る。

〔三〕 唐椋鳥 *Sturnia sinensis* (Gm.)

英名を「チャイニーズ・スターリング」(Chinese Starling)といふ。頭上より尾根に至るまで灰黑色にして、胸部は灰白色で、腹部は白色である。多く支那に産するものである。

〔四〕 歐洲椋鳥 *Sturnus vulgaris*, L.

英名を「コンモン・スターリング」(Common Starling) 又「ユーロピアン・スターリング」(European Starling) といふ。鶉位の大きさある鳥にして、羽毛は乳白色の斑紋を有し、藍色を帯び



鳥椋州歐 圖六十五百二第
(Photo by J. T. Newman)
(From the Living Animals of the World)

たる眞珠光澤がある。嘴は比較的、小さく、額は扁平にして、眼は嘴の基部に近く位し、何となく、狡猾らしく見ゆるのである。羽毛は小にして、その先端に於て尖り、嘴は黄色味を帯びて居る。附近に牧場あり、また蘆葦の生せる地がある。濕潤せる森林地に於て、櫛屬の樹幹の穴に巢を造る。而して温暖なる地方にありては、夏季には、二回蕃殖する。而して第一番は、五乃至七卵を産み、第二番は四卵か五卵を産む。卵は淡藍色である。この鳥は、甚だ活潑且つ快活なる鳥にして、常に群居を好むのである。時には牛、馬、羊、豚等の背上に止りて、皮膚中に寄生する蛆を啄むのである。またエゾイチゴの類、葡萄の類、及び「チェリー」の果實を食することは、有害なれども、鱗翅類の幼蟲及びカガガンボ

の大多數を食することは、有益である。その性、よく人に馴れ、歌音を弄し、また言語を眞似ることが出来るのである。

〔五〕 鶻鴒はちやう 又ははつちやう又はつかちやう又は八哥はちこ(清國)

かしれん(臺灣) *Acridotheres cristatellus*, (Gm.)

清國、臺灣及び呂宗等に産する鳥である。近年籠鳥家は、この鳥の鳴聲がよく、諸鳥の聲を擬し、且つ聲高く、美音なるを以つて、多く飼育するといふ。鳥津製作所、中山民三氏の言に依れば、この鳥は南清湖南省の醴陵 (Li-ling) 地方には、甚だ多くして、恰も本邦に産する雀の如しである。而して飛ぶときには、五十乃至百羽位も群をなして行く。主として田圃に降りて、食を求むれども、植物には餘り害をなさざるものゝ如しである。而して此地方にては、年中棲んで居る。氏は此地にて、一年間許、この鳥を飼育せられたのであるが、よく諸鳥の鳴聲を擬し、就中雞の鳴聲を、最も巧みに擬せしといへり。食物は肉類及び菜の葉等を食するといふ。(以上サイエンス第十號(福島覺三郎氏の記述に據る)) 多田綱輔氏、臺灣採集動物(動物雜誌第百二十二號) 中に、この鳥につき、左の如く記述せられて居る。

『羽衣は一般に眞黒色にして、背は少く紫色の光澤あり、而して頭、後背及び腰は、稍や

綠色を帯ぶ、翼も一體に黒色にして、初列雨覆の先の方は、半ば白色、初列風切の基部も亦半ば白色にして、次列風切の内瓣基部も、之れ亦白色なり、下部は上部の如く、眞黒ならずして、少く灰色を帯び、下雨覆と下尾筒とは、先端白色なり、尾羽は黒色にして、其の端に、白の小斑點あり、頭上の羽毛は、多少延長して冠を爲し、額の羽毛も、亦少く嘴の基部に向つて巻曲す、嘴は淡黄色にして、基部は薔薇紅なり、足は橙紅色、虹彩は橙黄色なり。

長け一〇吋五

嘴峰一時一五

翼五吋七五

尾三吋二五

跗蹠一時六

幼鳥は、羽衣一般に鶯色にして、冠羽を缺く、

此鳥は臺北附近に於ては甚稀に見る所にして、南部に於ても、亦甚少しと云ふ、予は十一月宜蘭に於て、無數群を爲して田圃に下降し居るを見たり、習性恰も通常のむくごりの如く、鳴聲も亦稍や之に似たり、

支那中部、南部に産し、又呂宗島にも産す、臺灣に於ては、冬期の渡來者なるか、果た常栖するものなるや否やを明にせず。』云々

〔六〕 連雀科 (Ampelidae)

本科のものは、歐羅巴、亞細亞、亞米利加に産するものにして、種類は極めて僅少である、脚は短く、嘴も小さく、口腔は廣い、而して主として果實を食し、大多數のものは、頭に冠羽を有するのである。

〔一〕 黃連雀 又大平鳥 (支那) Ampelis garrulus, Linn.

英名を「ボヘミアン、ワックスウ

イング」(Bohemian Waxwing) 又「ワッ

クスウイング」(Waxwing) といふ頭

には冠毛を有し、その背方に傾き、

鳥は自由に之を高めることが出

來る、咽喉は滑らかなる黒色で、背

は肉桂色を帯びたる褐色にして、

體の下面も、亦同色である、が、稍淡

くなつて居る、尾は黒くして、その

先端は、黄色である、また翼は白帯

を有する黒色である、而して腕蹠



圖七十五百二第

グヤジンレキ

の外部の半部は黄色にして、その先端に於て、白色の界がある。それらの羽毛の中軸は、先端に赤き角質の附屬物を有する。

六三八

本邦の南部には、常に棲息すれども、北海道には冬季來遊するのみである。而してベリリング海峡を横ぎりて、アラスカ及びロッキーマウンテンに擴がれる東西兩大陸の極地に蕃殖し、時として、大群をなして、歐州の中部、及び英國に來ることがある。而して主にネズの林地に往來し、その肉は非常に美味なるを以つて、よく捕獲せらるゝのである。この鳥は、また海に突出する丘處、溪谷、花園、都市の大なる公園、殊に櫛寄生樹が着ける古木に往來し、種子を食ひ、又薔薇科の一種 (Crataegus oxyacantha) マウンテン、アッシュ (Mountain Ash) (木犀科トナリ) 其他藪林の漿果を食する。この鳥の消化力は、甚だ迅速にして、食慾は至つて盛んである。

(11) 十二紅 *Ampelis japonicus*, Seeborn.

英名を「ジャパニース、ワックスウイング」(Japanese Waxwing) といふ。この種は、冬季本邦に渡來すれども、北海道には、甚だ稀れである。而して西比利亞の南東部にて蕃殖し、冬は本邦、支那、臺灣に來るのであるが、小川三紀氏に據れば、東京市内へは、この種の方が、黄連雀よりは、多く來るのである。これは東京ばかりでなく、恐らく武蔵より西方駿

河へ掛けて、黄連雀の方が少ない様である。羽前米澤にては、四月下旬渡り、來り好んで、柳、クルミの嫩芽等を食するといふ。また北海道にては、ヒレンジャクは、主にニレ、アラタモ、カシワ等に群集し、これに寄生する植物の實を啄むといふことである。前種と同じく、頭には毛冠があつて、これは灰色に、少しく赤味を帯びて居る。尾翹の先端は、美麗なる紅色である。雄も雌も、羽色には餘り著しい相違はない。嘴と脚と咽喉と毛冠との兩側は、眞黒色であるが、額と咽喉の兩側は、淡い鳶色である。脊と胸とは、灰色に少し茶色を帯びて居る。腹の眞中は、黄色が掛つた白色で、下尾筒は、鋪赤色で、風切の外縁は、鮮明な灰色を呈して居る。また風切の先端に、白い所があつて、この白い上に、赤い點がある。

小川三紀氏に據れば、本州に居る十二紅は、上に述べた様であるが、琉球へ行くとき、この鳥の羽色に、少なからざる相違を見るのである。概して云へば、鳥體全體の彩色が、本州に居るものよりも、濃い色を持つて居る。即ち冠羽には、褐色部が多くあり、胸より脊にかけての灰色部には、餘計に淡鳶色を帯びて居る。特に著しい點は、下尾筒が濃紅色を呈して居ることである。斯の如く、羽色が地方に因て變つて行くことを、地理的變異といふのである。これは大抵の鳥に現はるゝ現象で、鳥ばかりではなく、生物全般に於

ける通則である。何故、地理的變異が、生物に行はるゝかといふに、是れは氣候に關係するので、就中、氣温などが、大いに影響を及ぼすのである。概していふと、寒氣と白色とは、原因と結果といふても宜ろしい位で、本州の温帶地方より、琉球の方へ近くに從ひ、羽の色が濃くなつて行くのである。(明治三十六年時事新報 東京の春の鳥に據る)

[七] 鵙科 (Taniidae)

本科のものは、南亞米利加を除き、殆んど世界到る處に産する。嘴は強壯にして、鷹の如く鉤状をなして居る。頭は大きく、脚は稍長く、鋭爪を有する。雌雄の羽色は、一樣なる色であるか、或は殆んど一樣なる色である。而して幼鳥の最初の羽毛は、下部に横線を有する。此科のものは、食肉性にして、昆蟲類を初め、鳥類、小形の爬蟲類、野鼠等を食する。巢は開いてあつて、藪中又は樹上に置かれてある。

[一] 通常鵙 又 伯勞 又 入道鵙 *Tanius bucephalus* T. & S.

英名をブル、ヘツデッド、ジュライク (Bull-headed Shrike) といふ。雄は頭上は、赤褐色にして、背部は灰褐色、尾と翼とは黒褐色である。咽喉部は白く、それより腹部にかけ、漸々淡褐色となり、少許の横線を有する。胸腹部の兩側は、赤褐色である。眼の上部は、白色にして、その前後と、下部とは、黒く、翼には小白點がある。雌は、背部及び尾部は、赤褐色にし

て、眼邊に黒羽なく、胸腹部に、數多の横線を有し、翼に白點がない。

頭は大きく、嘴は硬く、上嘴は鷹の如く鉤状をなし、その左右側縁には、齒狀の缺刻がある。然し脚は反つて雀に似て、鷹のやうに鋭爪を有しない。鵙の主なる食物は、根切蟲、夜盜蟲、椿象、バツタ、イナゴ、ケラ、カマキリ、キリギリス、毛蟲、芋蟲、蛙類、蜥蜴、小魚等であつて、大に害蟲を驅除する効果がある。雀、眼白、小雀、柄長、頬白等の群に入り、之を脅すことがあるが、捕食はしないやうである。

四時本邦に留り、夏は山地に多く、冬は原野に多い。春季、樹梢、竹藪等に巢を營みて、産卵する。一産の産卵數は六個位である。鵙の鳴き聲は、非常に喧しい、而してよく他鳥の擬聲を發し、殊に鶯の鳴き聲を真似るのである。

鵙はカラタチ、サイカチのやうな刺のある木や、桑、柳、梅、栗、櫛等の尖れる枝に、その取つたイナゴ、コホロギ、ケラ、バツタ、蛙、ドチャウ、蚯蚓、毛蟲、蜥蜴等を貫き置く習性がある。之を鵙の速贄、或は刺餌、或は磔刑と稱へて居る。如何にして斯かる習性が起つたものかといふに、歐州産の鵙の一種に就き、或る學者の書かれた所によると、彼等は食ふよりは、より多い食餌を捕獲する。而して其食ひ残りをば、荆棘又は樹上に貫き置き、再び飢餓を感じたる時や、天氣都合が悪くして、食物を狩りに出懸けられぬ時の準備と

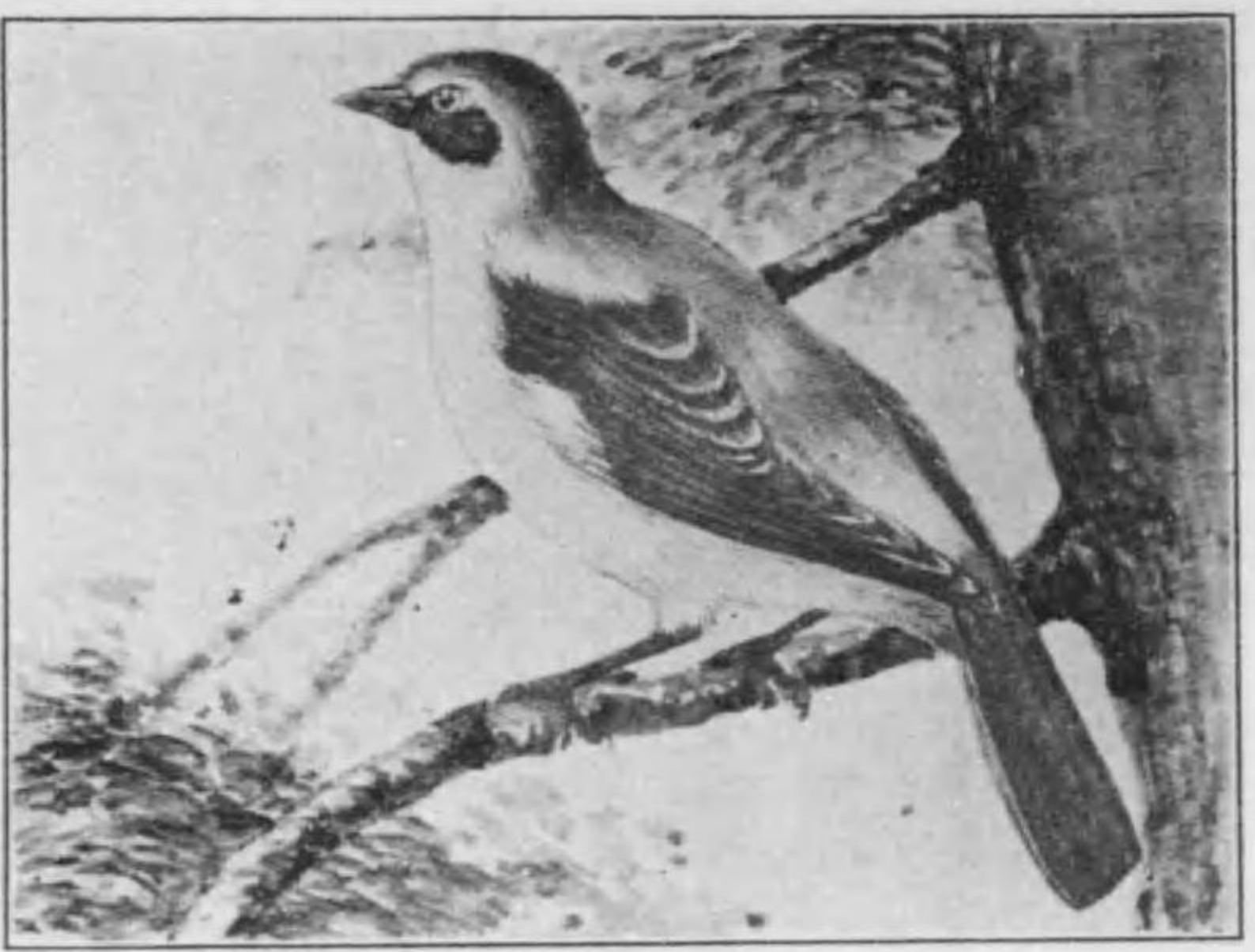
して置くのだと述べられて居る。若しこの説が眞實であつたとすると、豫備食料が速贄となつて残つて居る譯である。編者の友人で、鶇の雛を飼つて居る人の談に、蛙、イナゴ、セミ、コホロギなどの食餌をば、一度に澤山に興へる時は、満腹すると、その剩餘をば、籠の目の處に持つて行き、頻りに其處に擦り付けるといふことであるが、これは前の説によく似た事實である。實地に見るに、速贄のある處には、附近の枝の數ヶ所に、乾燥せる蛙やイナゴ等の屍骸が、割合に多く懸つて居る。鶇の速贄を造る理由につき、又一説がある。それは鶇の脚は、雀のやうに割合に弱いから、脚で餌を攫みながら、食ふことが出来ない。そこで木の又などに餌を貫ひてから、之を啄むといふ説である。これはチヤブマン氏の著書に述べられた所である。丁度この説に似たやうな談が、雜誌「博物の友」に見えてあつた。それは或る人が、或る小鳥を飼つて居る人から、聞いた儘の話であるが、鶇を雛のときから養ふとするには、イナゴの生きたものを餌として與へる。すると幼鳥は、一度び之を捕へても、いざ喙ばまんとするとき、取り逃すことが度々である。そこで、この際、籠の中の留木へ、鳥の運動に差支へないやうに、釘の先端をば、上向けに刺し置くときは、幼鳥は、直ちにイナゴをば釘に刺し貫き、然る後、少しづつ、切り取つて食うさうである。こんな事實から考へて見ると、速贄を造るは、獨り親鳥自身の爲

めばかりでなく、親鳥が幼鳥の爲めにも、するものならんと思はれるのである。

鶇は孤立の鳥で、群をなして棲息しない。性質は勇敢にして、高い枝梢に止つて、割合に長い尾を上下に振り、揺りながら、ギャ／＼と鳴いて居る。

〔一〕 大鶇 *Tanius major*, Pallas.

英名を「バラス・グレー・シユライク」(Pallas's Grey Shrike)といふ。大鶇鶇に次いで、大形なるものにして、翼長は三寸七分許である。頭上と脊とは灰色にして、額と上尾筒部とは白く、眼の前後は黒いのである。この種は、北海道に於て得たることがある。その蕃殖區域は、ウラル山よりカムチャツカに至るまで亘り、また南部西比利亞にて蕃殖する。而して英國にては、冬季時々來遊するといふことである。此種は迅速に小鳥



を襲ひ、之を食ふ。然し害よりは、昆蟲類を食ふ益の方が、多いといふ説がある。

〔二〕 大唐鶇 *Tanius sphenocercus*, Cabanis.

前種よりも一層大きく、翼長は四寸で、尾羽も四寸七分の長さに達する。支那南部の産である。

六四四

[四] 琉球鴟 *Lanius lucionensis*, Linn.

英名を「チャイニース、レッド、テイルド、シユライク」(Chinese Red-tailed Shrike) といふ。頭上と頸背とは、成長のものにありては灰色で、幼鳥にては褐色にして、額に於ては、灰白色。上尾筒と尾とは栗色である。この種は北部支那にて産卵し、冬はフィリッピン群島及びマレイ群島に渡るのである。

[五] 兒鴟又しまもず又ころもず又しろもず (米澤市北)

Lanius magnirostris, Lesson.

英名を「シツク、ビルド、シユライク」(Thick-billed Shrike) といふ。雄の額の羽毛は、眞黒色にして、少しく鼻孔を被ひ、眼前も眞黒色である。また頭より頸部を経て、背の上方に及ぶまでは、一様に灰蒼色であるが、その他の背部の羽毛は、栗色にして、各羽には三條の黒色横帯を有して、虎文をなして居る。體の下部は純白色にして、脛部を被ふ所の白色の羽毛には、三條の黒色横帯を有する。尾は小豆色である。

この種は、本邦には甚だ稀れである。その蕃殖區域は、日本海の沿岸、ウラジラストツ

クの北、及び中央支那にして、冬季はマレイ群島に渡るのである。

[六] 赤鴟 *Lanius superciliosus*, Latham.

英名を「ジャパニース、レッド、テイルド、シユライク」(Japanese Red-tailed Shrike) といふ。額には白色の小條を有し、眉は白い。頭上より尾翹の先端に至るまで、一體に赤褐色にして、翼の色は通常鴟と同色なれども、通常種に於ては、初列風切の根部は、白色なるが、この種にては、この白色部がない。體下面は、一様に白色である。

この種は、春季南方より本邦に渡來し、夏季本邦に於て蕃殖し、秋季再び南方に渡り、マラッカ半島に達するのである。巢は小木、又は藪の叉木にありて、形は大きい。常に植物の根、莖、枯草より成り、柔軟なる草と、小根とを以て、内面を縁付けてある。

[七] 大灰色鴟 (Great Grey Shrike) *Lanius excubitor*, L.

歐洲に産する小形の鴟にして、體長は八寸乃至八寸四分許で、兩翼を擴げるときは、一尺有餘に達する。背は淡き灰色にして、體の下面は光澤なき白色の地に、褐色と白味とを帯びて居る。嘴の基部よりは幅廣き一黒帯を出し、これは眼上より耳の近くにまで達するのである。而して嘴と脚と翼と尾とは黒く、翼には一白斑を有し、尾の兩側に於ける羽毛には、白色の界がある。常に樹木中に巢を造り、一産に五六卵を産み、時には

七卵を産むことがある。卵は帯緑白色にして、灰色の斑紋を有するのである。

この鳥は、體軀が小形なるにも拘はらず、大膽なる鳥にして、甲蟲、バツタの如き昆蟲及び野鼠を食ふ點は、有益なれども、小形の鳴禽類の巢を襲撃して之を食ひ、蛙、蜥蜴を食ふなど、害の方が多いと云はれて居る。

〔八〕 小形灰色鴟 (Lesser Grey Shrike)

Lanius minor, L.



鴟色灰大 圖九十五百二第 (After Protheroe)

これも歐羅巴に渡來する鴟にして、體軀は前種よりも遙かに小さい。而して額には黒帯を有し、胸は白くして、薔薇色を帯びて居る。翼は黒く、これには白色の斑紋を有する。その他、大體の羽色は、前種に似て居る。この種は、他鳥の巢を、掠奪せずして、昆蟲を食するを以て有益鳥である。

〔九〕 脊赤鴟 (Red-backed Shrike) *Lanius collurio, L.*

これも歐羅巴に渡來する鴟にして、體長は約六寸もある。頭上と頸とは、美麗なる灰

色にして、體の上部は栗褐色であつて、翼には白斑を有しない。體の下部は、淡薔薇色にして、咽喉は白く、眼を横りて、耳に至るまで、幅廣き黒帯を有し、尾の中央の羽は、帯赤褐色にして、外側の羽毛は、その基部に近い部が、白色である。

この種は、留木に靜止し、昆蟲の飛翔するを見れば、忽ち之に飛び付きて、啄みたる後、再び舊の留木に戻る習性がある。而して食分量よりは、餘分に屠殺し、喰ひ餘りの食料をば、荆棘上に貫き刺し置き、再び飢餓を感ずるときか、若くは天氣模様にて、食物を採るに不便なる時の準備をなすのである。その磔刑に處せらるゝものには、コホロギ、



鴟赤脊 圖十六百二第 (Photo by W. F. Piggott)

バツタ、甲蟲などがあり、又黒鳥、鶉、山雀等の類、ロビン、雀の類などもある。廣原に於ては、野鼠を食すれども、小鳥の巢を奪ふことは害である。されば一部分は有益鳥にして、一

部分は有害鳥として考へられて居る。斯くの如く、鴉の類は、他の鳥獸を屠殺するを以て西洋にては「バツチャー、バールズ」(Butcher Birds)の俗名がある。これ「屠殺鳥の義である。本邦に産する鴉と同じく、よく他鳥の歌を真似ね、ナインチンゲールの歌をも、真似ね、又犬の吠聲も、人の音聲をも、模擬するのである。

〔八〕 山椒喰科 (Campephagidae)

この科のものは英に「カックウ、シュライクス」(Cuckoo-shrikes) (郭公鳥)と稱するものである。脚は大概弱けれども、常に樹木に攀縁するに適し、郭公の類と非常によく似たる色彩を有する。體の上部は灰色なれども、體の下面には横條を有する。然しながら、本科の中には、山椒喰の如き、華奢な輝ける羽毛を有し、且つ昆蟲を食するものがある。而して山椒喰の雄は、常に輝ける赤と黒との羽毛を有すれども、雌では黄と灰色とを混じて居る。またこの科の鳥には、長尾を有し、常に群居するのである。

〔一〕 山椒喰又らいふり又やませきれい又しろもす

(富士山麓、山中及び長池、方言) *Pericrootus cinereus*, Lafresn.

英名を「シベリアン、ミンベツト」(Siberian Minevet) 又「グレー、ミンベツト」(Gray Minevet) といふ。雄の體の上部は「ホ、ジロセキレイ」の雌に彷彿して居る。又雌の體の上部は、白

鴉の雌に彷彿して居るが、白鴉の額と眉羽とは、白きも、山椒喰にては白くはない。鴉にては、嘴は細長鋭尖にして、嘴の生際の羽毛は、多少鼻孔を被へども、山椒喰にては、嘴は細長鋭尖ならずして、扁大である。また嘴の先端に近き所には、鴉より判然たる缺刻がある。後趾の爪は、鴉にては、他の三趾の爪よりは、著しく長きも、山椒喰にては、稍長きか、又は殆んど同長である。尾翹は、鴉にては、一様に長きも、山椒喰にては、鴉に於けるが如く、階段をなし、且つ外側の各三枚は、短小である。この外、腕翹の終の三枚は、鴉に於けるが如く、著るしく延長して居ない。

雄の嘴は、上下共に鴉に於けるが如く、眞黒色にして、額は純白である。頭上は純黒にして、頸部に進むに従ひ、漸く蒼灰色となり、背より上尾筒に至るまでは、一様に蒼灰色である。尾翹は、帯茶黒色で、翼には黒色部が多い。咽喉、胸腹、腋、下尾筒は、一様に白色で、脚は鴉の如く、美黒色である。雌にては、頭上、頸背部より上尾筒に至るまで、一様に灰蒼色で、尾翹は、帯茶黒色である。又體の下面は、雄と同じく一體に白色である。

(動物學雜誌所載、故醫學士小川三紀氏、駿河地方鳥類一斑の論文に據る)

シイボーム氏に據れば、この種は未だ北海道に發見せられて居ない。而して冬季は、支那を通じて、アイリピン諸島、ボルネオ、スマトラ、マレー半島に移住するのである。

〔二〕 琉球山椒喰 *Pericrocotus teginae*, Stejn.

英名を「ルーチウ、ミンベツト」(Loo-choo Minewet)といふ。沖縄群島に産する種類にして、胸は灰色にして、額は白く、嘴の基部には、白の狭條を有し、兩眼上も、亦同様である。

〔九〕 鷓科 (*Muscicapidae*)

本科のものは、英名を「フライ、キャツチャー」(*Flycatcher*)といふ。概ね小鳥にして、その主要なる性質は、鶉科と同一である。多くは、雌雄その色を異にして、初生羽毛を有する幼鳥は、一般に體の上部と下部とに、斑紋と縦條とを有する。足は常に小さく、平滑鱗を以つて被はれ、嘴は中庸の長さありて、鼻根部は平潤にして、上嘴の根部には、多くの髭を有し、而して上嘴の先端は鈎曲する。第一手翹は、第二手翹よりも短けれども、必らず存在する。この類は、留り木などに静止し、折々昆蟲を探りに、短距離をば、急激に飛び出しては、また舊の處へ戻り歸るのである。本科には、脚の長さものもありて、脚でよく歩るき廻はるのである。巢は常に開いて居る。本科のものは、温暖なる地方に、最も夥しく産し、東半球に限りて産するのである。

〔一〕 小鮫鷓 *Muscicapa latirostris*, Raffles.

英名を「ブラウン、フライキャツチャー」(*Brown Flycatcher*)又「スモール、グレー、フライキ

ャツチャー」(*Small Gray Flycatcher*)といふ。鮫鷓に似たる灰色の小鳥にして、翼長は二寸三分内外に過ぎない。胸部は、彼れよりも一層蒼白にして、斑紋がない。上體部は總べて

帯灰黒褐色にして、嘴と脚とは黒く、腹部と下尾筒は、白色である。

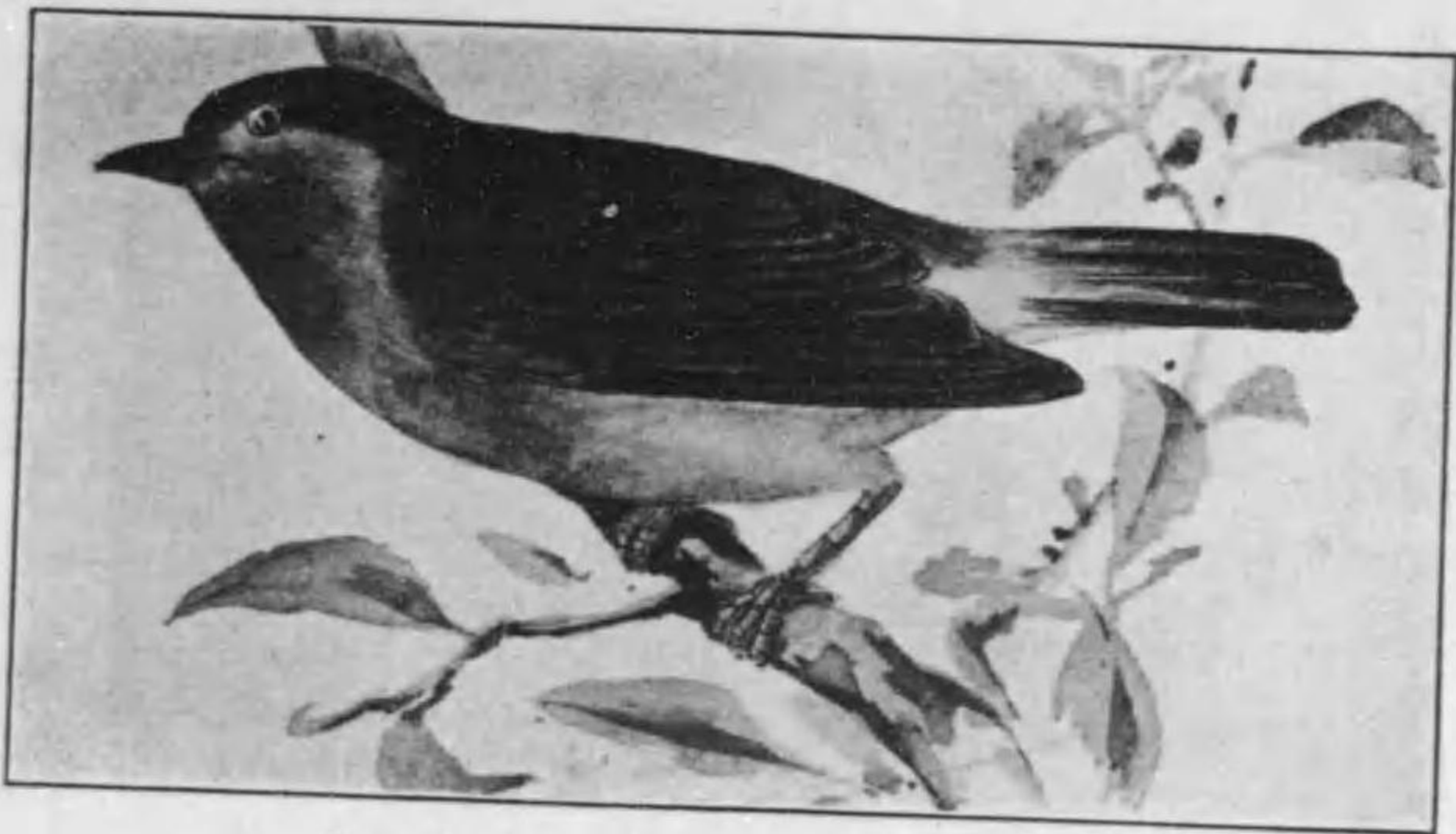
この種は、夏季は、北海道及び千島地方を歴遊するものにして、本邦の南部にては、その蕃殖時季に於て、山中に普通に見らるゝのである。この種の蕃殖區域は、イエニセイ河の溪谷、黒龍江の溪谷、ヒマラヤ地方、支那の山中にありて、冬季は、印度、セイロン島、スマトラ、瓜哇、ボルネオ、マラツカ地方に行くのである。

〔二〕 鮫鷓 *Muscicapa sibirica*, Gmelin.

英名を「シベリアン、フライキャツチャー」(*Siberian Flycatcher*)といふ。前種によく類似すれども、翼長は、二寸七八分に達し、且つ上面は、總べて黒褐色にして、胸部は前種よりも、一層眞黒である。四時本邦に棲息し、夏季は山地に、冬季は平原に棲んで居る。其蕃殖區域は、本邦より黒龍江の谿谷等にして、冬季は支那印度、



圖一十六百二第 きたひめさこ



キマギム 圖二十六百二第

〔三〕 麥時又小燕 *Muscivora luteola* (Pall.)

英名を「ムギマキフライキャッチャー」(Mugimaki Fly-catcher)といふ。雄は體の上部は石板灰色にして、白色の眉を有し、肩には一條の白き斑紋がある。尾羽の大部分は、その基部に於て白色である。咽喉と胸部とは、橙黄色にして、腹部及び下尾筒に於ては、白くなつて居る。雌の體の上部は、橄欖色にして、翼と尾の殘部は、白いのである。

この種は移住の際本邦に時々來るのみにして、ジール・ホーム氏は、長崎及び越中の立山に於て採集せられたことがある。その蕃殖區域は、バイカル湖より、黒龍江の河口に到るまでの、東部西比利亞にして、移住の際、支那及び臺灣を通過し、ホルネオに冬を越すのである。雌雄は、その羽毛の色を異にすれども、尾の基部は、兩者共に多少白色にして、上尾筒

は殆んど黒いのである。鷓科のものにして、雌雄共に、尾の基脚が白きは、唯この鷓あるのである。

〔四〕 大瑠璃又竹林鳥 *Nitaya cyanomelaena* (Temm.)

英名を「ジャバニースブルー、フライキャッチャー」(Japanese Blue Flycatcher)といふ。雄は體の上部、一面に瑠璃色であつて、咽喉と胸とは黒く、腹面と尾の基脚とは白く、雌は、腹は白く、下尾筒も亦白く、咽喉には、大なる青白色の斑紋を有し、羽毛は一體に褐色である。雌は他の鷓類よりは大きく、翼長は三寸位、若くは三寸以上もあり、且つ咽喉部に、大なる青白色の斑紋を有するのである。よく鳴き、籠鳥として愛玩せらる。この種は、夏季本邦に渡來し、六月頃富士山にて蕃殖する。冬季は支那の沿岸に沿ふて、ホルネオに渡るのである。

〔五〕 きびたき雄又はかひたき雌 又眼大鷓 (雌) *Xanthopygia narcissina* (Temm.)

英名を「ナーシツサス、フライキャッチャー」(Narcissus Flycatcher)といふ。雄は、腰と咽喉部とは橙黄色にして、胸の中央部に於ては、色は薄くなりて黄色となる。雨覆と下尾筒とは、白斑を有し、肩は黄色にして、羽毛の殘餘は、殆んど黒いのである。



鳥光三 圖三十六百二第

六五四

雌は體の上部は橄欖色にして、上尾筒と尾は、小豆色となり、體の下面は灰白色にして、未成熟のものは黄色と褐色とを交へて居る。北海道にては、夏季來遊すれども、本州の南部に於ては、夏は山地に於て産卵し、冬は平原に來るのである。その性甚だ怯懦にして、常に深林に往來し、その歌調は頗る佳いのである。

〔六〕三光鳥又さんじやく(米澤方言)又をながざり又さんこてう(御殿場方言)

又ながづうかんた(沖繩縣首里方言) Terpsiphone princeps (Temm.)

英名を「ジャバニース、パラダイス、フライキャッチャー」(Japanese Paradise Flycatcher)又「ロングテイルド、フライキャッチャー」(Long-tailed Flycatcher)といふ。頭上の羽毛は、長くして、多少顯著なる冠羽となつて居る。嘴と脚と、眼の周圍の裸出部とは、青色である。雄は背部は一體に光澤ある紫黑色にして、中央の尾翹二枚は、最も長く、その長さ八寸四分乃至九寸餘に達する。雌は、背は全部赭色にして、尾翹は雄に於けるが如く、長きことはない。

春季本邦に渡來し、夏季に、樹梢に樹皮、枯草、新鮮なる蘚苔、地衣、蜘蛛の巢等を用ひて巢を造る。冬は南支那の海岸を通過してマレイ半島に渡るのである。この鳥の鳴聲は、月星日と聞ゆるが故に、三光の名ありといふ。秩父、富士山などに多いのである。

〔一〇〕五十雀科 (Sittidae)

この科のものは、殆んど雀大の小形の鳥にして、嘴は中庸の長さあり、伸直にして、概して強壯である。尾は短く、脚は大きく、前向せる趾の中で、内趾は著るしく短い。通例羽色は、藍灰色なるか、若くは一様に藍色である。

非常によく昆蟲を食すれども、又一部は植物質を食ふのである。而して他の攀縁す

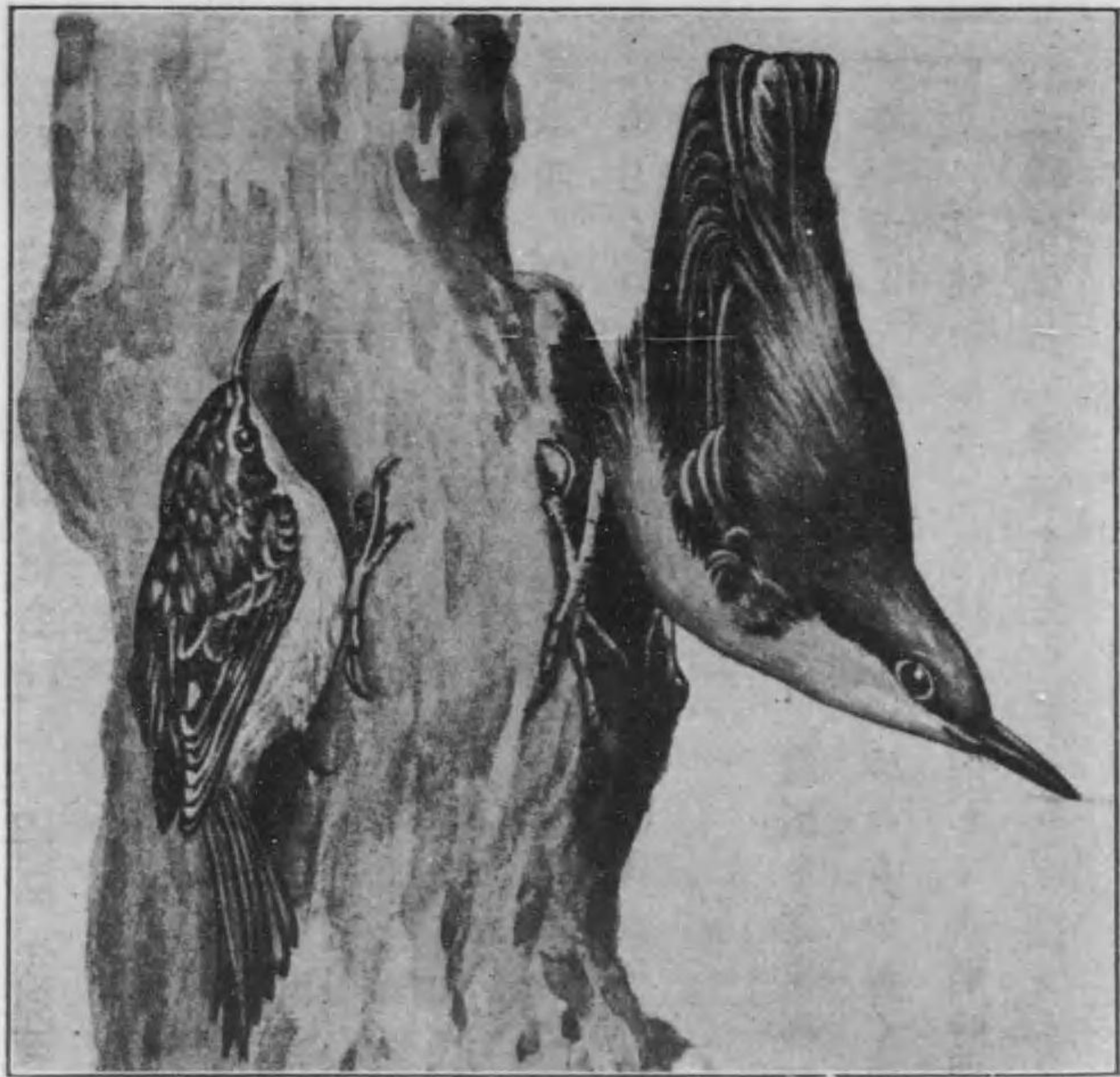
る鳥類とは異りて、樹幹をば、上下に攀縁することが出来るのである。常に穴の中に巢を造る。本科のものは、南亞米利加を除き、地球上の大部分に棲息し、あまり移住をなさない鳥である。

六五六

〔一〕 五十雀ゴトウクサ又きめぐり又きまはり又さかほこ又きねずみ
Sitta caesia amurensis (Swinh.)

英名を「ダウリアンナットハッチ」(Daurian Nuthatch)といふ。雀大の鳥にして、彼れよりは一層肥つて居る。嘴は強壯にして尖り、以つて樹皮の裂目より、ヂムシ、甲蟲其他の昆蟲類の卵を引き出すに適して居る。口角より眼部を超へて、一黒條を有し、背部は帯藍灰色であつて、咽喉と上胸部は白く、腹面と下胸部とは、淡茶色を帯び、腹側と尾根に至りて、焦赤色を加へて居る。尾翹は、樹木を攀縁することに向つて、適應せざれども、脚は短く強く、爪は強く、且つ鎌狀をなし、樹木を攀縁するに適して居る。

この種は、四時本邦に棲息する。また滿州、西比利亞、歐洲にも産する。その動作は甚だよく鼠に類似し、敏捷に樹幹を徘徊する。常に樹皮、裂罅に棲息する諸種の害蟲、及びその幼蟲や卵を食するのみならず、蜂類の蟲癭を破りて、その中にある幼蟲及び蛹を食ふ。また秋季は油質の種子を食ふといふことである。巢は幅廣き穴より成り、自身出入



圖四十六百二第 (左)走木(右)雀十五
(From Birds Useful and Harmful)

し得る丈けの口を開き、その他は土及び粘土にて閉ぢ、この中に六乃至八卵を産む。而して卵は白色にして、鋪赤色の斑紋を有する。多くの鳥學者は、五十雀は、頭と背とをば、下方にして眠ることが事實であると認めて居る。この種は、またよく鳴く鳥である。

〔二〕 白腹きまはり
Sitta caesia uralensis
(Lichtenstein.)

英名を「シベリアンナットハッチ」(Siberian Nuthatch)といふ。

腹部全體が純白色にして、翼長は二寸四分乃至二寸七分である。主に北部西比利亞に

て蕃殖するのである。

〔二〕 白額しろびたきまはり *Sitta caesia albifrons* (Tacz.)

英名を「カムチャツカンナットハツチ」(Kamtschatkan Nuthatch)といふ。頭と頸背とは、蒼白色なれども、額と大雨覆は、孰れも純白色である。主としてカムチャツカにて蕃殖するのである。

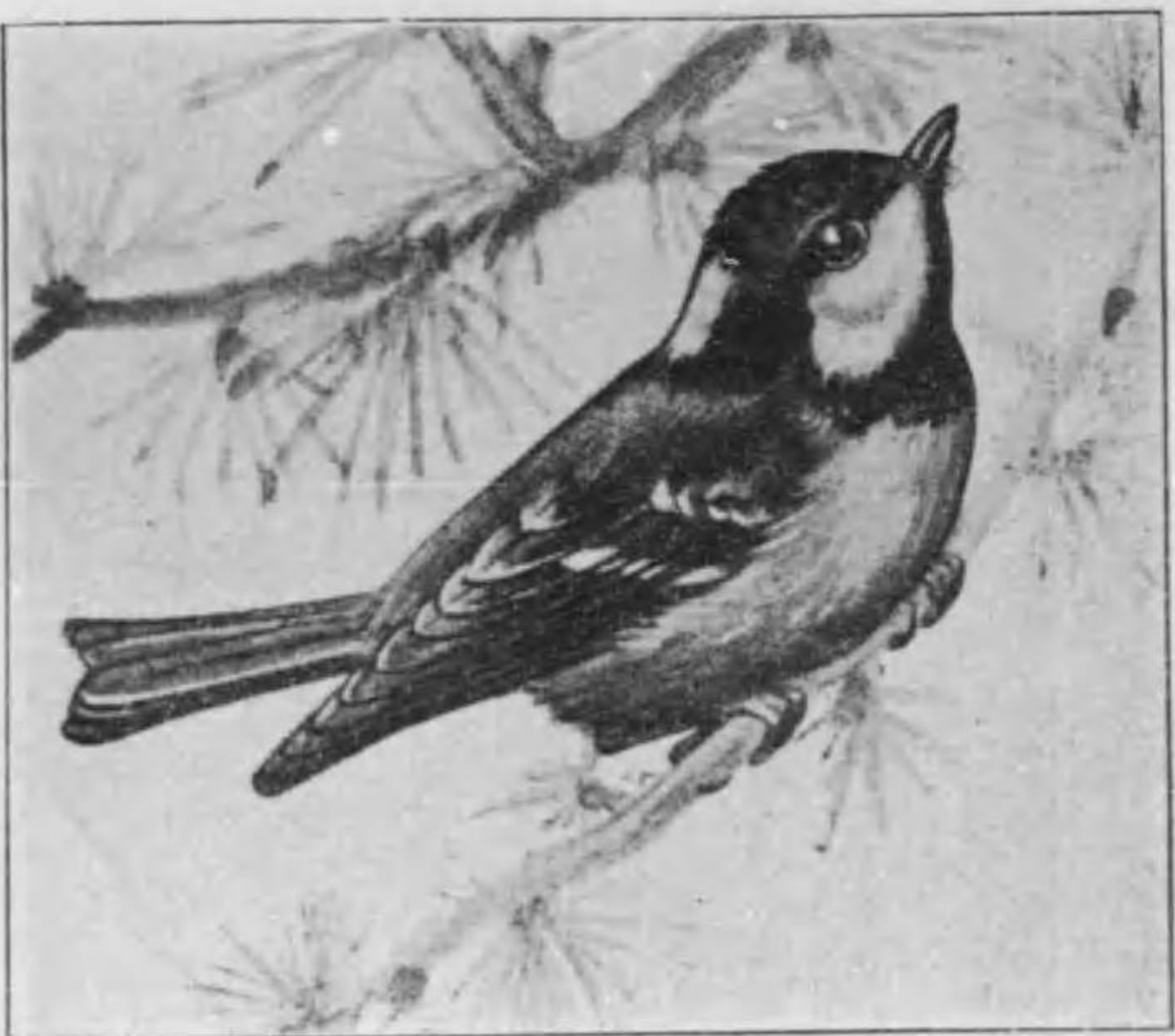
〔二〕 山雀科 (Paridae)

この科のものは、小形の鳥にして、南亞米利加を除き、地球上の各地に産するのである。翼は短く、嘴は短く、鋭るごとく、殆んど圓錐形をなす。脚は小形なれども、強壯である。羽毛は美しくあつて、雌雄間の羽毛は、唯僅少なる相違を見るのみにして、成鳥と雛との羽毛の相違も、亦僅少である。

常に樹上に徘徊し、主として昆蟲類を食すれども、亦多くのものは、植物質を食ふことが多く、而して巢は常に穴の中にあるか、若くは屋根を有するのである。他の鳴禽類の如くに、移住をなすことは少い。而して蕃殖時期が終りたる頃には、この科の多くのものは、群をなして徘徊するのである。

〔一〕 日雀 *Parus ater*, Linn.

英名を「コールチット」(Coal Tit)といふ。活潑なる可憐な小鳥にして、頭上は青き光澤ある黒色にして、咽喉も亦黒色である。頬より頸背にかけて、純白色である。背部は灰蒼色にして、腰部に至りて、少しく緑色を帯びて居る。



第百六十五圖 日雀

本邦の各地に棲息し、冬季に於てのみ群をなすのである。その蕃殖區域は、本邦より西比利亞、歐羅巴を経て、英國に擴がつて居る。歐洲にありては、樅林の最も稠密なる部分に棲息し、夥しく有害の昆蟲を食する。雛を養ふには、緑色をなせる鱗翅類の幼蟲を用ひることが多い。然しまた種子及び堅果を食ひ、スコットランド産の松屬一種の種子は、特に嗜む所である。巢は松屬の樹幹にある穴か、又は地中の穴に造られ、大部分は緑色の蘚苔より成り、その内面には、毛を敷きて、暖を取るものである。一産の卵数は六個、時には十個にして、卵殻は輝ける白色の地に、鋪色の斑紋を以つて飾られて居る。

〔二〕 青日雀あそひがこ(假稱) *Parus caeruleus*, L.

英名を「ブルーチット」(Blue Tit) 又「ブルーチットマウス」(Blue Titmouse) といふ。非常に小なる鳥である。頭頂は藍色にして、白色の環を有する。頬は白く、背部は橄欖綠色にして、翼と尾とは青味を帯び、體の下部は黄色である。

歐羅巴に産する鳥にして、常に樹木、河畔壁等の穴に巢を造り、巢は草、蘚、苔、羊毛、羽毛等を以つて、弛るく編んである。一産の卵数は、屢々十二個の多きに達することがある。嘗つて一對の鳥が、その雛を養ふ爲めに、十七時間に、四百七十五度も、食物をば運搬したことが、觀察せられて居る。樹木の皮に、穴を穿ちて産卵する所の、小形の甲蟲類を食するを以て、大に有益である。



第二千六百六十六圖 小雀 (Photo by J. T. Newman)

japonicus, Seebohn.

英名を「ジャバニース、マーシヌチット」(Japanese Marsh-Tit) といふ。雀よりも小形なる鳥にして、頭上より頸背及び上背部は、黒く、頬より頸側は白く、背は、灰褐色にして、腹面

〔三〕 小雀又十二雀 Parus palustris

は白味を帯びて居る。四時本邦に棲息し、その蕃殖區域は、本邦より英國に至るまで、北極地方を繞りて居る。

〔四〕 山雀 Parus varius T. & S.

英名を「ジャバニースチット」(Japanese Tit) といふ。翼は栗色にして、前頭は淺黄色である。單獨に若くは一對で、山地の松樹間を往來するものである。常に本州に棲息すれども、北海道には唯夏季歴訪するのである。よく鳴くを以つて、籠鳥として飼はれて居る。

〔五〕 四十雀又荏雀又ちんちがら (八丈島) 又まつむし (播磨) Parus major minor, T. & S.

英名を「マンチュリアングレートチット」(Manchurian Great-Tit) といふ。體軀は、小雀、日雀よりは稍大きい。頭上は、青き光澤ある黒色にして、冠羽はない。咽喉は濃黒色で、頬は白く、背部は灰蒼色である。肩の邊は黄綠色にして、腹は灰白色である。四時、本邦到る處に棲息し、また滿州及び北支那にも棲んで居る。盛んに糞蟲などを食ふ小鳥である。

〔六〕 柄長又るびしやく又まつさがり (上總長生郡にては) Acredula trivirgata (T. & S.)

尾は、體軀の二倍以上の長さである。頭頂は純白色にして、頭頂の兩側と、眼前とには、

黒條を有する。背は黒色に、帶紫赤色を混じ、胸は白色なるも、腹面は淡白色にして、之には帶紫赤色を混じて居る。本邦の南部には、常に棲息し、夏季は山地に於て産卵し、冬季は平原に來る。而して未だ北海道には産することが、判然して居ない。その鳴聲は、チリチリチリーである。

六六二



圖七十六百二第
長柄鳥
(After Protheroe)

外側に位する尾翹は、大部分が白色である。體の下面は、灰白色にして、横腹と體側とは、薔薇色を帯びて居る。嘴は極めて小さく、その色は黒色である。

この種は、四時北海道に棲息する。而してその蕃殖區域は、北海道より、南部西比利亞を経て、歐羅巴に亘つて居る。巢は卵形にして、白色の地衣、毛髮、羊毛、蜘蛛の巢、種々なる

[七] 島柄長 *Acredula caudata* (Linn.)

英名を「コンチネンタル、ロング、テイルド、チット」(Continental Long-tailed Tit) といふ。大きさは、鶺鴒よりは大きく、頭は圓く、色は純白色にして、頸と、頬と、咽喉と、胸とは白く、肩には白斑を有すれども、背の前面は黒色である。尾は甚だ長くして、中央の尾翹は、短く且つ黒く、三個の

鱗翅類の幼蟲の紡げる絲より成り、これらをよく編みて、精巧なる巢としてある。時には、巢を造る爲めに、三千枚の羽毛を用ひることがあるのである。巢は常に叢木の枝に、よく固着しありて、巢丈け、枝より離すのは、仲々困難な位である。卵は灰白色にして、少しく淡紅色の斑點をば有し、その數は、八個より十六個に達することがある。時には二疋の雌が、連合して、同一の巢に産卵するのであらうと、考へられて居る。然らざれば、唯一羽の雌で、斯くも、多數の雛を養育するは、餘程困難であらうと、云はねばならないのである。

この鳥は、朝から夕刻まで、絶へず活動するものにして、日雀等と同様に、樹木の皮より、梢に至る小枝の端まで、食物を探り廻るのである。この種の羽毛の重さは、存外輕きを以つて、小枝に乗ることも、折れることはなく、この際、その長き尾は、平均棍の如き作用をなして、體の重心を取るに都合がよいのである。

[一一一] 鶺鴒科 (Motacillidae)

この科のものは、總べて小形にして、雀位の大きさである。尤も、屢々著るしく、長い尾を有するものがある。嘴は中庸の長さにして、細く、後趾の爪は、殊に長いのである。第一手翹は、判然せざれども、臂翹は、殊に長くして、大抵翼の先端にまで達して居る。

本科の鳥は、大部分は地上に棲息し、跳躍することをなさずして、走るものである。而して、主として昆虫を食する。巢は地上にありて、河畔等に於て、低い處に造るのである。本科のものは、約百種を有し、鶺鴒の類は、東半球の大部分に廣く分布すれども、濠太利亞には産しないのである。常に尾を上下に揺り動かす習性があつて、その飛び方は、波状をなして飛ぶのである。而して多くは移住をなすのである。田鸚の類は、地球上到る處に産し、西半球の殆んど總べての部分に産する。

- 〔一〕 黄鶺鴒（播磨）又つづんごり（山中、長池）
(*Motacilla boarula melanope* Pallas.)

英名を「イースタングレーウツグテイル」(Eastern Grey Wagtail)といふ。頭上より背部一面は、灰黒色にして、胸部より腹部は、鮮明なる黄色である。本邦到る處に棲息し、千島には、唯夏季に渡るのみである。その蕃殖區域は、英國より露西亞、西比利亞を経て、本邦にまで及んで居る。卵は暗灰色を帯びたる帶青白色である。播磨の大上宇一氏に據れば、秋季人家近くの小便溜等に來りて、子々を食す。この鳥は雛を育てるときには、殊に昆虫類の幼蟲、各種の小蟻等を食すといふ。

- 〔二〕 頬白鶺鴒（長池）
Motacilla alba leucopsis (Gould.)

英名を「ホワイトチークド、ワツグテイル」(White-cheeked Wagtail)といふ。眉以下の顔面は全く白い。その他は、脊黒鶺鴒と同一である。この鳥は、朝鮮及び支那に産するものにして、本邦にては、對馬に産するのである。

- 〔三〕 白鶺鴒（長池）又うすみせきれい
Motacilla alba lugens, Kittl.

英名を「カムチャツカン、ワツグテイル」(*Kamtschatkan Wagtail*)といふ。頭部は白色にして、眼部に黒條を有し、胸と腹部は皆白色である。この種は季節、年齢、雌雄に因りて、その羽色を異にするのである。カムチャツカ及び千島等に於て蕃殖し、秋季群をなして南方に移住し、冬季本州及び九州に棲息するのである。

- 〔四〕 脊黒鶺鴒（富士山麓、長池方言）
Motacilla japonica, Swinh.

英名を「ジャパニース、ワツグテイル」(*Japanese Wagtail*)といふ。額、眉は白色にして、其他の頭の部分は黒い。雌の脊は濃灰色なれども、雄にては黒色である。この種も、季節、年齢、



圖八十六百二第
いれきせろぐせ

雌雄に由りて、その羽毛を異にするものである。四時本邦に棲息し、河邊の石垣等の間に、巢を營みて産卵するのである。

六六六

〔五〕 岩見鶴鶉いわみせきせいの又よこふりせきせいの又みやませきせいの又しませきせいの *Dendronanthus indica* (Gmelin.)

英名を「インデアン、ツツグテイル」(Indian Wagtail)といふ。額より脊を経て、腰部に至るまで、上面一體に茶色味を帯びたる灰青色にして、上尾筒は黒色である。咽喉と腹及び胸の一部は、白色にして、胸部には、幅廣き二條の黒帯あり、その一つは、判然たるY字形にして、他の一つは、不規則なる中央部斷絶せる淡黒帯である。翼の次列、風切は、その末端に近き外羽の外縁に淡茶を帯びたる白色部ありて、その根部に近き後半に於ては、眞黒色である。翼を疊みて、雨覆を見る時は、大雨覆と中雨覆とは、その着色を同ふし、根部に近き後半部は、眞黒なるも、末端には、淡茶を帯びたる白色部を有する。故に翼を疊む時は、判然たる黒色の、幅廣き三條の横帯と淡茶白色の幅狭き三條の横帯とがある。尾翹は細長にして、中央の二枚を除くの外、他は殆んど同長である。中央の二枚は、頭と脊と略ぼ同色にして、灰青色に茶色を帯び、最外側の二枚は、白色に富んで居る。後趾の爪は、前方にある三趾の爪よりも、比較的、太く長けれども、田鸚及び爪長鶴鶉の爪の

如く大きくはない。この種は、他の鶴鶉類と異り、尾を左右に動搖する性がある(動物學雜誌 第九十五號 小川三紀氏より)。

〔六〕 爪長鶴鶉つめながせきせいの *Motacilla flava leucostriata*, Homeyer.
英名を「ブルー、ヘッドド、ツツグテイル」(Blue-headed Wagtail)といふ。親鳥の頭上は、橄

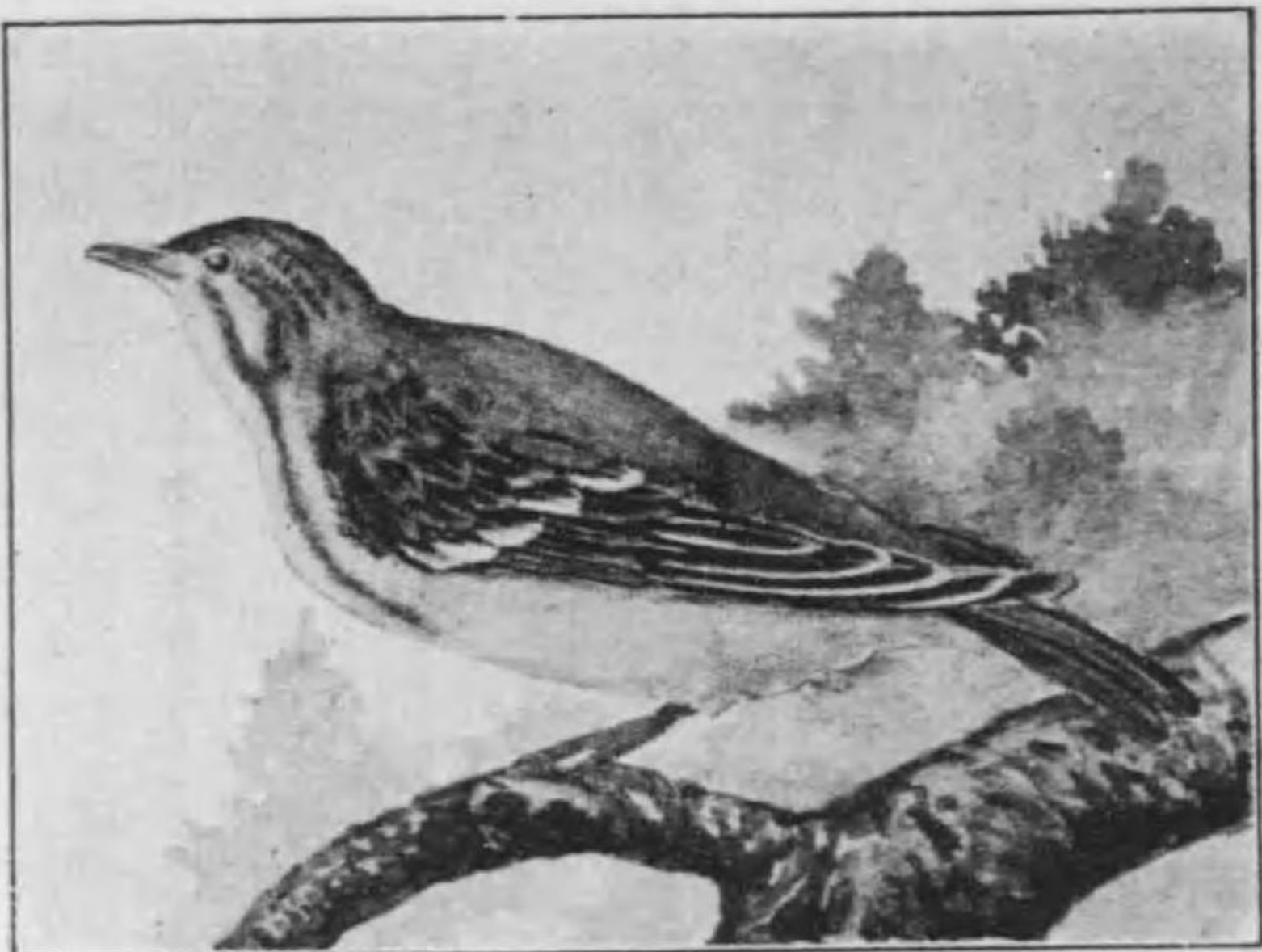
欖色を呈し、胸腹部は、一様に黄色にして、胸には前種の如く、黒色部がない。後趾の爪は、著しく延長する。

〔七〕 びんずい又木鸚びんずい又まつひ *Anthus maculatus*, Hodgson.

英名を「イースタン、トリー、ピピット」(Eastern Tree-Pipit)といふ。田鸚、胸赤田鸚よりも、全體一層綠色にし

びて、上面は綠色を帯び、腹部は純白である。後趾はその爪の長さよりも、一層長くして、尾翹は短く、二寸一分である。

この種は、本州南部に於ては、夏季山地にて蕃殖し、巢は地上にあり、藓苔若くは粗らき草にて造り、その



圖九十六百二第

側面は柔軟なる草及び小根を以つて縁取つてある。その卵は、紅色を帯びたる灰色にして、セビア色の條と斑紋と突起とが濃淡相交つて居る。而して、獨り本邦に於て蕃殖するのみならず、南部西比利亞より、歐州及び英國にまで及んで居る。

〔八〕 胸赤田鸚 *Anthus cervinus* (Pallas.)

英名を「レッド、スローテッド、ピペット」(Redthroated Pipit)といふ。上部の羽毛中に、判然たる黒點を有することは、田鸚と異なる所である。また腹部は、常に淺黄色にして、後趾はその爪よりも短きことは、木鸚と異なる所である。

この種は、春秋二季、稀れに本邦に渡來する鳥にして、その蕃殖區域は、太西洋より太平洋に至るまで、北極地方に擴がつて居る。

〔九〕 田鸚又いぬひばり又うこひばり *Anthus spinoletta japonicus* (T. & S.)

英名を「ジャバニース、アルペン、ピペット」(Japanese Alpine Pipit)といふ。體の上面は、暗褐色にして、夏の羽毛にては、この部に、灰色の小斑點を散布する。體の下面は、淡茶色にして、胸部には縦の黒斑を有する。後趾の爪は、著るしく長けれども、ヨコフリセキレイの爪よりは、短いのである。

この種は、千島より東部西比利亞、南部支那にて蕃殖し、冬季に至れば、本邦の南部に渡來し、十月頃より現はれ、十二月乃至一二月頃は、最も多いのである。常に湖沼の湿地、水田に最も多く、山にては見ることもなく、又樹木に靜止することは、ない。靜止の際には、常に尾翹をば、上下に動搖すること、恰も鶴鴿の如しである。その餌は、専ら微細なる昆蟲にして、「ツイ、ツイ」と反覆して鳴くのである。

〔一二〕 鶯科 (Sylviidae)

小形の鳥にして、稀に雀よりも大なることがある。而して外貌は、華奢な鶉のやうに見ゆる。嘴は細く尖り、跗蹠部はその前面に於て、鱗片を有する。主として昆蟲を食すれども、時には「シルビア、アトリカピラ」(*Sylvia atricapilla*)の如く、非常によく果實を食するものもある。

この科のものは、一種北亞米利加に産するもの、外、總べて東半球に産する。その巢は、種屬に因りて一様ならずして、常に開いて居るものもあり、又時としては、屋根を有するものもある。

〔一〕 しませんにう *Locustella ochotensis* (Midd.)

英名を「ミツデンドルフス、グラツスホッパー、ツープラー」(Middendorf's Grasshopper-

Warbler)といふ。體の全長は四寸四分に達し、背部は黄色にして、淡褐色を帯ぶ。腹部は白色にして、黒き斑點を有する。頭部と翼とは黒褐色である。下面の尾翹は、頂端に至るに

六七〇



種一りきしよ 圖十七百二第
(Acrocephalus turdoides)

從ひ、漸々に、殆んど黒くなり、先端は遂に灰白色となる。恐らくは、千島にて蕃殖するならんと云はれて居る。冬をばマレイ群島に越す爲めの移住の際、本邦及び支那に渡來するのである。

〔二〕 おほよ

しきり又葦原雀あしはらすずめ又からからじい(富士山麓山中)又ぎよぎよ(長池の方)

よし又よしきり(靜岡方言) Acrocephalus orientalis (Temm. & Schl.)

英名を「チャイニース、グレート、リード、ワーブラー」(Chinese Great Reed-Warbler)又「イースターン、リード、スラッシュ」(Eastern Reed-Thrush)といふ。翼長は概ね二寸五分乃至三寸である。嘴は短小にして鬚を有し、眉は純白色である。背部は淡褐色にして、暗褐色の斑紋を有する。性狀こよしきりの如しである。初夏、葦原中に營巢して産卵する。その鳴き聲は、極めて喧しいのである。この種の蕃殖區域は、本邦、北部支那、東部西比利亞にして、冬季には、南部支那を経て、マレイ群島、バルマ等に渡るのである。

〔三〕 こよこおりの Acrocephalus bistrigiceps, Swinhoe.

英名を「スクレンクス、リード、ワーブラー」(Sclerenck's Reed-Warbler)と云ふ。體形は「シマセンニウ」によく似て居る。額、頭、頸背、肩及び上尾筒等、上體一面に、淡き鼠色にして、少しく褐色を帯ぶ。翼と尾翹とに於ては、此色は稍淡い。頭の兩側には、幅廣き暗褐色の斑紋を有すれども、頭頂は淡褐色である。眉部はオホヨシキリの如く純白にして、尾翹は十枚である。體の下面は、淡黄色にして、少しく白味を帯び、咽喉と胸部とには、暗色の小斑ありて、腹の兩側と下尾筒とは褐色を呈する。初夏、葦の中へ造巢産卵し、その蕃殖區域は本邦及び東部西比利亞であつて、冬季には支那海岸よりバルマに渡るのである。

〔四〕 雪加又このはごり又しばもぐり(靜岡方言) Cisticola cisticola,

英名を「ファンテイルドワブラー」(Fan-tailed Warbler) といふ。背部は淺黄色にして、各羽の中央に斑條を有する。胴部は、一樣に鋪色である。腰部は黄褐色にして、尾翹を裏面より見れば、その末端は白めきたる色にして、次に黒色の幅廣き横帶を有する。而して中央にある尾翹は、最も長く、左右のものは、漸次短くして、之を擴げるときは、團扇の如くなりて、ヒラ〜と舞ひ行くこと、恰も蝶の如しである。頭部は、冬季には、黒條を交へ、夏季には、一樣に黒めきたる茶色となる。

本州には常に棲息し、初夏蘆葦の中に巢を造り、「ヒー、ヒー、ヒー……」と鳴く。その音調は聲高くして、抑揚變化がある。殊に夜間はよく囀る。巢は、草葉又は莖より成り、柔軟なる毛及び植物を以つて、内部を縁付けるのである。

〔五〕 しをさむい Cethia ussuriana, Seebohn.

英名を「タクザノウスキイス、ブツシユ、ワブラー」(Taczanowsky's Bush-Warbler) といふ。大きさは鶯程の小鳥なるが、尾翹は彼れよりも、一層短きを以つて、彼れよりも、稍々小形に見ゆ。而して嘴は、鶯の如く細長である。眉は、淡黄色、體の上部は暗茶色にして、體の下面は、咽喉、胸より腹の兩側に亘りて、下尾筒に至るまで、暗茶色を呈し、腹の中央部

は、白い。尾翹は著しく短小にして、翼を疊むときは、第一風切の爲めに被はれて、上部より見ることが出来ない。脚は淡黄色にして、第四趾の爪は、他趾に於けるよりも、著しく長く、且つ彎曲して居る。本種は富士山に産するのである。

〔六〕 鶯又ちやつちや(靜岡) Cethia cantans (Temm. & Schl.)

英名は「ラージジャバニス、ブツシユ、ワブラー」(Large Japanese Bush-Warbler) 又「ジャバン、ナイチンゲール」(Japan Nightingale) といふ。眼白に似て居るが、稍大きく、且つ眼の縁は白くはない。嘴は短く、細く、且つその先端に至るに従ひ、次第に尖つて居る。上體は、淡き橄欖色で、體の下部分は、灰白色である。翼長は二寸一分乃至二寸三分である。眼上には、淡色の判然せざる眉がある。尾翹は十枚を有するのである。



圖一十七百二第

すひぐう

此種は、本邦特有の鳥にして、南方の暖地には、四時棲息するが、北海道には、唯夏季のみ、渡り行くのである。東京附近では、鶯は近傍の山地より、秋季になつて來遊する。その

時は、チャ／＼と鳴いて居る。然し二月下旬頃より、三月頃にかけて、そろ／＼法華經を歌ひ出し、晩夏迄も、その通り鳴いて居る。而して秋になると、又もとのチャ／＼となつて仕舞ふ。尤も七八月頃、山地へ行くとき、法華經とチャ／＼といふ鳴聲をば、同時に聞くことが出来る。鶯が美音を發して鳴くのは、雄が雌を呼ぶ爲めである。またチャツ／＼といふ音は、呼び掛ける時や、危難の來るのを知らせるときにも、出すのである。殊に非常に恐怖した時には、チーといふ鋭るごい音を發するのである。元來この鳥は、物に驚かすときは、尾を背上に擧げて、勵しく轉ぶる性がある。彼の鶯の谷渡りといふ啼方は、悲しひ時と、嬉しい時の兩方に出るのであるが、嬉しい方の時では、調子や音色が、爽快であるのである。

古今集に「鶯の谷よりいづる聲なくば、春來ることを誰が知らまし」とあつて、春告鳥の名が起つたのである。また藏王和歌集には、和泉式部の詠まれたのに「春は早頃に成り行く山里の軒に來て鳴け、けふ花見鳥」とあつて、花見鳥の名が起つたのである。その他、その啼き聲から、經讀鳥の名もある。

鶯は一雄が四五羽の雌と同棲し、その棲める谷間や、野原などには、必らず一定の縄張りがあるさうである。そこで、甲の雄の領分地へ、他の頭分から、乙なる雄が侵入して、

雌を奪はんとすると、そこに雄同志間に、烈しい喧嘩をするのである。

鶯の産卵期は、暖地ほど早い。先づ四五五月頃より、七月頃に亘つて居る。茶畑や、日當りよい竹藪に、竹の枯葉をば、美事に組み合せて、地上一尺乃至四尺位の所に、巢を造るのである。巢の入口は、横に向いて居るのが多い。卵は四乃至六個を産むのが普通である。卵殻は眞赤で、斑紋はない。俗に一番子、二番子、三番子など云いて、數回雛を育てるやうにいふて居る。抱卵中、雄は雌の爲めに食物を運び、雛の養育は、一切雌に任かせて、自分は、附近の梢の上にとつて、蛇や其他の敵の襲來を、監視する任務に服して居る。鶯の命數は、平均十年位に達するといはれて居る。

〔七〕 小笠原鶯 *Cetia diphone* (Kittlitz.)

英名を「ボニン、ブツシユ、ワーブラー」(Bonin Bush-Warbler)といふ。小笠原島に産する鶯にして、色は鶯よりも稍淡いのである。尾の長いのと、跗蹠部が長いのと、嘴が長いのが、前種と異つた所である。

〔八〕 目細又やまうぐひす *Phylloscopus xanthodryas*, Swinhoe.

英名を「スウインホース、ウイロー、ワーブラー」(Swinhoe's Willow-Warbler)といふ。體軀は、橄欖色にして、耳部及び眼後も同じく橄欖色を呈し、腹面は一體に黄白色である。

この種は本邦及び支那の東南部に棲息し冬季はホルネオに至れども初夏の候には本道千島及び北海道にて蕃殖するのである。

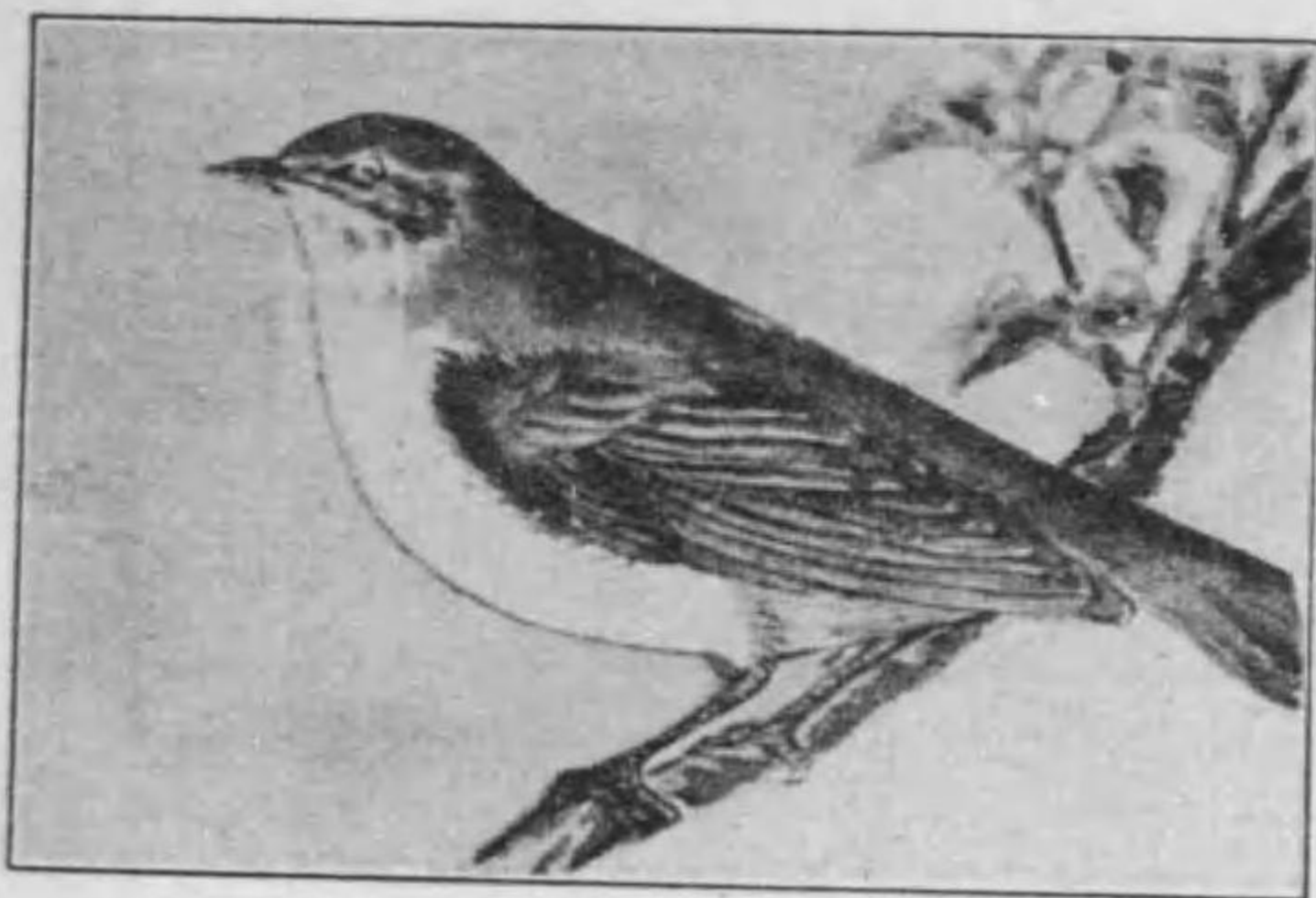
〔九〕 小蟲喰又與平次(米譯) *Acanthopneuste borealis* (Blasius.)

英名を「アークチャツク、ウイロー、ワーブラー」(Arctic Willow-Warbler)といふ。手翹は甚だ小さく、且つ尖りて居る。體の下面は殆んど白く、胸と下尾筒部とは極く少しく黄色を以つて染まつて居る。

この種はカムチャツカに於て蕃殖し、春夏の際、本邦に渡來し、冬はバルマ、マレイ半島、南アングダマン島に行くのである。

〔一〇〕 仙臺蟲喰 *Phylloscopus coronatus* (Temm.)

英名を「テンミンクス、クラウンド、ウイロー、ワーブラー」(Temminck's Crowned Willow-Warbler)といふ。背部は一様に橄欖色で、眉は目細より幾分判明にして灰白色を呈する。嘴の先端の彎曲の度は、目細よりは稍々大きく、且つ缺刻は、目細にては甚だ小にして、判然たらざることあれども、こ



第百二十七圖 二 ぼめ

の種にては判然する。頭上には青白色の斑條が、後頭にかけて、頭の中央を貫通して居る。下尾筒部と肩翹は黄色にして、體の下面は一體に灰白色である。

本邦には、夏季最も普通に來遊すれども、冬季はマレイ群島に越冬する爲めに、途中臺灣及び支那の沿岸を通過する。その繁殖區域は、本邦及び東部西比利亞である。

〔一一〕 菊戴又きくいた(武州方言) *Regulus cristatus orientalis*, Seeb.

英名を「ゴールドエン、クレステッド、ドレン」(Golden-crested Wren)又「パールド、クレスト」(Gold Crest)といふ。



第百三十七圖 キマタイクキ

本邦産の極めて小形の鳥の一つである。頭上には美麗なる黄色の冠羽を有し、その状恰も菊の花に似て居る。故に菊戴の名がある。雌は、冠羽の中央に黄色の條紋を有すれども、雄にては、橙黄色である。頸と上背部とは一體に橄欖色にして、胸と上尾筒には、黄

色を帯び、雨覆と第二風切は茶褐色にして、先端に白斑を有する。嘴は小さく細く尖り、脚は殆んど黒色である。

六七八

この種は、四時本邦に棲息し、富士山にては、海面上七千尺の高處にて蕃殖する。其蕃殖區域は、本邦支那、ヒマラヤ、南部西比利亞、歐洲大陸、英國に擴つて居る。常に杉林に徘徊し、昆蟲の卵、幼蟲、蛹等を食ふ。巢は松樹等にありて、之を發見するに困難である。卵は六個、時には十一個ありて、豌豆大であつて、暗赤色の地に、赤味を帯びたる斑點を有するのである。

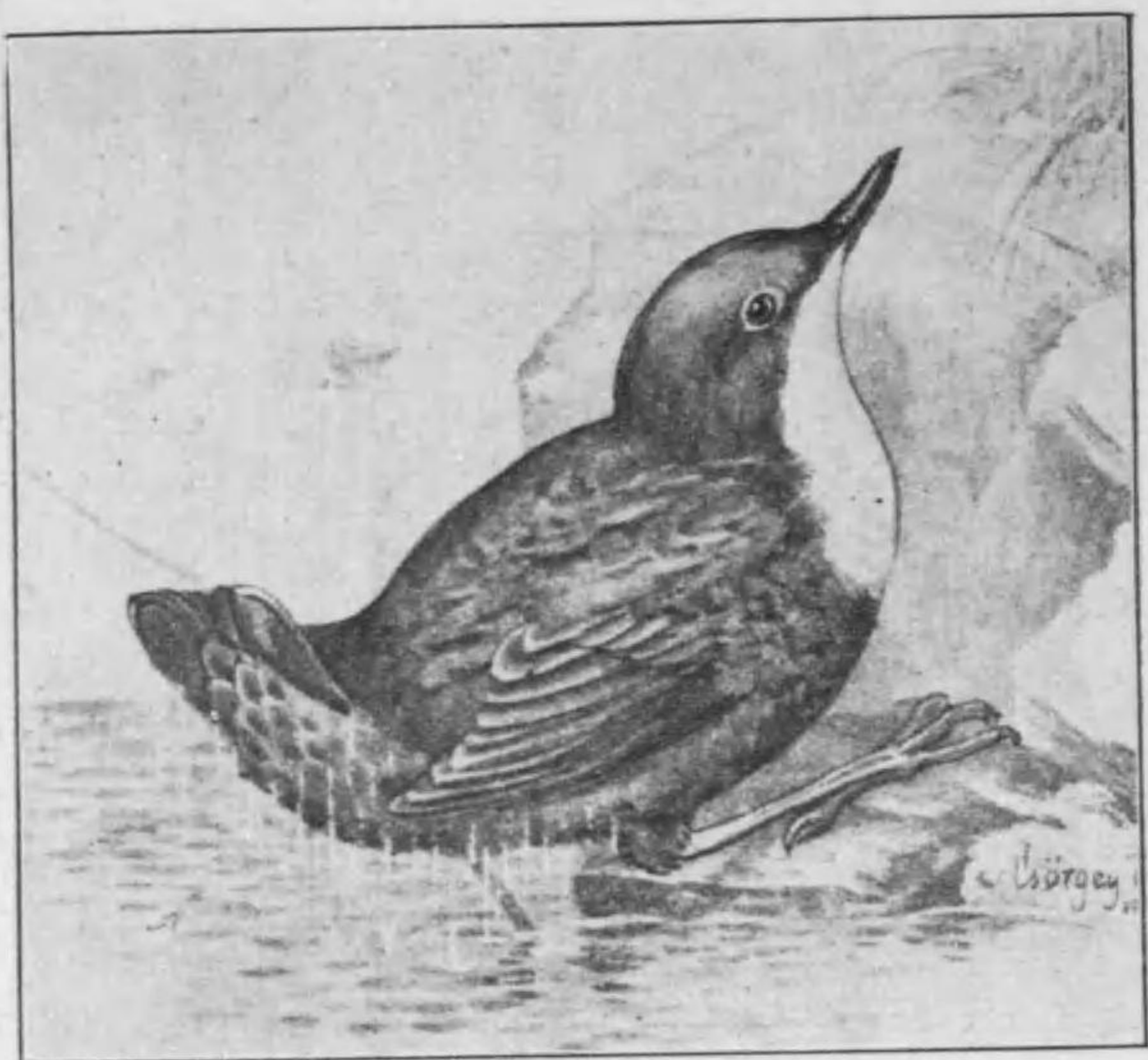
〔一四〕 河鳥科 (Cinclidae)

この科のものは、英名を「ヂツパー」(Dipper) 又「ウツター、オーゼン」(Water-Ouzel) 又「ウツター、スラツシユ」(Water-Thrush) といふ。尾は短く、羽毛は暗色であるが、咽喉と胸とは、白いことがある。よく水中に潜入し、翼をば櫂の如く使用して、水中を推進するのである。巢は蘚苔、葉等より成り、卵形にして、側方に入口を有し、常に水邊に近く造られてある。また時としては、瀑布の下にあることがある。卵は純白色である。産れたる雛は、巢を去ることが出来る位に、成長するときは、直ちに水中に入るのである。

この科のものは、東西兩半球の山地に棲息する。而して亞弗利加にては、アトラス山

脈以外の地には棲息しない。又濠太利亞にも、産せざるのである。

〔一〕 歐洲河鳥 (假稱) *Cinclus aquaticus*, Bechst.



第百七十四圖 歐洲河鳥 (From Birds Useful and Harmful)

英名を「ヂツパー」(Dipper) といふ。體長

は五寸餘である。頭と頸背とは、濃茶褐色で、尾と翼とは暗褐色である。頤と咽喉と、上胸部とは白く、下面は順次に栗褐色、暗灰色、及び黒色となつて居る。嘴は帶黒褐色で、脚は褐色である。體の上面は暗灰色と、褐色との斑となつて居る。嘴は錐狀をなし、脚は強壯にして、趾は鋭るごく長く、且つよく分離して居る。

この鳥は、風景描くが如き、山間の溪流を往來し、水の作用に因りて圓く滑らかなれる石の上より、水中に跳び込み、水下に歩るき、水底の小礫を起して、蚌科

のもの、其他鮭属の幼魚を害する昆蟲を食するを以つて、有益である。また小なる甲殻類、軟體動物を食すれども、決して魚類を食ふことはないのである。その羽毛は、水中にありても、水を透さぬやうになつて居る。

巢は、概して急流に近き處に置き、小なる瀧に近い處か、又はその背後を撰びて、構へて居る。その材料は葉、草、苔より成れる大なる卵形の塊であつて、内面には、枯枝又は枯葉を敷いてある。その入口は側方に開きて、低く下方に位する。一産に四乃至六卵を置く。卵は、最初は光澤ある白色であるが、鳥がその上に坐りて、温めるときには、光澤はなくなつて来る。而して年に二番子まで産むといふことである。充分に飛び得る雛が、三月の二十一日頃に、發見せられたさうである。この鳥は、鷓鴣の如くに、短尾をば上方に反らせる風がある。

〔一〕 かはがらす又さはがらす(靜岡)又かはすすめ(靜岡、安曇郡、坂の上、方音)
Cinclus pallasi, Temm.

英名を「シベリアン、ブラック、ベリイド、ヂツバー」(Siberian Black-bellied Dipper) 又「バラース、ヂツバー」(Pallas's Dipper) といふ。體の全長は六寸三分に達し、全身は黒褐色で、白色の斑紋を有する。本邦の山地の溪流に棲息し、その分布は、北はカムチャツカ及びアリ

ユシアン群島に至り、西方はバイカル湖に至り、南方は中央支那に至るまで擴がつて居る。

〔一五〕 鷓鴣科 (Troglodytidae)

翼は短く、常に叢林に徘徊し、昆蟲を食する。嘴の基部には、剛毛なく、巢は被ふに屋根がある。この科のものは、地球上到る處に産すれども、南亞米利加には、殊に多く産するのである。

〔一〕 鷓鴣つとみ 又ささ、いい 又ささ、きき 又こうじんこうじん、ごりごり (上總、長生郡) 又みそつちみそつち (富山、上總、長生郡、方音) 又みそさんみそさん、だいだい (播磨) 又みそぬすみみそぬすみ (池上、總長生郡、方音) 又みそつくみそつく 又みそつごりみそつごり 又みすくみすく、りり (米澤、方音) 又みそつちみそつち (米澤、方音) Troglodytes fumigatus, Temm.

英名を「シャバニース、レン」(Japanese Wren) といふ。極めて小形の鳥である。全身は焦茶色にして、腰、翼、尾、腹の羽毛には、細小の横條を有する。而して歐洲産のものよりも、一層暗赤色を帯びて居る。

四時、本邦に、棲息し、夏季は山地にて蕃殖すれども、冬季は低地に降り、水邊の森林に棲んで居る。常に短き尾翹をば、少しく上方に反向する性がある。その蕃殖區域は、本邦

より亞細亞を経て、ヒマラヤ山及びアルタイ地方にまで及んで居る。

〔二〕 千島鷓鴣 *Troglodytes fumigatus Kurilensis, Stejn.*

英名を「クッル、アイランド、レン」(Kurile-Island Wren) といふ。羽毛の色澤は、前種と少しも異なる所はないが、嘴は比較的長く、四分六厘餘である。千島にて蕃殖する。

〔三〕 歐羅巴鷓鴣 *Troglodytes parvulus, Koch.*

英名を「コンモン、レン」(Common Wren) 又「ジェン、ニイ、レン」(Jenny Wren) 又「チッドレー、クリーパー」(Tiddley-creeper) といふ。體長は三寸四分よりは短い小鳥である。羽毛は樹幹と同様なる褐色にして、暗色の斜條を有する。眼上と咽喉と胸の色は淡く、尾羽は殊に薄くして、條紋を有する。嘴は稍々縦扁にして、針の如く鋭る。而して脚は褐色にして、割合に強壯である。



鷓鴣巴羅歐 圖五十七百二第

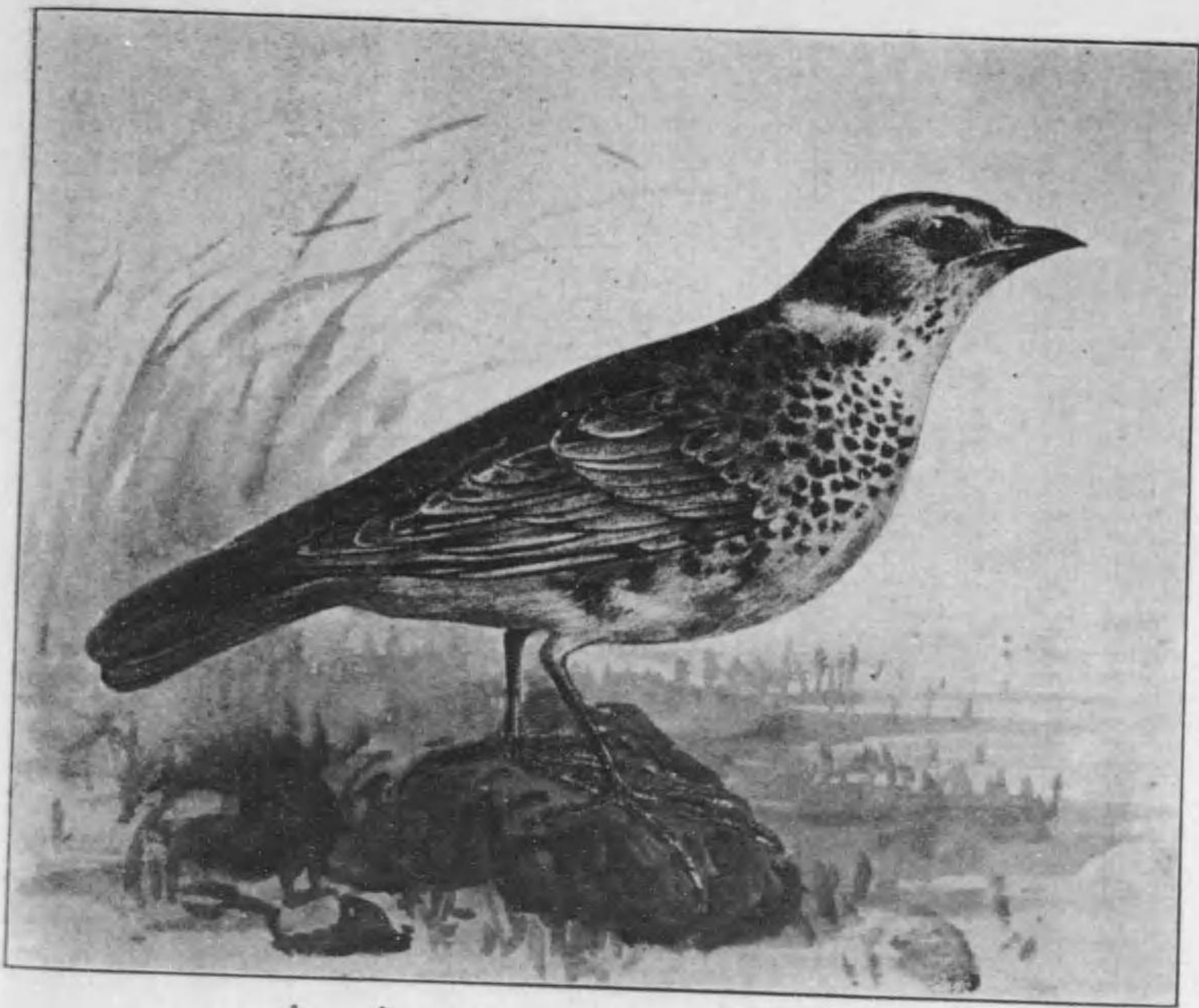
活潑なる小鳥にして、冬季は人家に近く來り、電光の如き迅さを以つて、孔隙中に突進し、材木の堆積裡に、身をば突き入れるのである。その食物は、隠れたる微小の昆蟲、小形の蜘蛛、鱗翅類の幼蟲、蛹及びヂムシである。

巢をば、廢屋の隅に置く。巢は割合に大きく、且つ濶大なる入口を有する。巢の中には、藓苔、羽毛の塊ありて、その中に六卵、稀に八卵を産むのである。卵は小さく、白く、且つ血赤色の斑紋を有するのである。

〔一六〕 鶇科 (*Turdidae*.)

この科には、多くの種類を含み、且つ廣く分布して、地球上の各地に産する。而して、多くは移住の鳥である。嘴は細く、且つ中庸の長さであるが、翼と尾と脚とは、亦同様に細く、且つ中庸の長さである。頭には冠毛なく、又羽毛には光澤を有せざるのである。雌雄は概して羽毛を異にし、雛はその初生の羽毛に於て、體の下面には斑點、及び斑條を有し、又概して體の上部に於ても、同様に斑紋や斑條を有する。鼻孔は羽毛を以つて被はれて居る。跗蹠部は長くして、その前面と兩側とに、鱗片を有するのである。

〔一〕 八丈鶇 又あかじない 又しまつぐみ 又こつぐみ (山城國) 又ほしつぐみ *Turdus naumanni, Temm.*



第百七十六圖

英名を「レッド、テイルド、オウゼル」(Red-tailed Ouzel) 又「レッド、テイルド、フィールドフェーア」(Red-tailed Fieldfare) といふ。尾翹の内羽と、胸と横腹と、腋下と、下尾筒とは、淡栗色にして、體の上部は、殆んど一樣に橄欖褐色である。本邦には、冬季稀に渡來し、東部西比利亞にて蕃殖するのである。

(二) 鶉つぐみ 又ちやうま(關東地方) 又つむぎ(播磨) 又ほんちやうま(靜岡、川、小) 又なみつくみ(川、口) 又つくあ(富士、山、池) 又しばほり又しばほりつくみ(以上、長門、國、阿武)

(佐々島、並三郎氏、福) 又こくばがへし(播磨) ちやうまつくみ(上野、つ) 又かきつむぎ又ちやうまん(武州、鴻巣、深井、武司氏)
Turdus fuscatus, Pall.

英名を「ダスキイ、オウゼル」(Dusky Ouzel) 又「イースターン、フィールドフェーア」(Eastern Fieldfare) といふ。大槻博士の言海に「つむぎ」は「嚙み」の義で、夏至の後に、聲無ければいふとある。腋下は暗栗褐色にして、臂翹と大雨覆とは栗色である。この種は冬季北方より群をなして本邦に渡來し、南方の島嶼に於て冬を越すのであるが、その蕃殖區域は南部西比利亞である。地より、ケラ、蚯蚓等を掘りて食ひ、又樹木の果實を食ふのである。

(三) 赤腹あかばら 又ちやうじない又あかじない又あかつばら(靜岡、武州、鴻巣、長門、國) 又じない(下野、足) 又くそつぼろ(上總、長生、郡、方言、雌) 又かじわつくみ(長門、國、阿武、並) 又しんない(阿波、郡、那) *Turdus chrysolaus, Temm.*

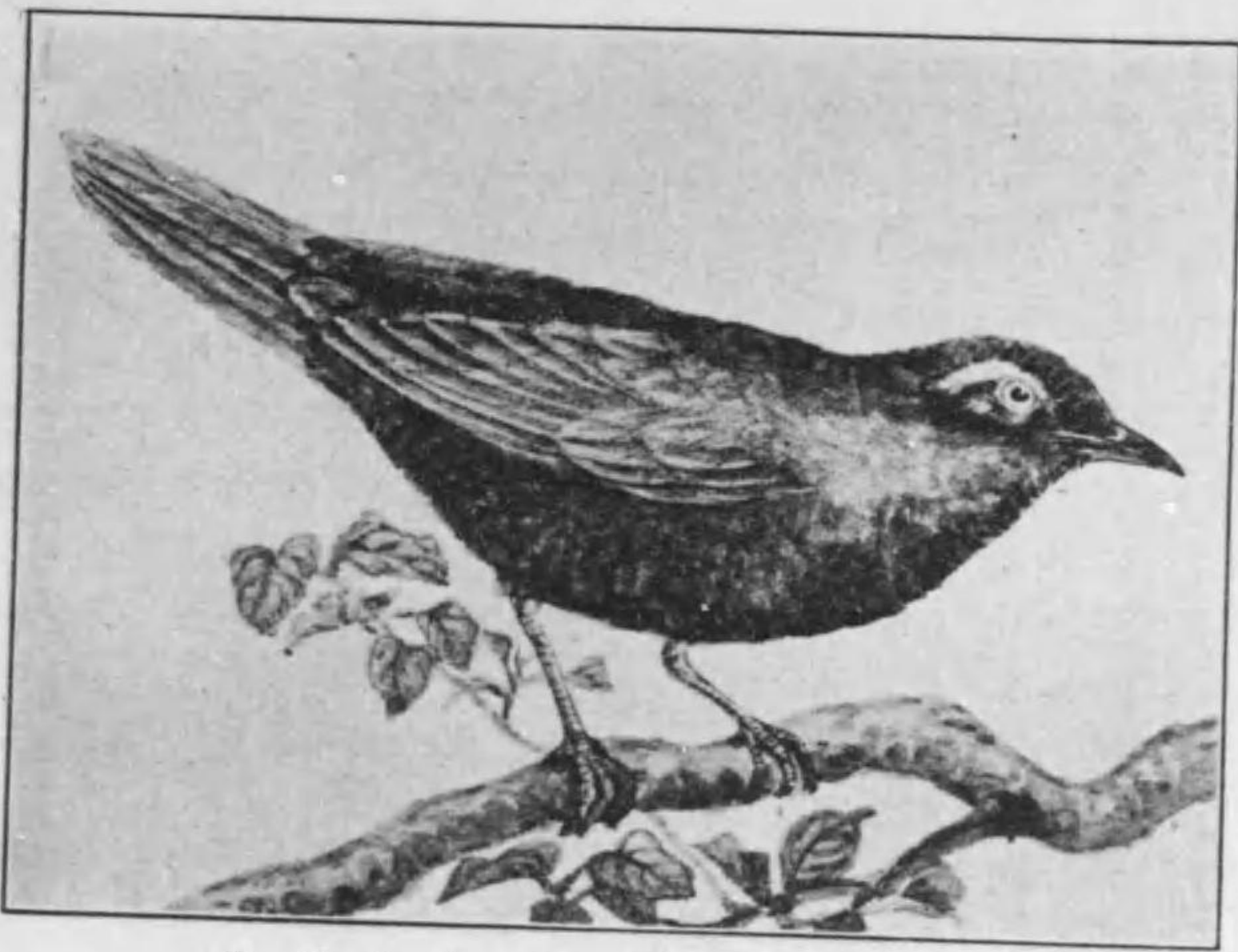
英名を「ブラウン、ジャパニース、オウゼル」(Brown Japanese Ouzel) といふ。腋下は淡灰色である。胸と腹とは茶褐色で、體の上部は一樣に褐色にして、稍々小豆色を帯びて居る。本邦到る處に棲息し、藪にて營巢する。而して秋季には、南支那及び臺灣に渡るのである。千葉縣林壽祐氏に據れば、鹿芥落葉を搔撥して、小蟲、殘穀を拾ひ、ナンテン、モチ、カナ

その内面には草、軟らかき根、馬毛をば縁付けてある。而して冬季は南部支那、ハイナン

に渡るのである。その音聲は佳きを以て、籠鳥として愛玩せらるゝのである。エイチ、フウバー氏(H. Hooper)に據れば、この類は、果實を食すること夥しいへども、時季によりては害蟲を捕ふるものにして、有益鳥であるといふ。

〔八〕 眉白まみじろ又まみじろこんないまみじろ又まみじろまゆつぐ
み *Turdus sibiricus*, Pallas.

英名を「シベリアン、グラウンド、スラッシュ」(Siberian Ground Thrush) 又「シベリアン、スラッシュ」(Siberian Thrush)といふ。雄は稍灰色を帯びたる黒色にして、白き眉を有する。雌は橄欖褐色にして、體の下部には白色を有する。東部西比利亞にて蕃殖する。福島覺三郎氏に據れば、島津製作所の模範鳥、卵標本にては、卵の色は最も、淡き綠色にして、焦赤茶色の小斑點と、淡き紫色の斑



第百二十七圖

範鳥、卵標本にては、卵の色は最も、淡き綠色にして、焦赤茶色の小斑點と、淡き紫色の斑

斑とを混じ、その大きさは、短徑七分長徑一寸許にして、富士近傍にて、明治三十四年七月に、採集したるものなりといふ。

〔九〕 虎鶇とらつぐみ又とらつぐみぬえぬえじないぬえ又ぬえおにつぐみおにつぐみ又おにつぐみごらつくごらつく
（東京、京都、大阪、名古屋、神戸、東京、下野、信濃、又わづりつくみ（長門、阿武、郡佐々並）又ひるしぎ（島））
又三原てつこ（島） *Geocichla varia*, (Pall.)

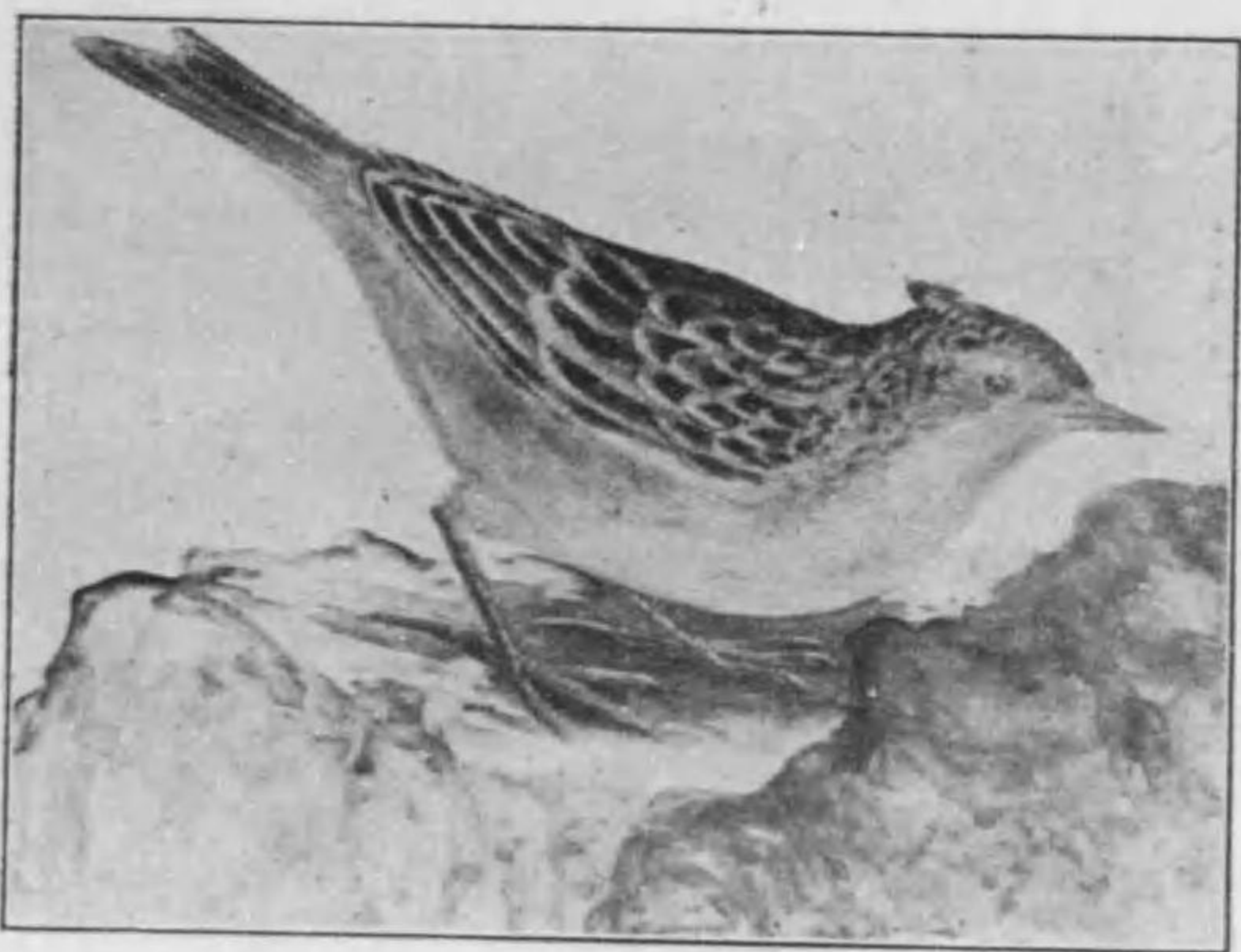
英名を「ホワイト、グラウンド、スラッシュ」(White's Ground-Thrush) 又「ホワイト、スラッシュ」(White's Thrush)といふ。體の上部と下部に於て、黒き同心狀の斑紋を有する。また尾翹は十四枚ある。この種は東部西比利亞及び北支那にて蕃殖するのである。

〔一〇〕 大虎鶇おほごらつくみ *Geocichla major*, Ogawa.

琉球の奄美群島中の大島特産のものである。

〔一一〕 小笠原ぐわびてう *Geocichla terrestris* (Kittl.)
英名を「キットリツス、グラウンド、スラッシュ」(Kittlitz's Ground Thrush)といふ。西曆千八百二十八年に、小笠原島にて發見せられたるものである。翼の下面には、他の鶇に見るが如く、白斑を有すれども、腋下一様に褐色であることは、他と大に異なる所である。

〔一二一〕 磯鶇イソトビ又いはつくみ又いそひよ小川三紀氏又いそつくみ吉波江元 Monticola solitarius, (P. L. S. Müll.)



第百七十八圖 いはひばり

英名を「イースターンブルー、ロックIIスラツシユ」Eastern Blue Rock-Thrush) 又「ブルー、アンド、レッド、ロックIIスラツシユ」(Blue and Red Rock Thrush)といふ海濱の岩礁多き所に棲息し、深く内地には入り来らないのである。全身は美麗なる藍色にして、腹面の下部は赤褐色にして、腹面の下部は赤褐色を有するのである。本邦には、夏季普通に見る鳥にして、冬季は、本邦の南部に於て、時々見るのであるが、小笠原島にては、甚だ普通である。この種は、本州東部、西比利亞、臺灣にて蕃殖し、冬を支那の南東部及びマレイ群島に越すのである。

〔一二二〕 岩鶇イソトビ又すなひばり富士又くらごり又いはすめ Accentor erythropygius (Sw.)

英名を「ジャバニース、アルピン、アクセンター」(Japanese Alpine Accentor) 又「スウインホース、アクセンター」(Swinhoe's Accentor)といふ。この種は富士、御嶽、乗鞍、白山の如き高山に産する外、歐洲の高山にも産すれども、北海道には産せざるのである。その鳴聲は、愛すべきものである。咽喉部は白く、且つ黒色の斑點を有し、上尾筒は栗色にして、中央部は暗色である。常に岩上に於て飛び廻り、その性よく人に馴れ、低き優さしきクツクツといふ鳴聲を出すのである。

〔一四〕 茅潜カヤクサ又おほさま Accentor rubidus (Temm. & Schl.)

英名を「チャバニース、ヘツヂIIスバロー」(Japanese Hedge-Sparrow)といひ、本邦に固有なる一種である。多分全國に棲むのであらう。常に山中に棲み、夏月富士山の八千尺の所まで登る。籠鳥家の愛玩する鳥である。咽喉は褐色にして、紋條がない。胸部も亦同様である。

〔一五〕 上鶇シヤウビタキ又てりびたき雄又ばがびたき雌あやびたき雌又へんくたくた上總長又ひたき靜岡又くらたき靜岡又ひつかた武州鴻巣方又へつたか上又ばかつ倍郡大川村又ほごけ武州深井武司氏のこうたき長門國阿武又もんつき巖

Ruticilla aurea (Gmelin.)

英名を「ダウリアン・レッド・スタート」(Daurian Redstart)といふ、深井武司氏に據れば「ひつかた」又「へつかた」の方言は、尾を上下に動かし、ガタムと音を出すより、名づたものであるといふ。雄は、頭上は灰色で、背部と咽喉部とは、黒く、胸と腰部とは、栗色であつて、翼には、純白色の大紋がある。これは腕蹠と臂蹠とに於ける基部が、白色をなせる爲めに、斯く顯れ出るのである。雌は、總身茶褐色にして、下面は淡く、腰以下は、栗色にして、兩翼に於ける白紋は、雄よりも、小さいのである。

この種は、四時本邦に棲息し、夏季、山地に於て産卵し、冬は平原に來る。常に低き藪にありて、聲高き「ビイビイ」といふ音調にて、鳴くのである。而して西比利亞の南東部、東部、蒙古、北支那に於ても蕃殖し、冬は臺灣、南部支那、ハイナン時としてはアッサム、マレー半島、瓜哇、チモールに到るのである。

〔一六〕 野鵪のびたき又「あがり」又「かやもぐり」(富士) *Pratincola naura*
(Pallas.)

英名を「シベリアン・トロンチャット」(Siberian Stonechat)又「インヂアン・ストーンチャット」(Indian Stonechat)といふ。冬毛は、頭上より背にかけて、一體に鋪赤色に富んで居つて、

上喉は淡茶色なるが、各羽の根部は黒く、下喉より胸と腹とは、赤茶色で、尾下に至りて、淡くなつて居る。翼には、中庸大の白斑ありて、翼と尾とは黒く、その縁邊は、多少茶色である。夏季にては、腰は白く、その他の上部は、一體に黒色に變するのである。

この種は、夏は本邦の山地にあれども、秋より平原に來りて、棲息する。而して冬をば、印度、バルマ、南部支那に、越すのである。

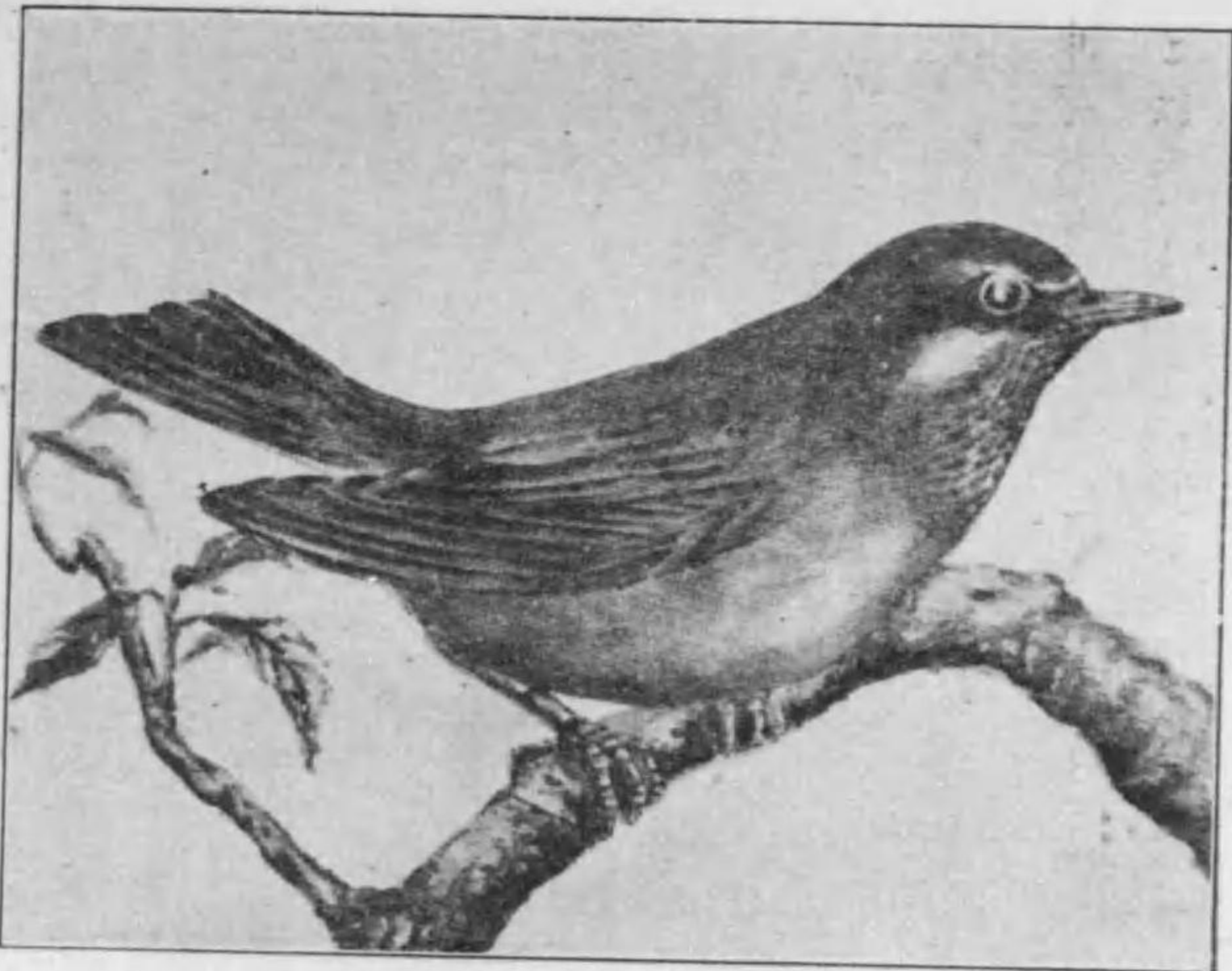
〔一七〕 あかひげ *Erihaeus komadori* (Temm.)

英名を「テンミンクス・ロビン」(Temminck's Robin)といふ。琉球奄美群島の中なる大島と、徳之島、沖縄群島の中なる



圖九十七百二第 嶽野産州歐 (Photo by G. Watmough Webster & Son)

沖縄島、先島群島の中なる入表島に産する。雄の成長せるものは、願は、黒く、咽喉と横腹とは、黒く、體の上部は、橙黄栗色であつて、腋下の中央部は、暗色にして、その他は、白色である。雌の體の上部は、雄と同色なれども、咽喉部と胸との羽毛は、乳白色にして、灰色の



第 二 百 八 十 八 圖

六九四
 縁を有し、下尾筒は白色である。雄は鳴聲高く、且つ上品なるを以つて、籠鳥として愛玩せらるゝのである。

〔一八〕 ほんごうあかひげ

Erithacus nanivai (Stejn.)

英名を「ステジチゲルス・ロビン」(*Stejneger's Robin*)といふ。雄は頤と咽喉とは黒く、下尾筒、横腹、腋下は、雌に於けるが如く、灰色である。雌はその胸部が褐色である。この種は沖繩島に産するのである。

〔一九〕 野駒又のこごり又ひの

まゐる(北海道)又なごやごま(静岡市鳥商の稱呼)又紅脰(北京) *Erithacus calliope* (Pallas.)

英名を「シベリアン・ルビー・スローテッド・ロビン」(*Siberian Ruby-throated Robin*)といふ。

雄の咽喉は、華麗なる金屬光澤を帯べる紅玉色である。雌は淡褐色にして、尾は橄欖褐色である。千島列島及び北海道には、夏季來遊すれども、本州にては、冬季現出する。その蕃殖區域はウラル山よりカムチャツカに亘れる西比利亞地方にして、冬は南支那フイリピン諸島バルマ及び印度に渡るのである。

〔二〇〕 駒鳥(知更鳥) *Erithacus akahige* (Temm.)

英名を「チャバニス・ロビン」(*Japanese Robin*)といふ。咽喉と尾とは、橙黄栗色である。雄は、下胸部と横腹とは、灰色なれども、雌は是等の部は褐色である。本邦の南部にては、山地に於て産卵し、又伊豆七島にても蕃殖する。而して冬季は平原に棲んで居る。

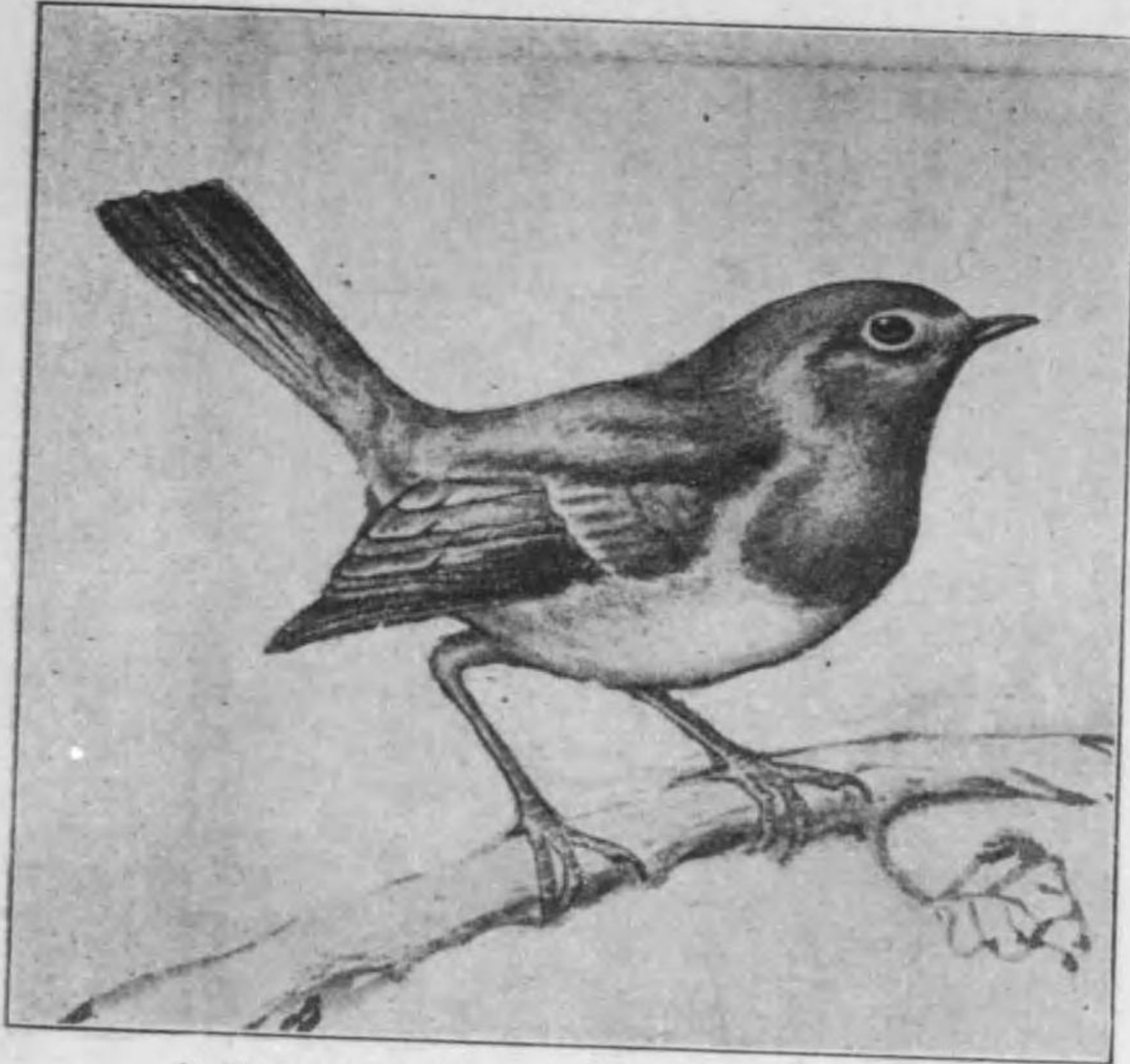
雄は、その音聲甚だ美音にして、四月頃より入梅に入りて、盛んに鳴き、恰も駒の嘶くが如き、鳴聲を發するを以て、駒鳥といふ名がある。此鳥は「ほうじろ」の音調を擬するのである。

〔二一〕 歐羅巴の駒鳥 *Erithacus rubecula*.

英名を「ロビン」(*Robin*)又「レッドブレスト」(*Redbreast*)といふ。頭より背に至るまで、體の上部全體は橄欖褐色にして、咽喉と胸と額とは、薔薇赤色であるが、産地に因りては、栗赤色のものもある。而してその他の體の下部は、暗色を帯びたる白色である。

六九六

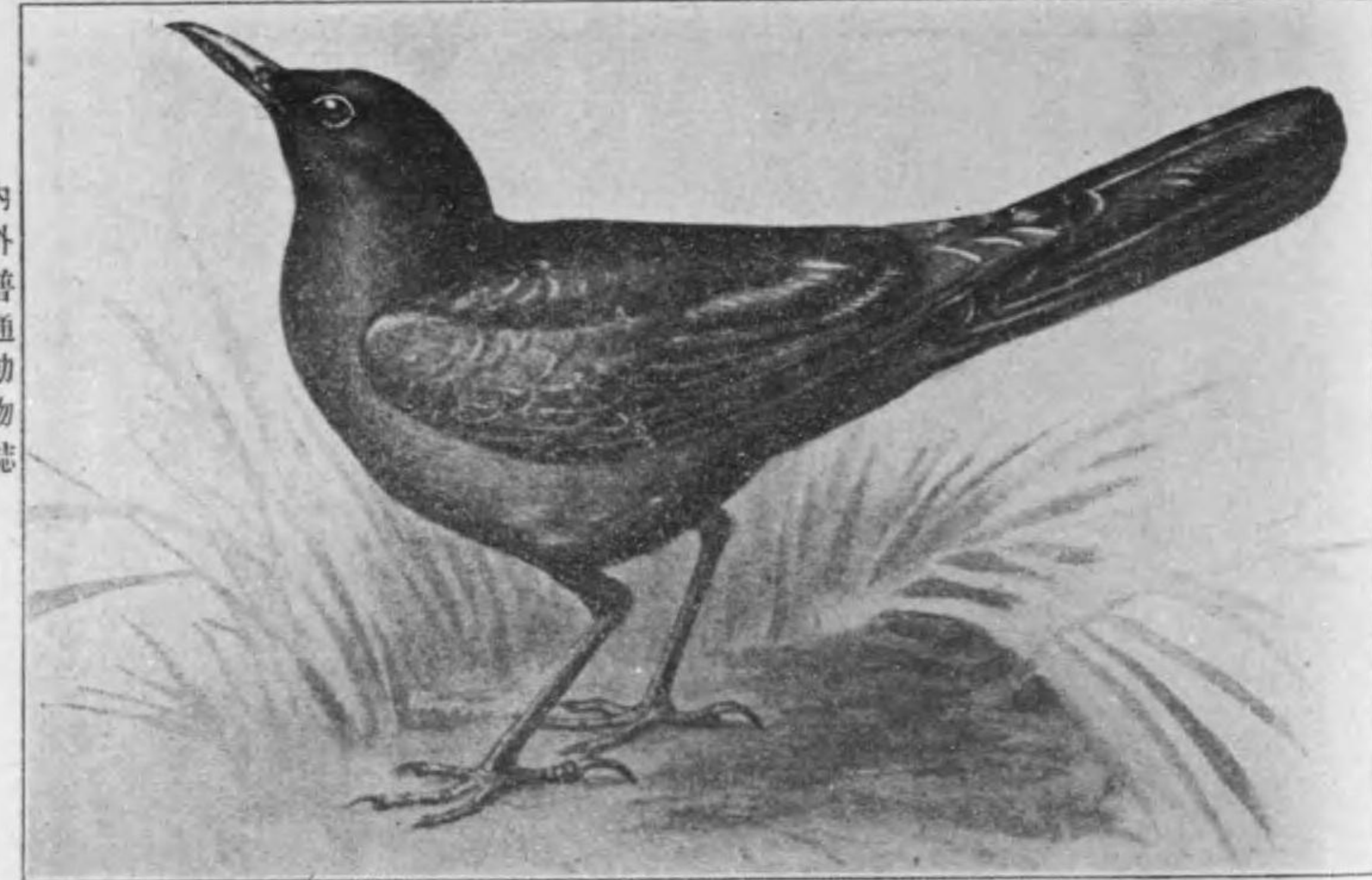
巢は、常に藪林の下、樹木の空洞中に置かる。外部は枯葉より成り、内部は苔、小根、毛、羽毛を以つて編んで居る。年に二又は三回産卵し、一産に常に五卵時としては七卵を産む。卵は鋪色の地に、帯黄橄欖褐色の斑紋を有するのである。



第二八八一圖 歐羅巴の駒鳥

蠕蟲、甲蟲類を、多量に食するを以つて、有益鳥である。歌調は美しく、且つ精巧なれも、雲雀の歌の如くに、秀優ではない。彼れは靜に坐りて、歌ふのである。また飼養すれば、よく人に馴れる鳥で、自由に、室の周圍を、跳び回るのである。

〔一一一〕 北亞米利加の駒鳥
Turdus migratorius, L.
 英名を「ロビン」(Robin)、「ロビン・レッド・ブレスト」(Robin-redbreast)といふ。大さは鶉位であつて、體の上部は黄灰色で、頭と尾とは黒く、體の下面は肉桂赤色である。これ



第二八八二圖 黒鳥 (From Birds Useful and Harmful)

六九七

は、北米にありて、花園に普通な鳥である。

〔一一二〕 黒鳥 (Blackbird)
Turdus merula, L.
 體の毛色は、一樣に黒色であるが、雄は第三年に至るまでは、黒色の羽毛を生ずることはないのである。また雄の嘴は、橙黄褐色にして、眼の周圍も、亦同色で、脚は黒味を帯びて居る。雌の羽毛は、暗褐色にして、願は白味を帯び、胸は見苦しき褐色にして、暗色の斑紋を有し、嘴と脚とは褐色である。

この鳥は、夏季には、歐洲の中部と、北部との山地、及び英國に棲息し、秋季に至れば、その大多數は、北米に移住し、又多くのものは、英國にて越冬するのである。秋季には、漿果、其他の果實を食すれども、主に蠕蟲、蛭、蠅、蠅、

牛其他昆蟲を食して、有益鳥である。其の蝸牛を食するは主に冬季にして、他の鵲科と同様に、殻をば嘴に咬へて、之を高め、堅き石に打ち付けて、殻を破りて後ち、その肉を食ふのである。

〔二四〕 小瑠璃 *Erithacus cyaneus*, (Pallas.)

英名を「シベリアンブルーロビン」(Siberian Blue Robin)又「ブルーアンドホワイトロビン」(Blue and White Robin)といふ。雄は體の上部藍色にして、體の下面は白い。雌は體の上部は橄欖褐色にして、上尾筒には、諸處に藍色の羽毛を有する。而して、體の下面は暗褐色である。夏季本邦の山地にて蕃殖し、冬は支那、北印度、マレー群島、ホルチオに渡るのがある。籠鳥としてよく鳴く鳥である。

〔二五〕 瑠璃鶉 又ゆきびたき(雄)又はんなり(雌)又ばかざり
又ばけしゆ (以上長門國阿武郡佐々並) *Tarsiger cyaneus* (Pallas.)

英名を「シベリアンブルーテイル」(Siberian Blue-tail)又「ロビンブルーテイル」(Robin Blue-tail)といふ。雄は體の上部は藍色にして、白き眉を有する。體の下部は白く、横腹は橙黄栗色である。雌には眉なく、體の上部は橄欖褐色で、横腹は橙黄色にして、胸を横ざりて、判然せざる幅廣き褐色帯がある。本邦の南部には、四時常に棲息し、山地に於て産



第 二 百 八 十 三 圖

卵し、冬季は平原に下るのである。而して北海道には、唯夏季來遊するのみである。又冬をば、支那及び臺灣にて、過ごすのである。

〔二六〕 ナイチンゲール
(Nightingale) Daulias luscina.

歐洲に産する鳥にして、雄の歌調は、或は優しく、或は悲しく、或は鼓舞刺激する所の妙音にして、歌の女王たる名に、背かざる鳴き聲を有し、古來より、歐羅巴人に、深き感動を與へた鳥である。

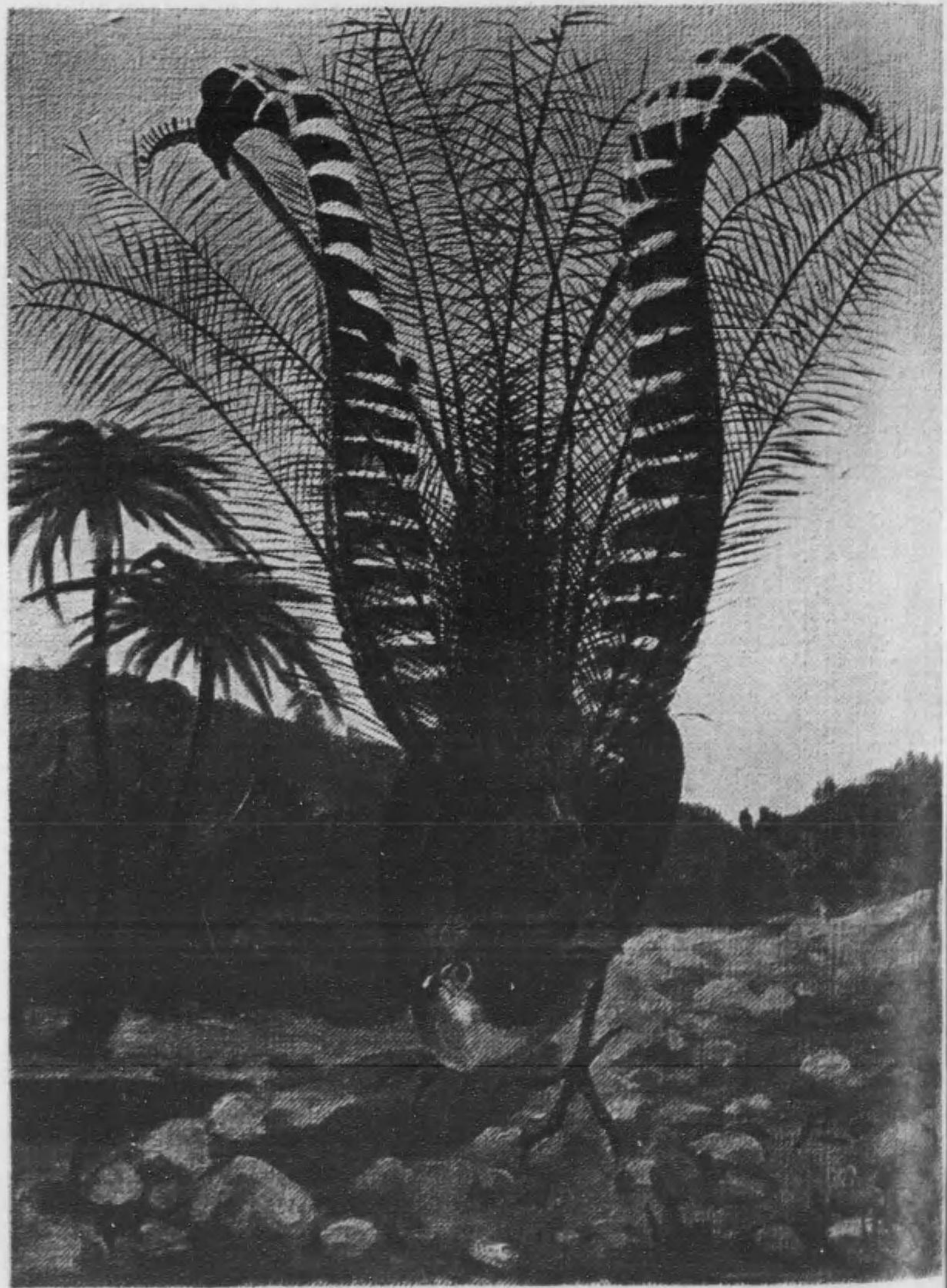
れよりは一層優美である。上部全體は、小豆色を帯びたる褐色にして、翼には、僅に光澤

を有するのみである。尾は稍長く、末端に至りて、少しく圓味を帯び、錆色である。胸部は灰白色にして、多少褐色を帯び、咽喉部と腹部とは帯灰白色である。眼は暗褐色にして、光澤あり。嘴は細く尖り、脚も亦細いのである。

叢林に於て、地面に近き所の、枝葉の繁れる所に、草葉、及び僅少の毛を編みて、巢を造り、その中へ、五、六個の卵を産む。卵殻は灰綠色にして、暗色を帯びたる赤褐色の斑紋と、斑條とを有する。此鳥が英國に渡り來るは、四月中旬頃にして、八月に至れば、幼鳥は移住をなせども、其際、成鳥は羽毛の交脱する時期なるを以つて、九月まで、英國に留るのである。食物は蠕蟲、鱗翅類の幼蟲、蛾、甲蟲、蠅、蟻の幼蟲、野生の果實、殊に接骨木屬なる「エルダー」(Elder)の漿果を食する。

〔一七〕 琴鳥科 (Menuridae)

英名を「ライヤー・バールド」(Lyre Bird)といふ。雄の尾翹の外側にある、左右一對のものは、古代の七絃琴狀をなせるを以て、英に「ライヤー・バールド」即ち七絃琴鳥の名がある。これには三種ありて、總べて、濠太利亞大陸の東部と、南部とに産するのである。大なる雉狀の鳥であつて、主に地上に棲み、飛ぶことは拙劣であるが、脚は甚だ強壯で、且つ強壯なる稍曲れる爪を有するを以つて、家鶏の如く、地を搔掻するのみならず、よく地上



琴鳥ノ雄

を走り、又跳躍することが出来る。一跳びに、地上一丈の高さに跳躍し得るのである。この點は、雉子の類に似て居る。而して叢藪内を走るときは、尾を水平に横へ、之を運ぶのである。

雄は、雌の歡心を得んが爲めに、その尾を立て、舞蹈し、また聲高きゴブ〜といふやうな音聲を發して、鳴くのである。雌の尾は小さく、雄の尾の如くに、七絃琴に似たる、二枚の長い翹を有することはない。

巢は、枝皮、葉より成り、その裡面には、蘚苔、纖維、及び自分の羽毛を以て、縁付けてある。而して巢には、屋根を有し、岩の出張り、岩石の罅隙、低い樹木の又、墜落せる丸太の間にありて、唯一産に一卵を産み、卵殻は紫褐色にして、暗色の斑紋と、斑條とを有す。この鳥は、巧妙に、他の動物などの音聲を真似るものにして、飼養すれば、よく馴れ、且つ蕃殖することが出来るのである。

〔一〕 琴鳥 *Menura superba*, Dav.

英名を「コンモンライヤー、バールド」(Common Lyre Bird)又は「スーパードライヤー、バールド」(Superb Lyre Bird)といふ。この鳥は、西暦千七百九十八年に、發見せられたものである。ニュー、サウス、ウエールズに産し、成長せる雄では、二尺七八寸である。羽毛は暗色

を帯びたる濃茶褐色にして、咽喉部は小豆色で、背部は紫灰色を帯びて居る。眼の周囲には羽毛なく鉛色である。尾にある二枚の七絃琴状の翹は、赤褐色にして、羽の幅廣き内側に於て、切り目を有し、これは半透明である。

〔一八〕 八色鶇科 (Pitidae)



形外の鶇色八 圖四十八百二第 (After Finn)

この科のものは、廣く東半球の温暖地方に分布するものにして、嘴は寧ろ強壯にして、尾と翼とは短く、跗蹠部の背面は、一様に滑らかである。主として昆虫を食し、又屋根ある巢を造るのである。常に、多くは地上に棲息し、また屢々樹木上に止るのである。而して地において、他の多くの地棲鳥類の如く、走ることをなさずして、迅速に跳躍するのである。この科のものは、英に「ピッタス」(Pittas) 又は「アント・スラッシュエス」(Ant-Thrushes) と呼ばれて居る。

〔一〕 八色鶇又朝鮮鶇又八色鳥又あかだんな Pita nympha, Temm. & Schl.

豊前英彦山、因幡對島にて、採集せられたることありといふ。

第五亞目 厚嘴類 (Conirostres)

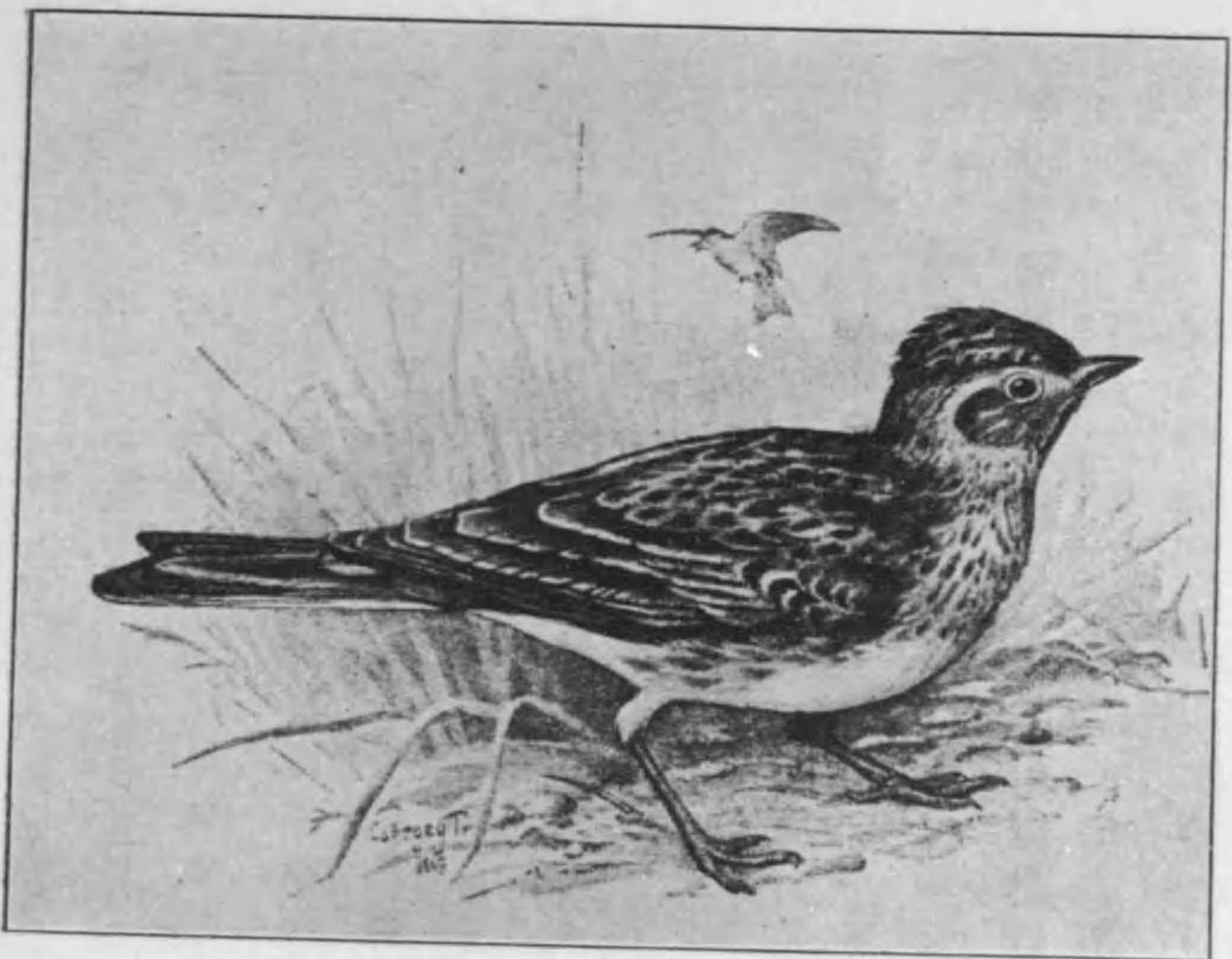
〔一〕 雲雀科 (Alaudidae)

この科のものは、皆小形にして、殆んど地球上到處に産する。而して大多數のものは、地上に棲息する。跗蹠部の前面と後面とは、若干の分離せる鱗片を有し、後趾の爪は長く、且つ通例は伸直である。嘴は角質圓錐形にして、その形貌は、種屬に因りて變化する。雌雄は殆んど同色なる、褐色にして、多少の斑條を有し、初生羽毛を有する雛は、斑點を有するのである。この科には約七十種を含んで居る。

〔一〕 雲雀又へばり (方言) 又へばる (方言) Alauda arvensis japonica, Temm. & Schl.

英名を「スモール・ジャパニース・スカイ・ラーク」(Small Japanese Sky-Lark) といふ。腹部は白色にして、頭部、背部及び胸部は、多少茶褐色にして、黒斑を具へて居る。

西藏、支那及び本邦は、この種の棲息地なるを以つて、終歲之を見れども、北海道には、唯夏季のみ、多く之を見るのみである。常に郊野に棲息し、海濱若くは河川の砂地に、巢を營み、四五卵を産む。卵には斑點を有し、凡そ十五日にして孵化するのである。蕃殖期



雀 雲 圖五十八百二第
(From Birds Useful and Harmful)

この鳥は、蠕蟲、チムシ、其他の昆蟲の幼蟲を食ひて、有益であるが、春季は嫩草を食ひ

に於ては雄は高く空中に飛翔しながら、愉快なる歌調を奏して鳴く。その飛ぶや、螺旋狀に進行し、重き體をば跳ばせながら、高所に運び行くが如くに見へ、恰も水蒸氣が上騰するが如くに、體を燃りて飛ぶのである。彼れは九天の奥にも達するか、の如く、高く飛んで、その姿は遂に見へず、唯その鳴聲のみ聞ゆるのである。英詩に「質樸なる汝は、謙卑なる住家に棲めども、汝の朝の歌は、九天にまで近く昇るよ」とあるは、よくこの状態を表はしたものである。實に彼れの聲は「告天子」の名稱に、背かざるのである。

又秋季には穀實を啄むのである。

(一) 千鳥雲雀又大雲雀 *Alauda arvensis pekinensis*, Swinh.

英名を「ラージジャパニーススカイラーク」(Large Japanese Sky-Lark)といふ。千鳥及びカムチャツカに産し、形状羽色は、毫も前種と異らざれども、唯體軀は、一層大形なるが、異なる所である。

(二) 濱雲雀 *Alauda alpestris*, Linn.

英名を「シラアーラーク」(ShoreLark)といふ。額、頬及び上胸部は黒色であつて、頭上の左右に、耳狀に起立せる總狀の羽がある。この種は、東西兩半球の極地の凍原(Tundra)にて蕃殖し、千鳥列島に産するのである。

(三) 雀科 (Fringillidae)

この科のものは、濠太利亞大陸を除きて、世界到る處に産し、約六百種を含んで居る。而して殊に北地に棲んで居て、多くは「渡り」をなすのである。小形の鳥にして、大なる者でも、輪位を越ゆることはない。嘴は短く、圓錐形にして、缺刻なく、口腔は、口角に於て下方に向ひて居る。雌雄の羽毛は、一般に異り、翼は屢々長いものがある。尾は常に中庸の長さにして、且つ稍又狀をなして居る。幼鳥は常に斑條を有し、雄は屢々季節的の變化

を呈するのである。

春季及び夏季に於ては、本科の食物は、主として昆虫類及びその幼蟲より成れども、植物の芽、葉、花を啄み、園藝家に嫌はれるのである。然しながら、その雛を養ふに當りては、鱗翅類の幼蟲、及び其他の昆蟲を以つてするを以つて、此科の大多数のものは、有益鳥として認めらるべきである。また氣候が寒冷なる時には、主として、有害雜草の種子を啄みて、間接に農家に益を與ふのである。その種子を食するに當りては、呑む前に、その皮を剥いで食するのである。巢は開いて居つて、卵は常に斑紋を有するのである。



第二百八十六部

〔一〕 蠟嘴 又しうめ(米澤)又まめざり(上總長生郡方言)

英名を「イースターン、コンモン、ハウフィンチ」(Eastern Common Hawfinch)といふ。嘴は肥大にして、蠟色をなし、且つ強壯である。頭は肥大し、尾は短い。全身は灰色である。頭、咽喉、肩は黒色にして、翼の羽毛には、一帯の白色部を有する。最内部にある手翹のあるものは、内羽の端に於て、鋸齒状をなし、恰も剪刀を以つて切り取たるが如く見ゆる。この鳥は、常に本邦に棲息し、その蕃殖區域は、本邦より南部西比利亞を経て、歐洲に擴がつて居る。

居る。

歐洲に於て、この種の食物につき調査せられたる所に據れば、好んで「チェリー」(Cherry)の果實を食ふのである。先づ之をば、下嘴中に入れ、次に上嘴をば壓下するときは、



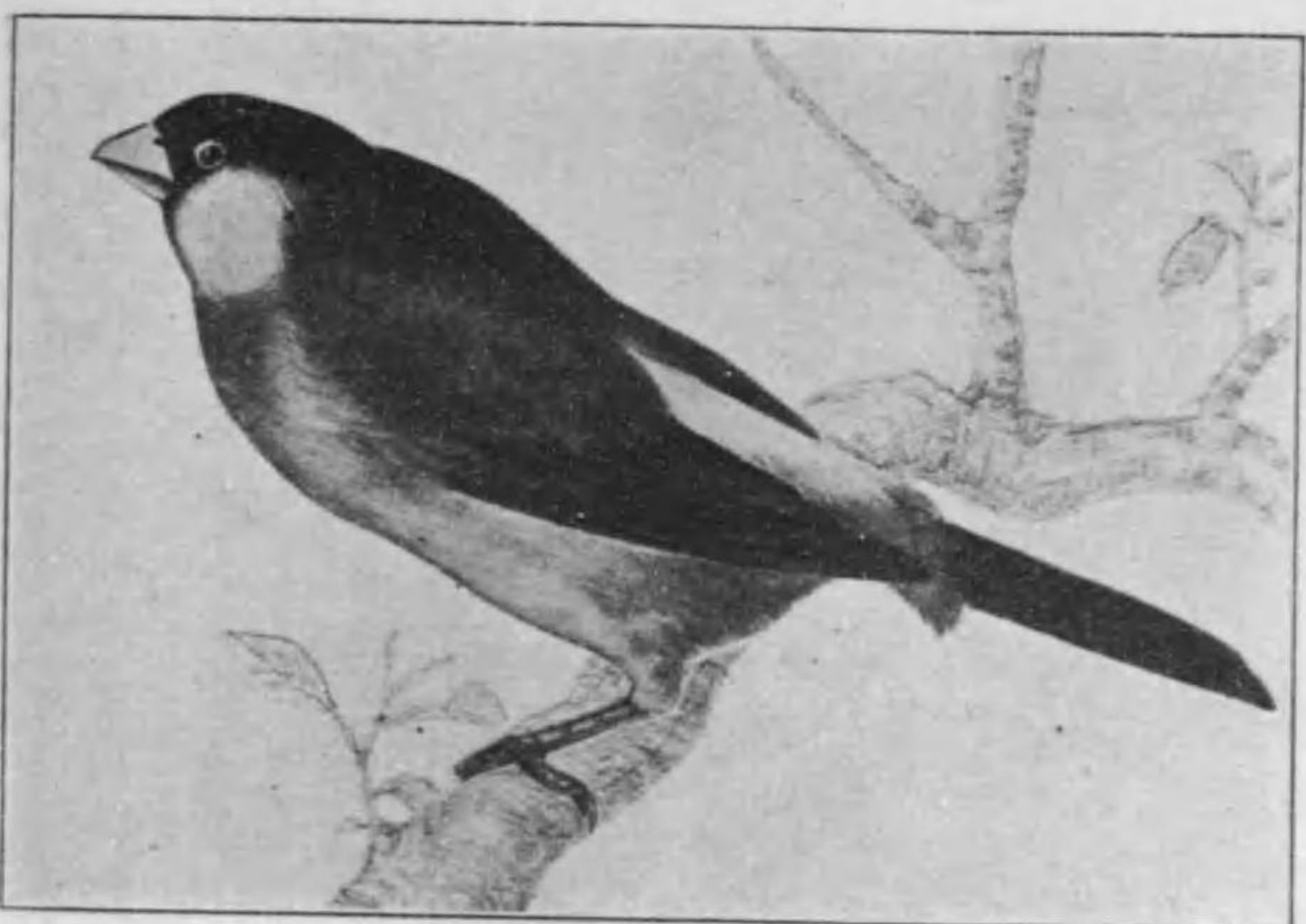
第二百八十七圖

吾人の長靴の踵を以つて、やうやく碎き得る位の、果實の内部の核をも、容易に之を碎くのである。而して、春季、核果に乏しき時には、幼き葉等を食するのである。雛は主として、鱗翅類の幼蟲に因りて養はれども、間もなく、彼れは豌豆を食するのである。英國にては、蠟嘴は、樺木科の「カーピヌス」(Carpinus)、カローリニアナ(Carpinus Caroliniana)其他の樹木の種子を食するのである。

巢は果樹中、若くは林地に於ける廣濶なる地にありて、地上凡そ七尺の高所にある。

一年に一番子のみを産めども、巢を奪はるゝときは、また他所に巢を造るのである。一産に四乃至六卵を産み卵は淡綠色にして、微かに斑紋を有するのである。

七〇八



第 二 百 八 十 八 圖 鳥 類

〔二〕 桑鴈いかるが又いかるが又まめまはし

又まめごり又まめわり又まめたたき(富士山麓、山中、長池の方)又梧桐(清國)

Eophona personata (T. & S.)

英名を「ジャバニース、ハウフィンチ」(Japanese

Hawfinch)といふ。前種の如き太き嘴を有し、頭頂

と尾とは黒く、全身は灰色である。この種は、本邦

に棲息し、東部西比利亞な

るウスリ河口附近の地方

にて蕃殖し、冬は南支那に

渡來するのである。支那に

ては之を馴して、藝を教へ

込むのである。



第 二 百 八 十 九 圖 鳥 類

エイチ、フウバー氏(H. Hooper)氏に據れば、この類は「ホツブ」に大害をなし、昆蟲を食することは稀れであるといふ。

〔三〕 交喙 *Toxia curvirostra curvirostra*, Linn.

英名を「コンモン、クロツスビル」(Common Crossbill)といふ。上嘴は下方に、下嘴は上方に曲りて、互に交叉し、その先端は鋭るゝ。而して、嘴は時としては右に、時としては左に、交叉するのである。雄は頭背が赤色にして、黒褐色を交へて居る。上尾筒と咽喉と、胸部とは赤く、風切及び尾は、黒褐色である。雌は頭背部は灰褐色に、黄色を交へて居る。



第 二 百 九 十 圖 鳥 類

この鳥は、本邦山地の松林にて蕃殖する。外歐羅巴及び亞細亞の極地、愛蘭及びスコットランドよりカムチャツカに亘りて、蕃殖するのである。常にその交叉せる嘴を用ひて、松、樅等の果實の殻を剥ぎ、その中の種子を食ふ。而して一噛みで、皮殻を剥ぎ能はざる種子をば樹下に墜落せしむるを以つて、非常に多くの種子を、無駄に費すのである。その交叉せる嘴は、獨り、松等の果實の殻を剥ぐに適するのみならず、脚の外に、嘴を用ひて、枝より枝に攀縁することは、恰も鸚鵡の如しである。而して幼鳥の嘴は、交叉することなく、また雄は第一年には、未だ美なる深紅色の羽毛が、現出しないの

である。巢は乾ける草、蘚苔及び毛より成れる杯状の構造にして、小枝の上に置かれて居る。而して卵は一産に三乃至五卵である。色は帯灰白色にして、赤褐色の斑點を有し、母鳥は絶へず、その上に坐りて、孵化の勢に任ずるのである。

〔四〕 小笠原まじこ *Channoproctus ferreirostris* (Vigors.)

英名を「ボニンングロスビーク」(Bonin Grosbeak)といふ。嘴は非常に太い。雌は體の上下兩面は褐色にして、雄は頭上と體の下部に深紅色の斑紋を有する。小笠原島に産するのである。

〔五〕 ぎんざんまじこ *Pinicola enucleator* (Linn.)

英名を「パイングロスビーク」(Pine-Grosbeak)といふ。嘴は稍彎曲し、翼長は約三寸八分位である。毛色は、年齢及び雌雄に因りて異れども、大雨覆と中雨覆との先端は蒼白をなし、これらが相集りて、二個の横條を呈するのである。この種はラブランドよりカムチャツカの松林にて蕃殖し、秋には南方に移住し、北海道及び千島に産するのである。

〔六〕 大まじこ *Carpodacus rosens* (Pall.)

英名を「ローズフィンチ」(Rose-Finch)といふ。甚だ輝ける鳥にして、翼長は約三寸許である。額及び咽喉には、眞珠光澤を帯べる白色の羽毛を生ずることは、ベニマシコに似

たれども、尾が翼より非常に短きことは、彼れと異なる點である。冬季稀れに本邦に渡來し、また支那に渡るのである。而してその蕃殖地は、東部西比利亞である。

〔七〕 ベにまじこ又さるまじこ *Carpodacus*

sanguinolentus (T. & S.)

英名を「ジャパニースローズフィンチ」(Japanese Rose-finch)といふ。翼長は約二寸三分である。而して翼を横ざりて、二個の甚だ顯著なる白色の横帶を有し、前頭と咽喉とには、眞珠白色の羽毛を有する。本邦に普通にして、また滿州、東部西比利亞、朝鮮にも産するのである。

〔八〕 金翅雀 *Chrysomitris spinus* (Linn.)

英名を「シスキン」(Siskin)といふ。小形の鳥にして、翼長は約二寸三分である。雄は頭上は黒く、頬より胸にかけて、黄色を帯び、翼は黒褐色にして、次列風切の基部は黄色である。雌は、頭は灰褐色を帯び、全體の黄色味は、淡いのである。本州の中央部にては、秋季と冬季とに、大群をなして渡來する。而してその蕃殖地は、下アムールであつて、冬は南部支那にも渡るのである。

〔九〕 鴉子鳥又燕雀兒 *Fringilla montifringilla*, Linn.

英名を「ブランブリング」(Brambling)といふ。翼長は凡そ二寸八分である。喉部と胸とは栗色を帯びたる浅黄色にして、雄にては、頭は黒く、腰を除ける背部は黒い。腰は雌雄共に白色であつて、雌は頭と背の他の部分は、深褐色である。この種は、冬季本邦に渡來し、その蕃殖地はラブランドよりカムチャツカに亘れる極地である。

〔一〇〕 くにひは *Acanthis linaria holboellii* (Brehm.)

英名を「ミアリー、レッドポール」(Mealy Redpole)といふ。翼長は約二寸六分である。雄は額と頭部の冠羽の前半は、深紅色にして、胸部にも紅色の白斑點を有することがある。また咽喉部は黒色である。背は白色と黒褐色とを交へ、腹部は黒い。而して雌の頭部は、淡紅色にして、背部には、少しく茶褐色を交ゆるのである。この種は、極地の鳥にして、冬季本邦に渡來するのである。

〔一一〕 こかはらひは *Fringilla kawaraha minor*, T. & S.

英名を「チャイニース、グリーン、フィンチ」(Chinese Greenfinch)といふ。翼長は二寸六分乃至二寸八分である。雄の冠羽は、灰色なれども、雌にては、帯灰褐色である。雄の背は暗褐色にして黄色を帯べども、雌にては、背より腹にかけて、黄色を帯ぶることが少い。雄の腕蹠の基部は、美なる黄色を呈し、下尾筒も黄色なれども、雌にては、白色である。この種

は、我國到る處に産し、北海道及び支那には甚だ多い。又蒙古の北東部にも産するのである。エイチ、フウバー氏に據れば、この鳥は、雜草の果實を啄み、その中にある種子を食するを以て、益鳥なりといふ。

〔一二〕 おはかはらひは又ばたがはら(米譯) *Fringilla kawaraha major*, T. & S.

英名を「ジャバニース、グリーン、フィンチ」(Japanese Greenfinch)といふ。前種よりも大きく、翼長は二寸七分乃至二寸八分許である。然し腕蹠の基部は、前種の如く黄色である。雄の冠羽は、褐色なれども、雌の冠羽は、濃褐色である。この種は、本邦には稀れに渡來する鳥である。

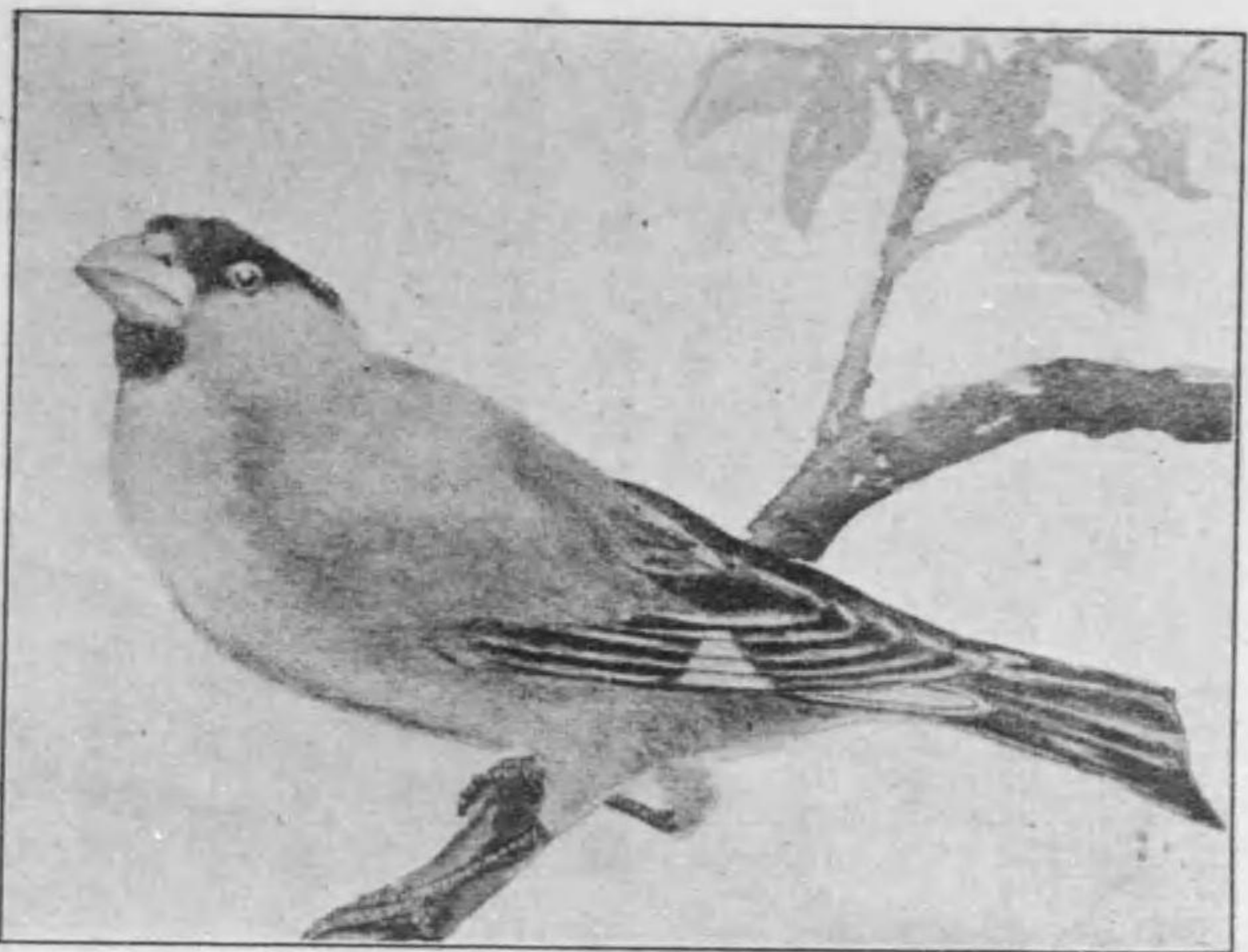
〔一三〕 小笠原鳥かはらひは *Fringilla kitlitzii*, Seebohm.

英名を「ボーン、アイランド、グリーン、フィンチ」(Bonin-Island Greenfinch)といふ。體軀の大きさは、前種位である。然し頭上と頸背とは、橄欖色であつて、尾羽の基部の黄色は、少くはない。小笠原島に産する鳥である。

〔一四〕 鶯 *Pyrhula griseiventris*, Lafres.

英名を「オリエンタル、ブルフィンチ」(Oriental Bullfinch)といふ。翼長は凡そ二寸八分に

して、嘴は太くして短く、上嘴の先端は、少しく彎曲する。雄は頭は黒く、頬と咽喉部とは、

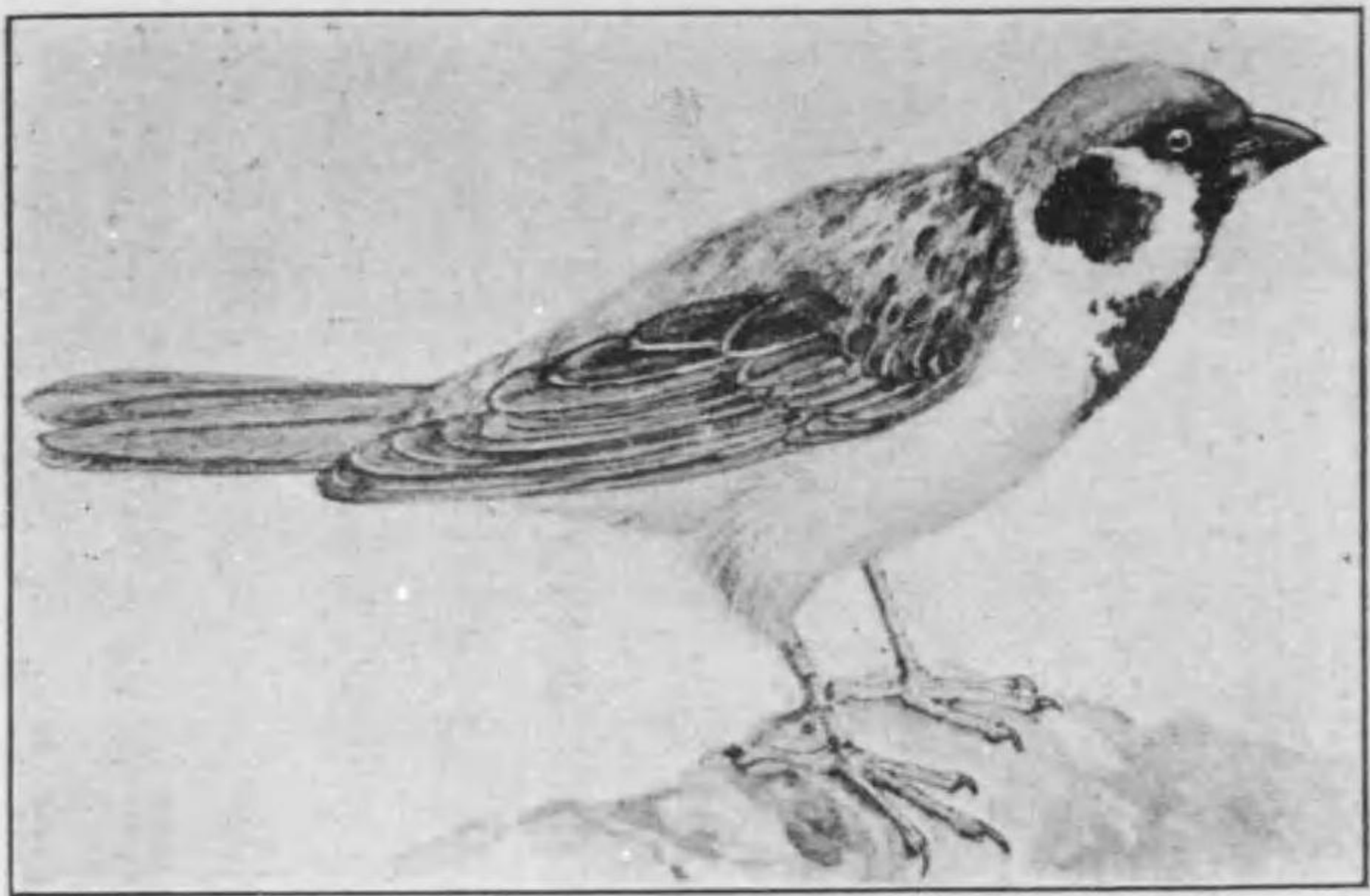


又つゞめ(方言鳥) Passer montanus (Linn.)

淡紅色である。又胸腹は淡灰であつて、時に紅色を交ゆるものがある。而して上下尾筒は白く、尾は黒い。雌は頬と咽喉部とは灰褐色にして、背と胸腹とは雄よりも褐色を帯びて居る。此種は、常に本邦に棲息する。動物學雜誌に據れば、岡山縣赤磐郡、可真村、珂磨實業補習學校にて、この鳥の爲めに、果樹の花蕾や、花を傷められたる事實がある。其花を好むやうである。は、桃、梨、苹であつて就中、桃を好むやうである。またエイチフーカー氏に據れば、鶯の類は、果蕾殊にグースベリーを害すること甚しいといふことである。

〔一五〕すゞめ(雀)又つゞめ(方言鳥)

英名を「トリ、スバロー」(Tree Sparrow)といふ。本邦各地より、英國に至るまで、舊北地



雀 圖二十九百二第

方に産するものである。嘴は短く太く、圓錐形をなす。頭頂と頸背とは、栗褐色にして、頭の兩側には、白斑を有し、その中央には、大なる黒斑を有するのである。雌は雄に似たれども、色は鈍いのである。雀は、一年に三番子までも産むのである。而して雛を育つる間は、鱗翅類の幼蟲、蚜蟲、他の昆蟲を多く捕へるのであるが、秋季、粟、稻等の穀粒を啄み農家に損害を與ふるのである。明治三十八年の中央新聞(第三千七百四十七號)に千葉縣千葉郡都村の長島某といふ人、雀捕獲の件につき、縣農會へ、建議したことがある。曰く、

『雀一羽の食料は、一ヶ月米二合五勺として、六ヶ月一升五合となる。之を一町村、一ヶ年二千羽宛の雀を捕るとして、千葉郡内十八ヶ町に積算すれば、三萬六千羽となる。若し、この雀を現在

のまゝにして置けば、其の被害石数は、五百四十石となり、若し縣下を通じて、此の比例で行けば、三百四十八ヶ町村で、六十九萬六千羽、此食料が、一萬四百四十石にて、代金に積れば、十一萬四千八百四十圓となる割合なれば、雀を捕ると捕らざるとは、收穫の上此の言はれに、これだけの差が生ずると云ふ譯合ゆえ、之を捕るに、一羽五厘宛の賞を與へるとし、孰も捕らざるとは、一羽五厘宛の賞を與へるとし、何れも捕らざるとは、一羽五厘宛の賞を與へるとし、此の言はれに、これだけの差が生ずると云ふ譯合ゆえ、之を捕るに、一羽五厘宛の賞を與へるとし、孰も捕らざるとは、一羽五厘宛の賞を與へるとし、何れも捕らざるとは、一羽五厘宛の賞を與へるとし、

〔一六〕 入内雀又みよないすゞめ(米澤方言)
英名をラツセツトスバロー (Russet Sparrow) といふ。雄の頭頂と尾筒部とは、栗赤色

なれども、雌にては褐色である。咽喉部は、雄にては黒く、雌にては、眼の周圍より頸背に至るまで、淺黄色の部分がある。この種は本邦に棲息し、北海道に於ても稍普通に見らるゝのである。この種の分布は、甚だ制限せられ、本邦内地の外では、臺灣及び中部支那の山地に於て、發見せらるゝのみである。米澤に於ては、この種は、稻の穂に、大害を與ふることありといふ。

〔一七〕 ほほあか又つちひばり(富士山麓長池方言) Emberiza fucata, Pall.
英名をグレー、ヘツデッド、バンチング (Grey-headed Bunting) といふ。體の大きさは、イカ

ルよりは小さい。體は灰褐色を帯び、翼と尾とは褐色にして、腹部と尾羽の下面は白く、頬部に圓き褐色の斑紋を有する。咽喉は、雌にては淺黄色なれども、雄にては白色にして、この部には、顯著なる黒條に由りて圍まれて居る。この種は、冬季本邦に渡來し、その蕃殖期に際しては、東部西比利亞及び北部支那にまで、廣く棲息し、冬は南部支那、バルマ及び印度に渡るのである。

〔一八〕 黄道眉(八丈島) 又せつこう(富士山麓長池、船津の方言)
又やつこう(富士山麓長池の方言) Emberiza ciopsis, Bonaparte.

英名を「ボナバーテス、ヂャバニース、バンチング」(Bonaparte's Japanese Bunting) といふ。雄は、頬部に白色の羽毛を有すれども、雌にはこれなく、反つて茶褐色の羽毛を生ずる。背部は、帯黒赤褐色にして、腹部は淡赤褐色を帯びて、黒き斑紋がある。雄にては、耳覆は殆んど黒く、雌にては咽喉部及び下尾筒は、淺黄色の斑紋を有するのである。

この種は、本邦に特有の鳥にして、山よりは田畑に多く棲み、雜木若くは地上に降り、穀類を食する。雄はその鳴聲、よきを以て、籠鳥として飼はるゝのである。

〔一九〕 みやまほうじろ又黄眉子(清國北京) Emberiza elegans, Temm.
英名を「テンミンツクス、イエロー、ブロード、バンチング」(Temminck's Yellow-browed Bunting)

ting)といふ。兩眼上に顯著なる黄色の條紋を有する。この種は、本邦にはあまり普通に見受くる鳥ではない。然して冬は支那に行き、夏季に於てのみ、滿洲及び黒龍江の溪谷に棲む。その音聲は佳いのである。

〔二〇〕 うきぼうじろ *Emberiza nivalis*, Linn.

英名を「スノウ・パンチング」(Snow-Bunting)又「スノウ・フレイク」(Snowflake)といふ。背及び翼の或る部分は黒く、諸處に赤味を帯びて居る。頭と他の體部は白い。この種は、冬季稀れに北海道及び千島に來るのであるが、冬には大群をなして、極地より英國に渡り來り、高山に棲息する。巢は常に石間の罅隙又は岩の下にありて、鹿の毛及び雷鳥類の羽毛で編まれてある。卵は帶緑白色にして、赤と紫との斑紋を有する。飛翔する際に、よき音調で歌ふ。而して多くの他の鳥と異りて、雌も雄の如く、よく歌ふのである。

〔二一〕 蒿雀又やぶじ(米澤にて雄をいふ)又こーじ(米澤にて雌をいふ)

Emberiza personata, Temm.

英名を「テンミンクス・ジャパニース・パンチング」(Temminck's Japanese Bunting)といふ。體の大きさは雀大にして、體軀は稍細く、尾も亦細長である。翼は小豆色を帯びたる褐色にして、咽喉と胸とは黄色で、雌にては、この部に褐色の條紋を有するのである。この種

は、本邦に特有のものにして、本邦の南部にては、四時棲息すれども、北海道には、夏季渡り行くのみである。巢は地上にあるか、或は草叢にありて、枯草、軟根、馬毛にて造られてある。その鳴聲佳なるを以つて、籠鳥として愛玩せられて居る。

〔二二〕 からあをじ *Emberiza spodocephala*, Pall.

英名を「ブラック・フェースド・パンチング」(Black-faced Bunting)といふ。雄は咽喉と胸とは、一様に橄欖灰色である。雌は、外側の羽毛に、白色部が多い。この種は、エニセイ溪谷より、西比利亞にて蕃殖し、冬をば、東部西比利亞及び支那にて越すのである。

〔二三〕 しなをあをじ *Emberiza aureola*, Pall.

英名を「イエロー・ブレストッド・パンチング」(Yellow-breasted Bunting)といふ。雄の背部は、一様に栗色である。雌は、體の下部は黄色にして、上部全體に、一様に條紋を有する。この種は、夏季に於て、折々、北海道にて發見せられて居るが、その分布は、北歐、洲、亞細亞に亘り、冬は支那及びバルマに渡るのである。

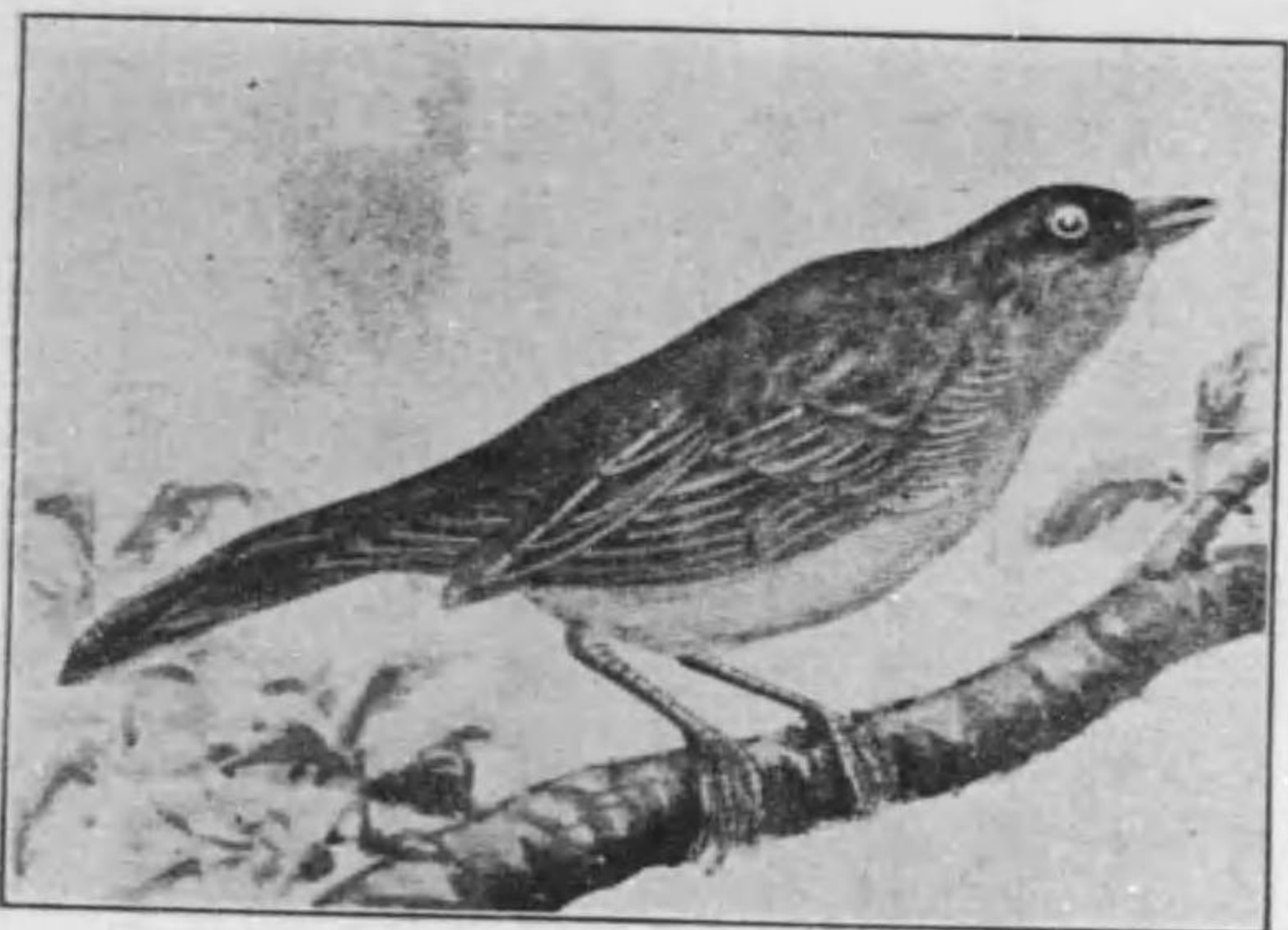
〔二四〕 くろじ *Emberiza variabilis*, Temm.

英名を「グレイ・バンチング」(Grey Bunting)といふ。體軀はアヲジに似たれども、雌雄共に、尾翼には白色部を有しない。而して全身淡黒色である。常に本邦の南部に棲息する。

〔二一五〕のこり Emberiza sulphurata, T. & S.

英名を「シーボルズバンチング」(Siebold's Bunting)といふ。願咽喉胸は黄色にして、條紋

を有しない。また額冠羽、頸背は橄欖褐色にして、條紋がない。尤も雌の胸部には、條斑を有するのである。北海道には、夏季に於て、稀に遊歴すれども、本邦の南部に於ては、普通に見る鳥である。而して秋季は、本邦の内地を去りて、臺灣及び南部支那に於て、冬を過すのである。巢は草より成り、小藪の叉木に置き、その中には、馬毛及び蘚苔を敷いてある。



第二九三三圖のこりの

う(上同) Emberiza rufica, Pall.

英名を「ラスチックバンチング」(Rustic Bunting)といふ。胸と横腹とは、濃栗色をなせる

〔二一六〕かしらだか又たほうじろ(上總郡方)又あがり(米澤方言)又このはざり(羽前伊達地方方言)又のやま(上総長生郡方言)又たすめ(上同)又きつちん(上同)又かがんて

幅廣き條がある。北海道にて蕃殖し、冬季は、本邦の南部に來り、冬は支那に渡るのである。

〔二一七〕時辰雀 Pyrhula canaria, L.

英名を「カナリー」(Canary)といふ。カナリー島及びマデイラ島には、夥しく棲んで居る。今は、歐米諸國より、本邦に至るまで、世界殆んど到る處として、飼養せぬ所はない位である。野生のものは、體長四寸五六分位で、羽色は灰褐色にして、稍輝いた色彩を有すれども、家養のものにありては、種々の變化がある。通例は黄色にして、他に黒斑、褐斑の二種がある。この鳥は十六世紀頃に、始めて伊太利にて飼養せられ、それより歐洲全部に擴り、その間に、種々これと近縁ある他種の鳥と、雜交させて、變種を拵らへたものであるから、羽毛の色、體の大きさ、形狀、其他鳴聲も、野生の原種とは、異つて來たものである。野生のカナリヤは、一夫一妻主義であるが、籠鳥では、一夫多妻である。この鳥は、甚だ蕃殖力に富み、一年に三四回位は卵を産み、一産に六卵許を産む。この鳥は、他の鳥の鳴聲を、眞似ることが上手である。

〔二一〕金腹科 (Ploceidae)

この科のものは、亞弗利加、東印度、濠太利亞の如き、東半球の溫暖地方に産する鳥に

して、嘴と脚とは、雀科のものよりは、強壯で、翼も亦短い。鼻孔は裸出して、嘴峰に近く、嘴の基部に接近して位する。巢は巾著状をなし、常に被覆せられ、且つ屢々懸垂して居る。其性雀科のものよりは、一層群居するを好み、雄は多くの場合に於ては、蕃殖時期の後に、著しく羽毛を變化するのである。即ち雄の有する、黒色を交ゆる赤若くは黄色の華

美なる羽毛は、雌と同様なる條紋ある褐色若くは橄欖綠色の羽毛に變化するのである。

(一) 印度織布鳥 Indian Weaver Bird *ploceus baya*

印度及び亞細亞の南部に産する雀狀の鳥にして、蕃殖期に於ける雄



圖二百二十九 印度織布鳥の巢 (After Protheroe)

は、頭上に輝ける黄色の帽子狀の羽毛を有し、胸も亦同様な色彩である。雌雄協力して巢を造り、一羽は内側に、一羽は外側にありて、働くのである。彼等は、禾本の葉より、長い扁平なる纖維を剥ぎ取り、之をば巢に運び來り、一羽のものは、外部より、之をば内方へ押し入れ、内にある雌は、之を引き入れて、奇妙に編み合はせて、懸垂せる巢となし、一側

の下に、入口を設くるのである。巢は屢々繩狀に伸長せるものがある。

(二) マダガスカル織布鳥(假稱) *Foudia madagascariensis*.

蕃殖期に於ける雄の羽毛は、大部分は輝ける深紅色である。

(三) 群生織布鳥(假稱) *Philaeterus socius*.

英名を「ソシアブル、ウイバー、バード」(Sociable Weaver Bird) といふ。南亞弗利加に産する。この種の百乃至三百羽は、結合して大木の枝を撰びて、團體的の巢を造るのである。その材料は、草を用ひて編みたるものにして、巢の中には、多くの室を有し、凡ての室は、傾斜せる屋根にて被はれ、以つて雨水の侵入するを防ぐのである。また團體の鳥の数が殖ゆる毎に、年々巢をば大きくするのである。この巢は天蓋狀をなし、その檐は相互に向き合つて集りたる、夥多の巢を以て、完全に被はれて居る。

(四) 文鳥 *Munia oryzivora*.

英名を「ジャバ、スパロー」(Java Sparrow) といふ。東印度の原産にして、籠鳥として飼養せらるゝことは、人のよく知る通りである。體形は鶯に似て、嘴は圓錐形にして、至つて太く、その色は、脚と同じく紅色である。頭頂は黒く、頬は白く、喉も亦白く、この部には、黒色部を交へて居る。尾羽は黒く、腹は淡紅色を帯び、他の體部は、灰色である。白文鳥は、本

邦にて始めて造り出したものであるが、眼の周囲が黄色味を帯び、體の毛色は純白色である。

第四目 鳩類 (Columbinae)

鳩類は、鳴禽類と鶉類との中間に位するものである。嘴と胸骨と、喉嚨との如き解剖上の構造は、鶉類に似たれども、その優美なる形貌及び習性は、反つて鳴禽類に似て居る。體は小さく、嘴は短く、且つ柔軟にして唯先端に於てのみ硬く、鼻孔は膨起せる肉質の鱗片を以て被はれて居る。翼は長く尖り、飛翔することは極めて巧妙且つ迅速である。尾は弱く且つ圓味を帯び、常に十二枚の尾翹を有すれども、稀には十四枚若くは十六枚を有するものがある。羽毛は多くの者では柔軟且つ美麗にして、雌雄に因りて、著しく羽毛の相違を見ることはない。脚は短く赤くして、三趾は前向し、一趾は後向する。而して前向せる三趾は基部に於て分離するものと又その中の内趾が後方に向きて、中趾と外趾の基部が膜に因りて連結するものもある。後向せる趾はよく發育して地に着く。而して脚の側面と後面とには、六角形の鱗片を以て被はれ、通常その上端

に、羽毛を密生すれども、時には全く之を有せざるものがある。脚の構造は、永く迅速に歩行することに、適せないのである。

この類は一對の喉嚨を具へ、蕃殖期に於ては、雌雄共に、その内面は、腺質に變化し、乳狀液を分泌し、以つて半ば消化せる食物を濡し、幼鳥を養ふに適する。一日に鳩は、自己の體量以上の食餌を攝取し得るのである。その水を飲む方法は、他の鳥類とは異り、嘴をば水中に没し、十分に渴を治するまで、飲むにあらざれば、之を水中より取り出すことは、ないのである。

鳩類は、兩極地方を除き、到る處に産し、絶島にも亦棲息する。多くは熱帶若くは温暖地の鳥にして、本邦産の大多數のものは、熱帶種である。而して本科には、約五百種以上を含む。北地に棲むものは、移住をなし、又或者は、短距離に於てのみ、移住するものがある。又或者は、一地方に常住のものもある。林地に於て、雌雄對をなして棲むか、又は群居し、種子、穀粒、漿果、昆蟲等を食する。雌雄は、一生涯連添ふ。巢はその構造極めて簡單にして、小枝若くは草莖より成り、被ひはなく、巢の口は開いた儘であつて、常に樹上若くは叢林に置かれ、時には、地上若くは樹木、岩石或は建物の穴に産むことがある。年二回産卵し、毎回二卵を産めども、稀れに三卵を産むことがある。卵は白く、稀に少しく着色を

帯び、且つ光澤に富んで、斑紋はないのである。雌雄共に、孵化の勢に服し、雌が食物を探りに出懸けるときは、雄は雌に代りて、卵を温めるのである。卵は二週乃至四週にして、孵化して雛となる。

A 雛は、長き茸毛状の綿毛を生ずるか、若くは裸にして、眼は見へず、誠に哀れむべき状態にあるを以つて、永く両親に因りて、養はれるのである。

鳩類は、食用として美味なるものあれども、耕地を荒らして、農業上有害となる場合がある。然しながら、その主として、果實を食するものは、害をなすことなく、果實の種子は消化せられずに、排泄せらるゝを以つて、反つて、植物の散布を助くる利益がある。然るに、種子を食する小形の鳩では、非常に雑草の種子を、破壊する利益がある。

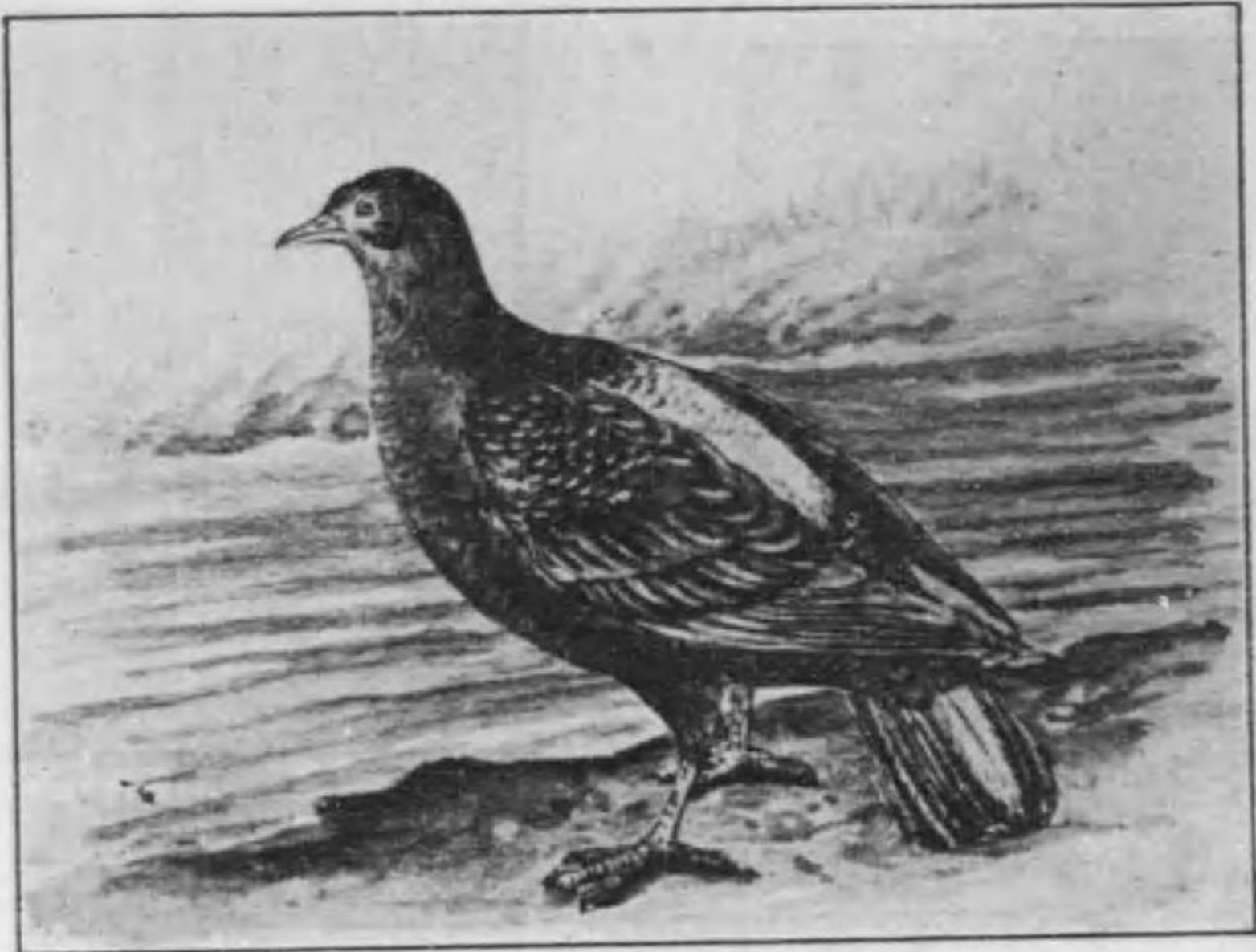
鳩の類は、鴿を除き、皆四月十六日より十月十四日まで(北海道に於ては九月十四日まで)、捕獲するを禁せられて居る。前にも述べたる如く、鳩類は、作物を害すれども、狩獵家の好んで射撃するものなるが故に、その種の絶滅を防ぐ爲めに、法令を以つて保護せられて居るのである。

(一) 河原鳩科 (Columbidae).

(一) 河原鳩又野鴿 *Columba intermedia*, Stickl. = *Columba livia* Brisson.

英名を「ブルー・ロック・ピジョン」(Blue Rock Pigeon)といふ。暗黒色の鳥にして、頸と上胸部とは、綠色に紫色の光澤を有し、尾筒部は白く、翼には二個の黒色の横帯を有する。

この種は、主として海岸の巖窟に群棲するものに



第百二十九圖 第三十九島の岩窟に多く棲息せしが、今はかその跡を絶つたのである。然し他の地方の沿岸



第百二十九圖 鳩胸鳩

には、尙往々その群を見ることありといふ。この鳥は、歐洲の大部分、北亞弗利加、波斯、印度より、本邦に至るまでの海岸に産するのである。鴿は、この鳩より飼養した變種である。



トツピタ 圖九十九百二第



ンピコヤシ 圖八十九百二第



ンナ 圖一百三第



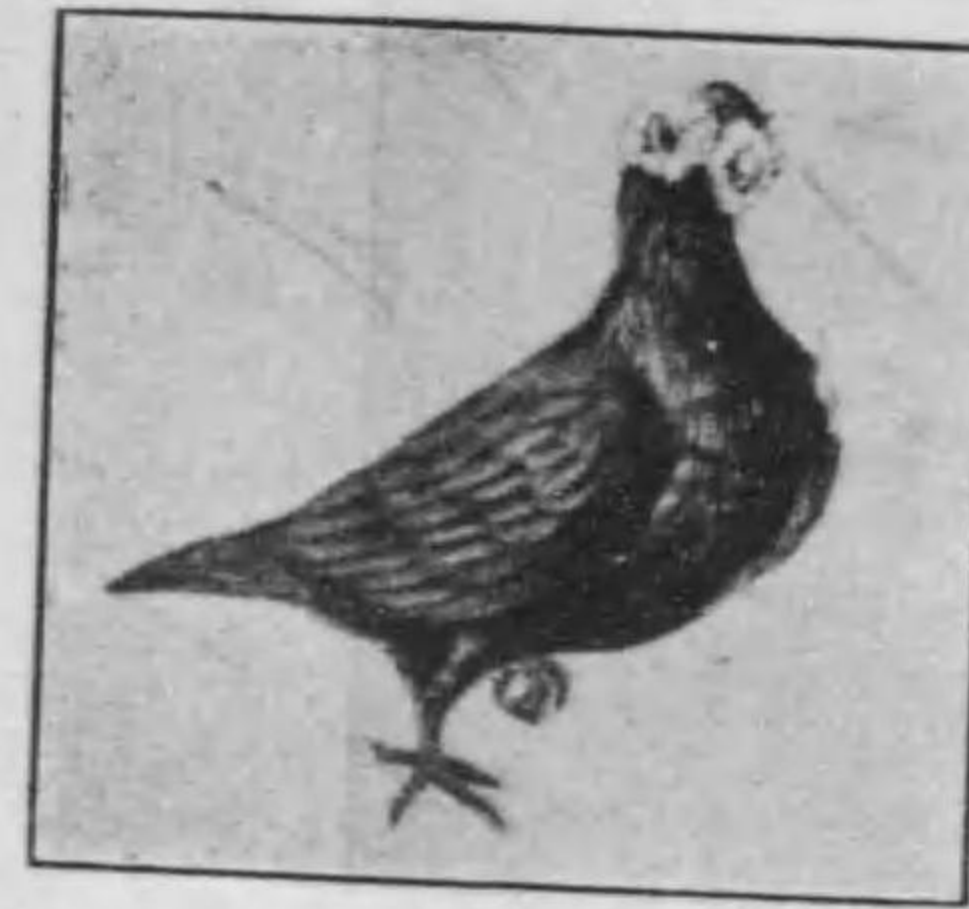
ホイトンアフ 圖百三第

(四) タンプラー
(Tumbler)

形貌は、通常の鳩の如くなれども、嘴は極めて短くある。空中に飛翔する際、突然頭をば背の方へ廻し、恰も角兵獅子の如く、幾回も、トンボ返りをなす奇性がある。

(五) ジャコビン
(Jacobin)

頭と頸とに、頭巾を被りたるが如き毛が生へて居る。



プーバ 圖六十九百二第



鳩 鏡 眼 圖五十九百二第



ラプアンタ 圖七十九百二第

(一) 鳩胸鳩
(Hoshokubo)

英名を「バウター」(Pouter)

(二) といふ味囊に空気を吸み込み、胸を非常に膨らす性がある。

(三) 眼鏡鳩
(Ganshikan)

英名を「キャリヤー」

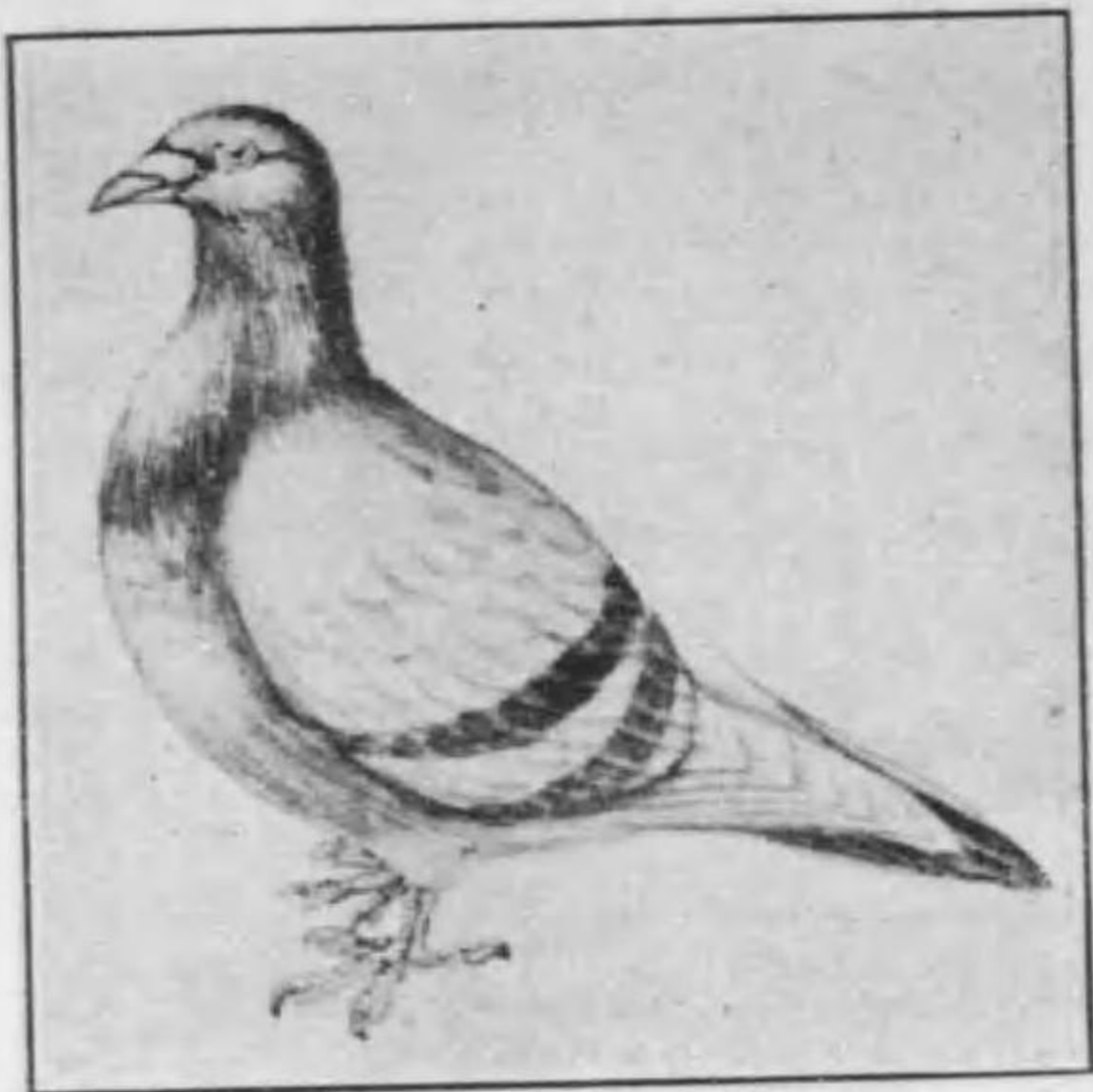
(Carrier)といふ嘴は一種格別に發達し、その基部は瘤状の肉垂を有する。

(三) バーブ (Barb)

頭骨は幅廣く、顔は短く、大いのである。

(二) 鳩又いへばミ

人家に飼養し、また神社佛閣に飼はれ、人のよく知る所の鳥である。これには多くの品種がある。今左に數種を述べん。



ト ン ラ 圖六百三第



1 ビ グ マ 圖五百三第



圖八百三第
ン ゴ ラ ド



圖七百三第
1 バ ツ ロ ク チ ツ イ ウ 1 ノ

(二六) 傳書鴿 (Homing Pigeons)

この類の鴿は、よくその棲所を記憶して、巢を

(二〇) 短顔アントワープ (Short-faced Antwerp)
(二一) アルチアングル (Archangel)

(二二) マグピ

(二三) ラント

(二四) ノーウ

(二五) ドラゴ

(二六) ノーウ

(二七) イツチ、ク

(二八) ロツパー

(二九) ノルウィチ

(三〇) クロッパ

(三一) ドラゴ

(三二) ノ (Dragon)

せるのである。

(八) ナン (Nan)

頭と頸背を被へる羽毛は高くなりて頭巾状である。飛び方は重々しいのである。

(九) トランベター (Trumpeter)



1 タ ベ ン ラ ト 圖二百三第



圖三百三第
プ 1 ヲ ト ン ア 顔 短



ル ゲ ン ヤ チ ル ア 圖四百三第

(六) タービット (Turbit)

頭の背部及び胸に生ずる羽毛の隆起が特獨のものである。

(七) ファンテイル (Fan-tail)

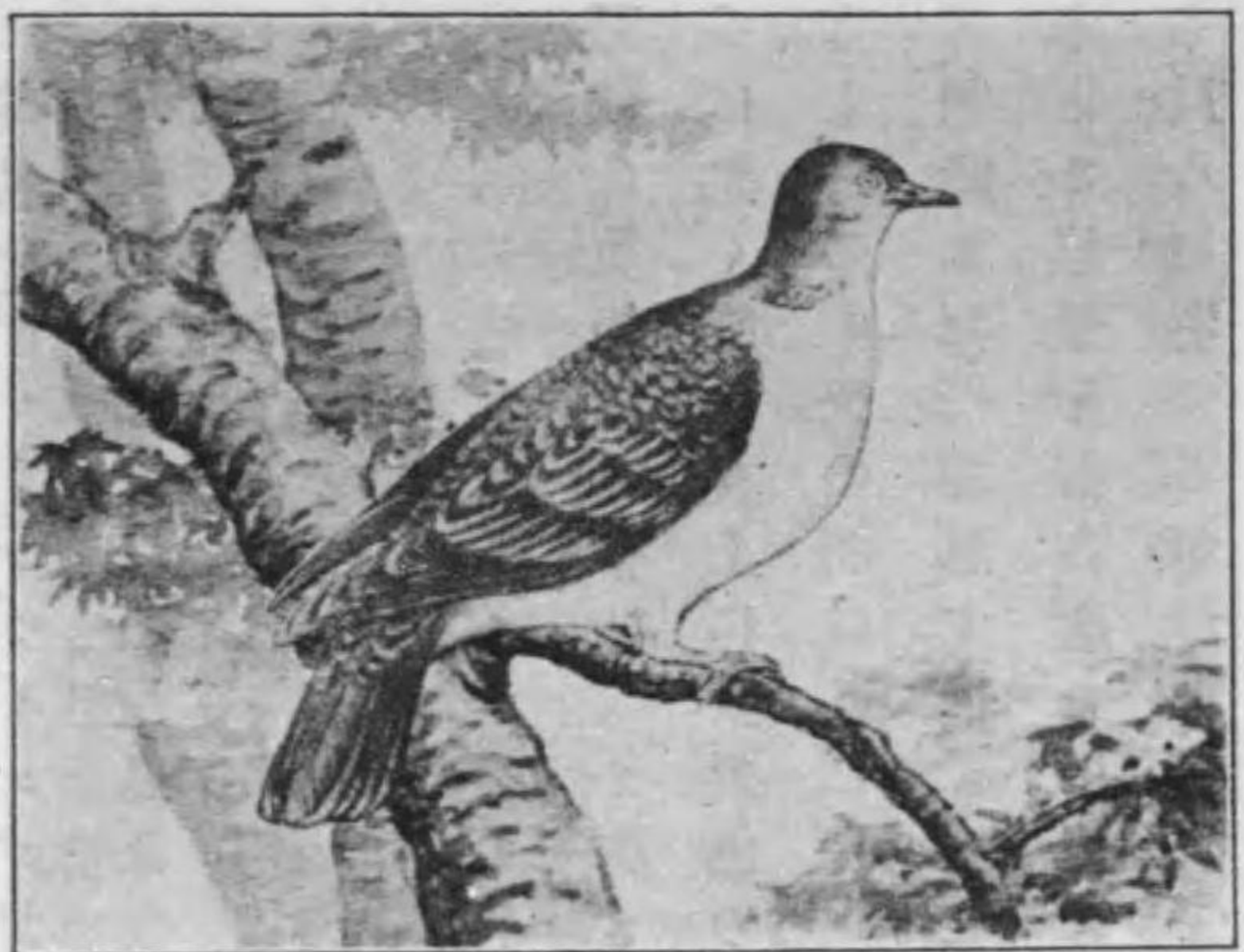
孔雀鴿の名がある。胸は幅廣く、尾翹は扇状をなして開展し、且つ之を絶へず、振動さ

慕ふ性質がある。そこで、この性質を利用して、他の場所に連れ行き、その飼はれたる所へ通信を開始することに用ひたものである。傳書鳩は、古代には、羅馬人に因りて使用せられ、また十二世紀より、今をさること約百有餘年迄は、回々教徒に依りて、シリア及び埃及間の通信に用ひられたのである。西暦千五百七十四年にライデンが包圍せられたときに、オレンジの大名は傳書鳩を使用して、この圍まれた都市と通信したのである。また千八百七十年に、巴里市が敵軍の爲めに包圍せられた時にも、交通上非常に役をしたのである。また千八百九十九年乃至千九百年に、レヂースミスが包圍を受け、たときも、同様に、重寶がられたのであつて、歐洲の諸強國は、近年迄軍事用として盛んに飼養したものであるが、我陸軍では、日露戰役の經驗に因り、この使用は、廢止したのである。

傳書鳩に、通信を運ばせるのは、尾に結び付けるのであつて、佛國では長さ一寸五分位の鴛鳥の風切をば、鳩の中央の尾羽に、挿入するのである。また、信書は、二寸五分平方位の薄膜の紙をば、小振にして、この鴛管の中へ、挿入するのである。尙用心の爲めに、小木片の楔を挿入して、止めとなし、その兩端をば、封蠟で閉ぢるのである。

(二) 雉鳩 *Turtur orientalis* (Latham.)

英名を「イースターン、タートル、ダブ」(Eastern Turtle-dove) といふ。翼長は五寸九分乃至六寸五分ある。頭と胸部とは、葡萄鼠色にして、少しく茶色を帯ぶ。腹部は淡赤茶色にし



第三百九圖 雌鳩

て、肩より少しく上に、黒と灰白の鱗狀斑紋を有する。風切と尾羽とは、黒褐色にして、尾羽の尖端は白い。この種は、本邦に最も多く棲息し、夏季は山地に、冬は平原に下るのであるが、又廣く亞細亞の南部と東部に棲息するのである。常に種子類殊に針葉樹の種子を嗜食するのである。

(三) 斑鳩 *Turtur risorius* (Linn.)

英名を「コンモン、インデアン、ダブ」(Common Indian Dove) といふ。前種よりは小さく、翼長は五寸四分乃至五寸九分である。肩と腕蹠とは、一様に帶褐灰色

にして、後頸には、黒色の半輪環を有する。この種は、夏季本邦の南部に來れども、未だ北海道には産せざるのである。またその分布は、土耳其、小亞細亞、印度セイロン、バルマ、及